
とある奇跡の平行世界

雨宮茂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある奇跡の平行世界

【Nコード】

N2125X

【作者名】

雨宮茂

【あらすじ】

原作・とある魔術の禁書目録

の二次創作。

とある奇跡の平行世界パラレルワールドです。

物語は学園都市、LEVEL5の麦野沈利と上条当麻が出会った世界。本当にパラレルワールドです。原作と一切関係ない上にストーリーも違います。

今回のカップリングは上麦。つまり上条×麦野です。

こんな駄文の作品を読んで下さる皆様に御礼申し上げます。

出会っていきなり

「アハハハハッ!! どおした! さっきの方が粋が良かったぞ!!」

「ガハッ……や、やめ、あアアアギィィアアア!!」

男の腹を貫いた電子の極光は周りの肉をブスブスと溶かし焦げた異臭を漂わせる。

「……本当にゴミだな」

先程までサディスティックに染まった女の顔は今は無表情で、無惨に命を散らした武装集団の一人は裏路地の生ゴミになっていた。

詰まらない。残虐と惨殺を繰り返し、電子を操る女王はそう呟く。

だいたい先に絡んできたのはこのチンピラなのだが、余りにも小物過ぎた。

「毒を喰らわば皿まで、殺される覚悟も無いのに闇に浸かってんじやねえよゴミが」

何も言わない物に麦野は未練も無ければ後悔さへない。ただあったのは、虚無感だけだった。

その場を去る時ふと、空を見上げ震えた声で呟いた。

「私は……もう無理なのかな?」

ざわざわと耳鳴りがする。重い足取りで歩くなかふと、思い出したのは今朝の事だった。

『もう君の能力〈原子崩し〉は進展しないだろう。まあ心配しないでいい工業分野では〈原子崩し〉は貴重だからね。今の位から――』

……………ねええよお

関係ねえええんだよおおオオオオオオオオオオ！！！！

私はLEVEL5だ！

学園都市LEVEL5の〈原子崩し〉麦野沈利だッ！！私より上位の奴なんていらねえんだよ。なのに三人も居やがる！！

認めない、認めないッ！！

私の能力がこの程度だなんて認めてたまるかアアアアッ！！！！

激情のまま研究所を出て、虚無の思いで迷い込んだ学園都市の裏の道。

真っ暗闇。

そして、知らずに絶望した。自分はどんなに足掻こうとも生きていけないのは闇が付纏うこのクソツたれな世界だけなんだと。

どんな顔をして歩いていたんだろう？ 気付けばLEVEL0に絡まれていた。経緯？ 覚えてなんていない。どうせテリトリーに入っただけだ。

そして爆発した怒りと理不尽な憤りをぶつけ二度絶望した。人殺し、でしか私は存在意義が獲得出来ないみたい。

ガン！ となにか蹴ったが見えない。空き缶かなにかだろう。誰にも気付かれず消えていった何かに私は寂しさを覚えた。

誰も見てくれない。

……………ああ

「そうだ。……私も消えればいいんだ」

そうすれば少なくとも、もう序列や自信のプライドに追われることもない。

どこにしようか？

死ぬのは一人がいいな。誰にも見られず、知られず。ただ静かに……

力の入らない足で歩き出す。

咽せかえるような漆黒は何も言わず私を包んでくれた。生きることが否定してくれた氣もした。

行こう、終わりまで

夜風が髪を乱す。それを気にすることも出来ないくらい麦野の心は真っ黒になっていた。

〈原子崩し〉

LEVEL 5

第四位

その肩書き全て他人と比較するようなものだった。

破壊の能力は他を圧倒するために、希少なLEVELは他を抜かし見下すために、そして第四位という地位は――さらなる向上を可

能にする数字だった。

いつも何かと誰かに麦野は立ち向かいハードルを越えてきた。確かに最近行き詰まっていたが、第三位を超えるという“御坂美琴に向けた”目標は少なからずあった。

いつも壁がある理由は他のモノがあって確立されていたのだ。

しかし、今はどうだろう？

能力の成長。LEVEL5である麦野はもう成長出来ない、と踏んでいるかもしれないが少しばかり違う。演算能力、能力持続時間、精密な能力行使。

こう言った成長もLEVEL5には存在する。だが麦野はもう今のレベルから次に進めない。

初めてぶつかった自分自身という壁。初めて直面した己との競争。

天才とは不器用な生き物だ、と思う。

幼い頃から躓き、転げる事をしらない麦野には今の状況は地獄も当然。初めての躓きの対処法が解らない。頼れるのは自分の筈なのに、躓いた原因も自分なのだ。

負の連鎖から逃れられない。見つけ出した答えは、逃げだった。

いつの間にか無風になっていた。そしていつの間にか、河川敷に立っていた。

「水死体、か。……嫌だなあ」

思わず微苦笑した。まだこんなこと考えてられるのか。自分の図太さに半ば関心、半ば呆れ。

麦野はサンダルを脱ぎ捨てると川に足を下ろした。6月と言えど冷たくて、肩が震えた。

チャプ……、と暗い世界に水音が消えていった。

昨日の雨で水嵩が増え流れが急になった川は中央に進めば進ほど流れが速く、流されそうなのを耐えながら麦野は水の中を進む。

腰が水に浸かったとき、誰かに思いっきり腕を引かれた。

「何やってんだ、アンタ！」

「はあ!？」

後になって麦野はなんで人がこんなに近くにいて気付かなかった自分以後悔した。

「こんな時期に川に入るなんて自殺行為だぞ！早くあが」

「うるせえ！その志願者だ関係えねえだろ！」

街灯で僅かに見えたのはツンツン頭の青年が怒ったような焦ったような表情だったが、言い終わらぬうちに返された麦野の言葉ではつきりと怒りに染まった。

「馬鹿野郎ッ！テメエ自分の命をなんだと思ってる、少しは考えたことあんのか！」

「なんで説教されなきゃいけないんだ！私の命だ、私が好きに使って何が悪いんだよオオオッ！！！」

パン！と鋭い音が鼓膜を震わせる。

「なにが好き勝手に使っていいだ！命は物じゃねえんだ。もつとよく考えろ！！」

「つの野郎！テメエ尻の穴増やしてやる！！」
水に浸かった腕を振り上げると麦野は数十センチ先の青年に向かって手を翳す。

が、しかし

「あああッ！」

川底の小石に足を滑らせ〈原子崩し〉を撃つより先に流された。

「うわああ！」

ついと言わんばかりに腕を掴んでいた青年も踏ん張れず、予想以上の川の流れに巻き込まれる。

水の中は目を開かれない。しかし右腕を掴む感覚に麦野は心の中で盛大に罵倒した。

離しやがれこの説教魔神がああアアアアア！！！！

息が苦しくなる。しかし助かる訳にはいかない。麦野は最後の力で右腕を振ったが青年の手は決して彼女を離さなかった。

意識が擦り切れ力が抜けていく麦野をその手が水面に引き上げる。

「プッハア！あー、死ぬかと思った」

「うっ！ゲホッ、ハア……ハア！……なんでだよ」

「あ？なんですか？」

「なんですか？じゃねえええんだよお！！勝手に偽善押し付けやがつて迷惑だ！風穴空けられねえと解らないのかアアアア！？」

緩やかな流れの所まで引きずられた麦野は青年の胸倉を掴んだ。

「違うな。解ってないのはアンタだ」

「……いちいち説明してやらねえと理解出来ないのか……。このクソガキがア！」

「死んでどうなるんだ！逃げてるだけじゃなんも変わんねえぞ！！」

口論は激しさを増し青年も麦野の胸倉を引き寄せた。息がかかる程近い距離。そう変わらぬ視線。

青年が見たのは、
名も知らない彼女の絶望と虚無、やり場のない怒りに濁った瞳で、

麦野が見たのは、
名も知らない青年の誰かの為に怒り悲しめる澄んだ瞳だった。

この青年が助けに来たときから分かっていたこと、それは彼は“表の住人”であること。

人一倍プライドの高い麦野は青年の腕を弾き押さえていた衝動を突き動かした。

「もういい。死ね」

青年には光が爆発したように見えた。

「うおおっ!!」

パキィィィン!!

砕け散る音と共に麦野は目を見開いた。

「な、テメェ何者だ!」

「上条さんは、ただのLEVEL0だよ」

「巫山戯んなァァァ!」

麦野は距離を取ろうとするが水の中は思うように動かない。そして上条は麦野に近づき左手を取った。

「ほら、上がるぞ。風邪引いちまうからな」

「なんでだよ……」

泣き出してしまいそうな震える声に上条は振り向くと麦野は瞳にいっぱい涙を溜めていた。

「おい、泣くなよ…な？」

「なんなんだよ。この世界は私に死ぬことさえ許してくれないのか？」

「……………」

何かに潰されそうで、迷子のように孤独な人を、上条は静かに抱き締めた。

なぜだか、こうした方がいい気がしたからだ。昔、小さい時に一人で寂しくてどうしようもなかった時、母決まって優しく抱き締めてくれたことを上条は思い出した。

「泣いてもいい。誰も居ないから」

「お前がいる」

「あー、あれだ。上条さんは人形かなんかだと思って独り言でもいいんじゃないですか？」

「……そうね」

麦野は上条の胸板に顔を押し付け、小さく泣いた。いつの間にか腰に回された手は彼を離すまいと強く、固く握り締められていた。

上条は、そんな彼女の肩を強く、固く抱き締める。そして耳元でそっと囁いた。

「生きてくれ。死ぬなんて馬鹿なことしちゃ駄目だ」

「うう……あああああ!!」

夜の帷を掻き乱す彼女の悲鳴のような泣き声は響いた。

それから何分たっただろう。麦野は上条からそっと離れると、まだ潤んだ瞳は前よりすっきりしているように見えた。

「なんか、変なことに突き合わせちゃって悪いわね」

「いいよ、思いとどまってくれたならそれで」

「流石にこれ以上水に浸かるのさヤバいわね。上がるよ上条」

「はいはい、……ん？」

「どうしたの？」

硬直した上条に麦野は首を傾け、上条は恥ずかしそうに頭を掻いた。

「いや、名前知らなくて。教えてくれないかな？」

「……麦野、沈利。あんたは上条なに？」

「当麻。上条当麻だよ。よろしく麦野さん」

差し伸べられた右手に麦野も応えるように右手を差し出す。感じた温度は冷たくて二人揃って驚いた。

「冷たいな麦野さん」

「馬鹿、上条だって冷たいんだから。ほら、ぼさっとしない」

「へいへい」

岸边に上がると空気が生ぬるく感じた。しかしそれは風が吹かなければの話で少しでも風が吹くと、また二人揃って身震いした。

「ううっ！死ぬ?!」

「流石にキツイわ。……あ、サンダルどこだっけ？」

「……買ってきましようか？」

「かーみじょ、アンタ財布無事なの？私の携帯も財布の中身もパアよ」

「……う、今月の食費が……」

あまりにこの世の終わった顔をして四つん這いになった上条の背中に麦野は優しく手を置いた。

「札が駄目なら、銀行行けば替えてくれるし、カードが駄目なら再発行すれば大丈夫よ。判子忘れずにね」

「でも携帯が…」

「それなら今カップルで契約すると安いみたい。ついでだから上条の分まで買ってあげるわよ」

「いや流石に携帯は…」

「ああッ！ウザったいわね。あれだけ押し付けがましくやった割には自分には駄目です、ってかああッ？」

「そうじゃなくて」

「なら私がアンタの分まで買う、決定！言っておくけど覆さないから」

「まったくこの女王様は」

「なにか言った？」

「いえ、全くなにも言ってません」

立ち上がり辺りを見渡し上条は腕を組んだ。だいぶ流されたらしく、ここから自分のアパートまで近い。

「麦野さん家近く？」

「うーん、遠いかな。携帯は壊れてるし、車呼べないし」

「なら俺が済んでるアパートまで来る？」

「はあ!?!」

服を絞っていた麦野は手を止め、今日一番の間抜けな声を上げた。

「なに言ってるの!」

「卑しい意味ではありませんよ!ただ風呂くらい入って体温めてからでも」

「思いつきり卑しいじゃねえかッ!」

またもや極光が上条に直進する。反射的に右手を突き出し彼の知らない能力〈原子崩し〉を防いだが麦野は厳しい眼差しをおくる。

「それに能力を打ち消す能力なんてチート技聞いたことないわよ」

「でも歴としたLEVEL0だ!」

「へえ、なら何発でもブチ込んでいいのね」

恐ろしい事を口にした麦野に上条は思わず顔が引きつり、冷たいものが背中を走った。

「や、止めて。それに、ほら寒くてもう限界ですよね」

「関係ねえんだよ。カアアンケネエエェンダヨオオオッ!?!なんでテメエは〈原子崩し〉を喰らってケロッとしてやがる!LEVELなんてちやちな問題だなアア!」

「なんかスイッチ入っちゃった?!」

麦野が標準を合わせるように手の平を上条に向け、上条は右手を突き出した。

「うぐ……」

目の前で麦野が崩れ落ちた。

「大丈夫か！」

「本格的にヤバイ。……暖かいなあ、かーみじょ」

「おい！死ぬなよ。死んだら許さないからな！！」

それから先の事を私は覚えてない。ただ、当麻の腕の中がとっても温かくて安心できて、というっかり寝てしまった。

見える風景

「目が覚めたかい？」

ぼんやりとした意識の中でカエルによく似た顔をした白衣の医者を見て、私は小さく頷いた。

「そうか、良かったね？ 低体温症になりかけて危なかったんだよ。ほら隣にいる上条君も一応入院してもらってる」

言われて左隣を見たら、夜でよく見えなかった黒くてツンツンした頭がよく見えた。

「なにがともあれ今日中には退院できるからね。お大事に」

去って行く医者に麦野は小さく礼を述べた。

「気にする事はない。僕の仕事は患者を助ける事だからね？」

パタンと扉が閉められると静寂だけが麦野を包んだ。

正直、動くのも気怠いが喉に渴きを覚えベッドから起き上がる。

「絹旗達に連絡入れないと」

誰が置いてくれたか、解らない携帯を開く。やはり水のせいで使い物にならない。財布も札はふやけて濡れている。乾かせば使えるが、カードは大丈夫だろうか？

「ま、行くか」

手っ取り早く小銭を取ると麦野は自動販売機のあるフロアを目指して歩き出した。

三階フロアの暇潰しように雑誌やら本やらが置いてある小さなスペースに自動販売機があった。そこに硬貨を滑り込ませ、スポーツドリンクのボタンを二回押した。

二本出てきたペットボトルを手に取り今来た道に戻る。

静かな朝だと麦野は思った。病院全体が停止しているような無音の世界。たぶん防音がしっかりしているのかもしれない。なにも考えず歩いていると部屋の前についた。念のためノックをしておく。

「どうぞー」

返事があった。

「起きたの、おはよう」

「おはよう麦野さん」

「スポーツドリンク、飲むでしょ」

投げると上条は両手で受け取り、意外そうにペットボトルと麦野を見比べた。

……なにあり得ねえみたいな面してんのよ

しかし実際気遣う事も少なければ、性格が性格であり麦野は溜め息混じりにベッド腰を下ろした。

「ありがとう」

でも、背中からかけられた無邪気な声に知らずのうちに彼女は嬉しそうに微笑んでいた。

「どう致しまして。今日中には退院できるそうよ」

キャップを捻り、取ると麦野は喉に流し込んだ。さっぱりとした甘さが冷たさと共に流れ落ちていく。口を離してみればもう半分もなかった。

「今日暇なら携帯買いに行く？」

「そうだな。学校終わってからじゃ駄目か？」

「学校、ね。高校？」

ぶはぁ、と声がして振り向くと上条は全品飲み干していた。

「そう、一年生だけど。麦野さんは大学とか？」

「はぁ？ 高三だけど」

「嘘?!」

持っていたペットボトルを上条に全力投球した麦野は痛みに悶絶す

る彼の腹を全力で踏みつけた。

「ゴハッ!？」

「アンタといい、絹旗といいなあんで同じリアクションが返ってくるわけ? どーして私が大学生なのよ!」

「それは大人びてるガァァァァ!」

「聞き飽きた言い訳ね! かーみじよ死ぬ覚悟決めろ」

絶対無慈悲の光閃はまたもや上条の右手に阻まれ幻想だったように
〈原子崩し〉は消え去った。

「やっぱチート野郎だなテムエ」

「そんなこと無いですよ! グフツ、物理的な物は消せないンガァァ
!」

「あはははは! 楽しいなあ」

「上条さんで遊ぶの止めてええ!」

取り敢えず腹部を圧迫する足を掴み退けようとして上条当麻は気づいた。着物に形の似た入院中の服から覗く美しい足のライン。そしてもう少しで見えてしまいそうな桃源郷。

上条は今までなかった程の抵抗を見せた。

「麦野さん麦野さん! お願いですから足を退けて下さい!」

「あら、ずいぶんと元気になったわね。もうちょっと遊べるかな？」

「駄目だって！見えちゃうから！」

「見なきゃいいじゃない」

「そんな問題じゃなあああああい！！」

手足を振り乱して抵抗する上条はさながら、ひっくり返った亀で麦野の心に火を付けた。

「ほおら、どうした？もうへばったのか？だらしねえな」

「うぎゃああああ！」

「あははは、ふふふ、もがけ足掻け！もっと私をを楽しませろ！」

「スイッチ入った！絶対入ったよこの人！」

無駄だと分かっているけど抵抗せざるをおえない上条は届きそうで届かないナースコールに手を伸ばした。

「なに？かーみじよはナース交えてがお好み？」

「違う！助けを呼ぶんだよ！てか、麦野さん落ち着いて俺の胃と肋骨がヤバいんですけど！」

「肋骨くらい折れても死なないわよ。肺に刺さるかも知れないけどね」

「いやあああああ！！」

「萎えてんじゃねえぞ！それならまだジジイの×××の方が元気だぜえ！！！」

「女の子が下品な事言っちゃいけません！」

「アンタは私の親か！」

一通り上条で遊んで上機嫌になった麦野は足を退け、ベッドに座った。上条は未だに精魂尽きたかのように床で微動だにしない。

「かーみじょ、床の寝心地はどうかにゃーん？」

「冷たくて硬いです」

「私にはこのベッドも十分硬いわ」

のろのろと起き上がり上条はベッドに倒れる。布の柔らかい感触に楽園のような世界。うっとりしながら問う。

「へえー、十分だと思うけど、麦野さんはどんなベッドで寝てるのでしょうか？」

「クイーンサイズの天蓋つきのベッド」

「ッ！……寝室ずいぶん広いですね」

「それでも無いわよ？」

上条はこの一言で直感した。絶対広い。広い上に豪華だと。金持ちの常識は多くの場合非常識な事がある。その古典的例が今、目の前にあるのをしみじみと感じた。

「さて、服乾いたかしらね？」

「うん……どうでしょう」

「なに黄昏てんの、かーみじょ」

「はぁ……」

「駄目ね。心ここに有らずだわ」

また静かになった部屋に控えめのノック音が響いた。

「どうぞ」

「失礼します。お目覚めはいかがですか」

顔を覗かせたのは看護婦だった。

「悪くはないです。服は乾きました？」

「はい、乾きましたよ。退院はもうできるようです」

服を手渡すと看護婦は小さく頭を下げて退室した。それを見届けると麦野はおもむろに服を脱ぎ始める。

「なっ！いきなりなにを！！」

「着替えるのよ。悪い？」

「場所を考えて下さい！」

「ここ以外のどこで着替えろって？女子更衣室なんて無いわよ」

「では、カーテンをさせて頂きます」

シャツ、と金具が滑る音と布擦れの音が聞こえた。振り向けばキチンとカーテンをしており、シルエットで上条も着替えてる事が分かる。

「ねえ、携帯買いに行くのはいいけど。どこで待ち合わせするの？」

「麦野さんも学校あるだろうし、場所を覚えてくれたら迎えに行きますよ」

「学校なんて行ってないわよ」

「いやいや、高校三年生なら色々忙しい時期なはず。就職か進学かでも一大決心ですよ」

「授業内容なんてメイクしながら聞いても理解できるようなものばっかりだし、正直退屈だから学校に行ったのは一年の最初辺りね。就職、進学はどうでもいいや。あと敬語は止めて、なんか鳥肌立つわ」

メニューの最後にデザートを頼むような気軽さで敬語を使うと言
う麦野に上条はシャツのボタンを閉めながら戸惑った。

年上、しかも女性にタメ口やフレンドリーに接する自信さへ上条に
はない。

「あー、それはちょっと無理かも」

「川の中で散々言った割には弱腰ね。覚えてるわよ、アンタが私に
ビンタしてくれたの。痛かったわあ、本っ当に痛かった」

どこか咎めるような麦野の声音に上条は小さくうなだれた。つい、
とかそんな言い訳は出来ない。

彼は一応紳士なのだ。ここは素直に謝ろうと腹を括る。

「その節においては本当に申し訳御座いません！上条当麻は出来る
限りの罪滅ぼしを覚悟している次第であります」

「そう？なら第一の命令、敬語は使うな。あんたより年下の奴なん
て生意気言ってきたりするんだから」

「麦野さんは交友関係広いのか？」

「うーん、微妙な所ね。命令追加で麦野さんは禁止。麦野でいいわ
よ」

次から次に来る命令は別段難しい訳でもないのに上条は戸惑った。

彼は言うほど体裁を取り繕う、と言うほどでもないのだが麦野から

感じる何かが上条の本能に語りかけていた。

危うい脆さのなかに、深い狂気が渦巻いたような言葉で表せない存在。それが上条当麻から見た麦野沈利という人間だ。

軽々しく触れてしまうと崩れ去っていきそうで、どうにも距離感が掴みづらい。

そんな思考の海に浸かっているとカーテンの奥から嘲笑めいた弱々しい笑い声が聞こえた。

「ははは、ごめんね。そりゃ、いきなりこんな変なこと言われたら気持ち悪いか。上条がいいと思う接し方でないと駄目よね」

「麦野さ……いや、麦野そんなことないぞ。ただ上条さんはですね、その美人さんに知り合いがいなくて、こうなんと言うか」

咄嗟に言ってしまった事に慌てて付け足したが、もう何が何だか分からなくなり、終いには頭を抱えていると後ろから麦野が顔を覗かせた。

「かーみじょう、ありがとね」

「あ……」

初めて見た麦野の笑顔は柔らかく木漏れ日のように温かな微笑みだった。それはいつもの彼女を幼く見せたが、直ぐにカーテンの奥に引っ込んでしまった。

残念だ、もっと見たかった。そう言った感情が胸の内を巣くうとなんだか恥ずかしくなり、頭を左右に何時振ってこの思いを払拭させる。

「よろしくな麦野。あとさっきの可愛かったぞ」

「当たり前よ、素がいいんだから」

「日本人なら謙虚になるべきだろう！」

「欧米諸国では自分の感性否定されたと思って逆に怒られるわよ。過剰に返してもアメリカンジョーク？みたいな感じに受け取って貰えるみたいだし」

カーテンを取り払った麦野はベッドに腰を下ろすと滑らかな曲線を描く脚を組んだ。

「まあ、必要なのは個性よ。一人くらい居てもいいんじゃないこんな日本人」

「そう、だな。確かに謙遜する、だとか謙虚な姿勢ばかりじゃどうにもならないよな」

「でもサラリーマン業界に喧嘩売ったような台詞よね」

「んー、親父の弱腰を思い出すな。昔はなんでそんな頭下げるんだ？なんて思ってたけど、必要な事なんだな」

「いつかそんな時代がアンタにも来るわよ」

「ひ、否定できない……」

未来の予想図を展開させた上条は、今まで見てきた仕事での謙遜した父に自分を重ねよく分からない焦燥感に駆られた。

その引きつった上条を見て麦野は小さく笑った。

「人間万事塞翁が馬、これから先どうにかなるわよ。サラリーマンになりたくないなら今からでも遅くないんじゃない？」

「でも、学園都市って科学者と学生の集まりだし、働き場ってあんなのかな？」

「さあ？どうなのかしら」

あっさり切り捨てた麦野は残りのスポーツドリンクを飲み干しゴミ箱へ投げる。それは放物線を描きボスッ！と音を立ててゴミ箱の中に収まった。

「おいおい、自分の人生だぞ？麦野は不安にならないのか？」

「殆ど将来安泰だからかな。気にしたこともないのは確かね」

聞けば、ふざけているのか？と聞きたくなるほどの楽観的物言いだが事実、彼女は学園都市が誇るLEVEL5。将来安泰と言うのは間違いではない。だがしかし、それは学園都市が生み出した闇、そこに生きる者でなかったらの話でもある。

そんな事をぼんやりと考えた麦野は目を細めた。

やっぱり、眩しいなあ。こんなちよつとした雑談なんていつ以来だろう？『アイテム』のメンバーでも多分ここまでは――

その思考に至って麦野沈利は衝撃が走った。『アイテム』の皆は信頼できる仲間だ。なのに最後の壁を破って麦野沈利と言う人間として接しなかったのに、出会って1日も経っていないこの青年にはそれをさらけ出している。

自己分析ではあるが麦野沈利は他人に触れられるのを嫌う。体ではなく心にだ。なのに自分から人間である麦野沈利を表に出す。その行為はまるで上条に人間としての自分を見て、触れて欲しいのではないだろうか？

そんなこと――

「有り得ない、わよね」

消えてしまいそうな笑みでそれを否定した。

なぜだか、そうしないと自分が消えてしまいそうな気がしたから。でも――

「おい、どうした？」

哀愁漂う空気を察したのか心配そうな上条の顔が近くにあった。

「なあんでも無いわよ。ただ、上条が眩しいなあ、なんて思っただけ」

「お、おう」

麦野の柔らかく、しっとりとした両手が上条の両頬を包む。

まるで宝物を撫でるような動きで麦野の手が上条の頬を行き来する。くすぐったくて身動きをすると麦野はゆっくりと手を離れた。

「おかしいわね。本当におかしいの。私と上条、まだ出会ってそんなに時間経ってないのよ?」

「麦野どうした?なにが悲しいんだ?」

「そんな、表情かおしてる?」

「してる。頼りないかも知れないけど、言ってくれ。そしたら力になるから」

ああ、やっぱり。

――私はどうやら……

「いつか言えたら言うわ」

「約束だぞ!麦野はなんだか無茶してるからな」

「なによ、それ」

『私』を誰かに見てもらいんだ。

でも、それは多分他の誰かじゃなくて、アンタなんだよ当麻。

私を化け物じゃなくて最初から最後まで人間として見てくれた当麻じゃなきゃ駄目なんだ。〈原子崩し〉をもろともしない当麻じゃなきゃできないこと。

「それじゃ、先ずは退院しよう」

「へ？」

「退院おめでとう御座います上条当麻様。今年何回目ですかね？」

「は、ははは。えっと10くらいかな？」

「記録更新しないように頑張ってくださいね？はい、どうぞ」

「はい、どうも有り難う御座います。頑張ってみますね」

保険証を受け取りソファ―に座っている麦野を見つけ小走りで近寄る。

「待った？」

「ん、ちょうど公衆電話で連絡取ったとこよ。それよりアンタってよく入院するのね」

「ははは、そうなんだよ。不幸な星下に産まれてしまったがために」

「それって単にかーみじょうがトラブルに突進してるのも原因の一端よね？」

ズバツと言いつつ麦野に上条は困ったように笑った。

「でも困ってる人見捨てられるの出来ないんだよ。確かに見捨てたらこんなに入院しないけど、後でその人が入院とかすると思うと体が勝手に動いてて……」

誰かを助けるために行動する揺るがない精神。誰かのために怒って笑えるこの青年の美德なんだろう。そんなものは普通に過ごしていて身に付くものじゃない。理由があるとすれば、

「ねえかーみじょう、アンタさ昔酷いこととか、どうしようもなく寂しいことってあった？」

「……………」

今まで締まりのない表情をしていた上条当麻の表情がすっぱり抜け落ち、すぐさま驚愕に彩られた。なにかを言おうとして失敗した。口が中途半端に開いて呻いたような声が、あの輝いていた青年から零れ落ちる。

それだけで理解した。麦野は上条のトラウマを掘り起こした。それを理解するのには十秒も要らなかった。

「ごめん」

痛々しくて目線を合わせ辛くなり、自然と麦野の口から謝罪の言葉が出た。

あれだけ笑っていた彼が、曇らせてしまった。

「うん、こっちこそごめんな？ 変な空気にしてさ。初めてなんだ、多分そうやって俺の行動の根元を聞かれたの。よく……分かったな。気にしたこと無いけど多分そうなんだと思うんだ」

「寂しい夜を過ごせ過ごすほど人に優しくなれる。そんな事を誰かに聞いてね、あとはなんとなく」

「そうか」

「行きましょう、アパートか学校まで送るわよ。やっぱり私がかーみじょうを迎えに行くわ」

先導するように麦野は自動ドアを潜った。黒い車が目の前に止まっ
ていて麦野が窓ガラスを軽く叩くと直ぐに扉が開き上条を手招きす
る。

「ここからは上条が先導よろしく。まずはアパートでいいの？」

「ああ、そうしてくれ」

車に乗り込むと運転手の男が怪訝そうな顔をしたが直ぐに自然を前
に戻す。

「どこまでですか？」

「えっと第7学区の男子寮です」

「いっぱいあるぞ、かーみじょう」

まさに運転手の内心を代弁した麦野は流れていく風景を眺めていた。

近未来的風景は白を基本として申し訳程度に街路樹があるどこか殺風景な世界だった。

「あ、そこ左をお願いします」

でも何故だろう。今はこんな世界も捨てたもんじゃない、と麦野の中で囁いていた。

「真っ直ぐで大丈夫ですよ」

「はい」

それはこの青年のおかげなのだろうか？

見える風景（後書き）

後書き、と言いますか上条当麻の人間性？について

※読まなくても大丈夫です

上条の人助け行動の原点って昔の自分が受けた痛みとか、境遇も理由の一つなのでは？
と思います。

殆どは本来の性格からかも知れませんが必ずしもその性格だけが理由にしては上条当麻の行動は不自然に感じます。

しかしあの幼少期の上条当麻がその境遇をバネに今があるならば、個人的に納得できますね。

と言う感想でした

指先からのメッセージ（前書き）

感想やお気に入り登録ありがとうございます！御座います！

指先からのメッセージ

上条当麻を学校まで送り届けた麦野は『アイテム』のアジトではなく、自分の家に帰った。

浴槽に湯を張る為に、タッチパネル式の操作機器のボタンを押す。後は待つばかりだ。

昨日から立て続けに事が起き正直、精神的に疲弊している。熱いお湯に浸かって少しでもこの倦怠感をぬぐい去りたいくらいだ。

「……〈原子崩し〉、か」

精神の疲弊の大元の元凶だった。超能力者である事に誇りを持ち、完璧であることに意義を満たす彼女としては、やはり自身の能力である〈原子崩し〉の成長は必要不可欠。

しかし科学者にはもう成長の兆しはないと判子を貰ったばかりだ。

「どうやったら、先に進めるかな？」

あの青年に助けてはもらったが、やはり壁は巨大で、覆しようもないもの思えて仕方ない。

逃げる事は、いつでも出来る。だがここでまた逃げたら、一生第四位のままなのは確定だ。

「それは、イヤ……」

逃げたいのに、逃げられない。激しいジレンマに麦野はソファアに倒れ込む。天井をぼんやりと眺めていると、機械的な音が鳴った。

「ん、溜まったみたいね」

適当に服を掴むと麦野は浴室に足を向けた。

麦野は分かってる。この問題を後回しにすればいつか、とんでもないしっぺ返しが来ることくらい。

「今日麦野、超来ないみたいですよ」

「珍しい。はっ！まさか恋人が出来た、とか？」

「超有り得ないですよフレンダ」

だよねー、と言った本人フレンダと言う少女は笑い飛ばす。

金髪碧眼とあからさまに日本人ではない容姿の少女は携帯を弄っていた。

「……南から電波がきてる」

どこか生気の抜けたジャージ姿の少女、滝壺理后はボソツと囁いた。いつもの事なのでこの発言は基本無視していい。

「でも、いきなり病院に車寄せ、つてのは超驚きました。……………めぼしい映画はないみたいですね」

パタンと雑誌を閉じたこのメンバーで一番幼い絹旗最愛はコーラを飲み干す。

「入院沙汰なんて麦野にしては珍しい訳よ」

「むぎのも人間。珍しくないよ」

おっとりした滝壺の言葉に絹旗とフレンダは揃って、それを否定した。

「あの麦野が？入院するような怪我しない訳よ」

「そうそう、上から四番目の人を超病院送りに出来るのは、超それ以上か同じLEVELの人間だけですよ滝壺さん」

「そうじゃなくて、むぎのは“人”なんだよ？」

滝壺が言うことには一理ある。しかしLEVEL5はそんな生易しいものじゃないのは体験済み。LEVEL4とLEVEL5の間には決して越えられない壁があるのだ。

その力がどうにも人間であること事を忘れさせる。

むしろLEVEL5は人間として扱える者なのだろうか？とフレン

ダは心の中で呟いた。彼女の導き出した答えは、無理に近い、だった。

「アレが人間なら不公平だよな」

「…フレンダ！」

思わず出てきた言葉は絹旗に咎められ、流石のフレンダもさっきの一言を悔いた。

その麦野に助けられたことは沢山あるのは事実でもあった。

「ごめん、言い過ぎた」

「…超気をつけて下さい」

それからぷつぷつりと途切れた会話の糸はなかなか修復できず三者三様の反応を見せた。

フレンダは昔を思い返すように目を伏せ、口元は頬杖をついて隠す。

絹旗は苦汁を舐めたような表情をして膝の上で硬く拳を握り締めた。

滝壺はどこか遠くを輝きのない瞳で見つめていた。

やはりLEVEL5に対する感情の根源には“恐怖”と言う物が多分に含まれている。それは仲間内であっても覆されるものじゃない。

そして、さらに言えば麦野は他のLEVEL5より感情の起伏が激しい。例えて言うならば、ランダムで爆発する爆弾のような存在だ。

もしくは知性のある猛獣と言ったところか。

どちらにせよ、まだ人間の範囲に収まるフレンダ達には手に余る事に違いはなかった。

「……ちよつと外の空気吸ってくる。戻って来ないから」

しかしそんな彼女でも優しかったのは事実だ。それさえも、否定した自分に嫌気が差したフレンダは手短に告げるとファミレスを出た。時間は午後四時半、六月特有の湿った風が金色の髪を靡かせた。

フレンダが出て行った後、絹旗はファミレスのソファアの上で縮こまっていた。やはり申し訳なさそうに、うなだれている。

「私……」

「うん」

重たい口を開き、それでも言い留まった絹旗に滝壺は次を促すように相槌をうった。

「私、フレンダを超咎めましたけど、私否定出来ませんでした」

なにを？なんて滝壺は聞かず静かに頷く。

「麦野はそりゃ、怖くてミス一つ超許してくれないけど、それって仕事なら当たり前の事ですし、裏を返せばそれだけ超期待してくれていた事にもなります」

「そうだね」

「…………超不器用なのは『アイテム』のみんな分かってるのに、麦野のこと…………」

「責めないで、きぬはた」

最後まで聞いてくれた滝壺に応えるように小さく絹旗は頷いた。そしてその手を取って二人もファミレスから出て行った。

『アイテム』のメンバーが全員ファミレスから出る約三十分前

腕時計を確かめる。時間は午後四時。少し早かっただろうか？と麦野は思ったが、下校する生徒はまばらながら居る。

それを横目で見ながらあのウニのような頭をした彼がいない事に心の内嘆息を漏らす。

時間を明確に決めなかったのが仇になった結果だ。

もう少しゆっくり待つか、と壁にもたれ掛かると視線を感じ校門を

振り向く。

「……………」

さつきから好奇の視線に晒されていたが、つい今し方感じた視線はそんな野次馬じみたものではなかった。

暗部と言う世界に浸かりきった麦野には解る。素人なんかが真似できないプレッシャーを叩きつけるような敵意で構成されたものだ。思わず麦野の背筋に悪寒が走るくらいに。

しかし本当にほんの一瞬程度のレベルで今では嘘のように敵意や殺気の視線は感じない。

だが、秩序の薄い弱肉強食の世界で女王に君臨する麦野の第六感は警告する。

――隙を作れば殺される

「……チッ、どこのどいつだ」

あくまで自然体に見せながら警戒態勢を崩さない。

どこから何が飛んできてもおかしくない状況に麦野は神経を広く、鋭く尖らせた。じわじわと麦野の神経が辺り一帯を浸食する。

「おい麦野！」

しかし彼女の行動は徒労に終わった。今まで張り巡らせた神経は、遠くから元気に手を振る上条の存在により集中力が切れ。麦野自身

なぜだか脱力した。

それは今までのシリアスな内心が上条当麻のどこか気の抜けた存在で掻き乱された事に他ならない。

「遅いかーみじょう！デートで女を待たせるのはマナー違反よ！」

「ええ、デートって！だって買い物だろ？」

「買い物だってデートよ。ホラさっさと携帯買いに行くんでしょ」

「おい、いきなり引っ張んなよ」

上条の右腕を掴み麦野は急かすようにその場から離れようと急ぐ。

また感じるのだ。上条当麻と話し始めた時から、鋭く“背中を刺す”ような威圧感。今度は一瞬のものでなく何時までも麦野に突き刺さった。

最寄りの携帯ショップの道案内を上条に任せながら麦野はその隣を歩く。

だれかとプライベートな買い物が久しぶりで内心喜んでいるのは否定出来ないが、それを表現するのはまた違う。

「携帯どんなのがいい？」

「デザインにはこだわらないから」

「ならゲコ太の携帯を買って上げる」

「いや、やっぱりデザインは大人のシックな感じがいいよな」

案を取り潰された麦野は少し不満そうな顔をしたが上条からしてみたら、冗談じゃない。クラスの笑い者だ。

そんなたわいない話をしていると人の多い通りに出た。下校時間を過ぎた街には学生がごった返している。

上条は麦野の手を握ると大きな流れに従う。

「かーみじょうって時々変に紳士よね」

「だってはぐれたら大変だろ？通信手段壊れてんだし」

「その時は空目掛けて〈原子崩し〉を撃つわよ」

「分かりやすいけど、ごめん止めて下さい」

なんだか簡単に想像出来て怖い。

「ならはぐれないようにしないとね。かーみじょう手じゃなくて腕かしなさい」

「な、なんだよ」

「減るもんじゃないしさっさとする」

急かす麦野に上条は手を離した。すると麦野はすぐにその腕に抱きつく。

「これで大丈夫ね」

「いや、いやいやいや上条さん大丈夫じゃないから?! 麦野さん当たってます!」

「当ててんのよ」

むにゅ、と効果音がするくらい麦野の豊満な胸が上条の二の腕にこれでもかと言うほど押し当てられる。

上条当麻も健全な男子高校生。グラビア雑誌などに鼻息荒くなる年頃には、このダイレクトに当たる感触はまさに天国のような拷問だったりする。

「免疫ないの?」

「免疫どうこうの前に今の時期、男は皆狼です!!」

「いやあ、本当に弄りがいのある奴だわ」

「麦野のドSうううう!」

本人達曰わく、「じゃれ合い」の行動は周囲からはただイチャついているように見えるだけで、そして二人からすれば周りの人間なんて居ないに等しく、向けられる視線などどこ吹く風だ。

そして主に麦野に向けられた視線に二人は気付かなかった。

「む、麦野が………男と歩いてる! しかも仲睦まじく! ……あ、

ああ有り得ない訳よ！」

地獄を目の当たりにし、絶望に支配されたような声音は暗部組織『アイテム』のメンバー、フレンダから絞り出されていた。

貧血症状のようにフラつくが倒れる事を踏みとどまり、来た道を全力で走り出した。

「うわあああああ！！私の麦野が、私の麦野が！！」

一応、麦野の名誉の為だが彼女はフレンダのものではない。そして同性を愛してる訳でもない。つまりこれはフレンダの妄言である。

「ん？」

「麦野離してくれる気になったか？」

「違う。今、なーんか聞こえた気がしたのよね」

どさくさに紛れて離してもらった作戦は失敗に終わり上条は携帯ショップまで天国であり地獄を味わった結果になった。

一方その頃フレンダは

「滝壺聞いてほしい訳よ!!」

「どうしたのフレンダ？」

「あのね麦野が男と仲良く歩いてた訳よ! 私の麦野がああ………」

携帯越しに滝壺に泣きつくフレンダは今も表通りを全力疾走中。

「むぎのが? デートしてたの？」

「デート?!」

「あー、だから麦野今日は超来ないって言ったんですね」

もう一つの声は絹旗だった。

「………むぎの今日の朝、病院に行ったんだよね？」

「……滝壺さん、まさか、そんなこと」

「え?」

フレンダも足を止め会話に集中する。数秒の沈黙の後、フレンダが弾き出した答えは――

「………妊娠、だなんてない、よね？」

「……………」

「……………」

滝壺も絹旗も返答をしてくれなかった。

「え、なんで黙る訳なのよ？」

「お祝い、何がいいかな？」

滝壺の言葉が壮大な勘違いの幕開けになった。

なにやら『アイテム』のメンバーがとんでもない勘違いをしているとは露知らず、麦野と上条は携帯を選んでいた。

「うーん、どれにしようかな？」

「そう？なら私が上条の、上条が私を選ぶ？」

「いいのか？俺なんか麦野の携帯選んじまって」

上条の不安を押しつけ麦野は男性が選ぶそうなデザインの携帯探し始めた。

「うん、いいわよ。その代わり、しっかり考えてね」

「プレゼント選びみたいで緊張するな」

「携帯だからね。……これなんてどう？」

麦野が手渡したのは薄型でシンプルな黒のボディ。側面部分には細く赤のラインが引かれていた。

派手すぎない色でありながら地味と言うわけでもなく、そして持ちやすさに上条も気に入った。

「へえ、俺が好きそうなデザインよく分かったな」

「シックなのが良いって言ってたじゃない」

「あ……」

あのじゃれ合いで忘れていたが確かにそんな事を言った。

それをきちんと覚えてくれて真剣にどれがいいか吟味したのだろう。なら自分も真剣に選んでやらないと、そう思い麦野の服装を観察してみる。

ジャージワンピースの胸元のスリープですっきりとした美のシルエット。腕には二段フリルが付き、しなやかな生地素材が波打つようなデザインの服に滑らかな影をつくる。スカート部分にたっぷりタッグをあしらいいフェミニンな印象をした麦野。

「なによ人を凝視して」

「うん、やっぱり麦野は美人だな」

「いきなり言うわね」

「服装とかに合わせようかと思って観察してたんだけどさ」

「視姦になったと」

「違う！断じて違うぞ麦野！」

心臓に悪い一言をさらっと言いつ放つ彼女に上条はどっと疲れた。

「でもこの服だけに合わせるつもり？」

その場で麦野が回ってみせる。ふわりと舞った栗色の髪が綺麗だと上条は思った。

「いや、参考にするだけだ。んで結果、この携帯はどうだ？」

「へえピンクか」

薄い控え目な発色具合だが、淡い感じは嫌いではない麦野はデザイン共に気に入った。

「ありがとね。じゃ契約しますか」

「ボクと契約して魔法少女になってよ！」

「キモい、裏声すんな。ついでにそんな歳じゃない。あれ中学生くらいでしょう」

「お、よくこのネタ分かったな」

「いや、アンタが見てることが意外だわ」

「友人の勧めで見た」

「私も似た感じね。ま、私が主人公達くらいの年齢で契約したら間違いない魔女になったわね」

そんな頃だったか、学園都市の闇に捕まり社会に失望と絶望を覚えたのわ。そんな時だったか、自分の内に獰猛で殺戮に貪欲な化け物を飼い始めたのは――――

「――い、おい！ 麦野どうした？」

「え、うん。なんでもない」

いつから考え込んでいたのだろう。上条が心配そうな顔をしていた。

「大丈夫よ、それより契約契約！」

「……無茶すんなよ」

麦野は思わず苦笑した。

まったく、鋭いのか鈍いのか分かったもんじゃないわ。

おそらく、彼は人の痛みが解るぶん、人の心が理解できたりするのだろう。

「してないしてない。店員さん、契約お願いしますね」

「でしたら此方の書類に必要な事を」

この手の事に慣れている麦野は受け取ると素早く書類に書き記した。

「はい、これでいい?」

「では、四桁のパスワードを決めて下さい」

「そうね、……これでいいか」

「こっちも出来たぞ」

上条も書類に書き込みを終えパスワードを適当に決めると、店員は受け取りパソコンに素早く情報を入力する。

「期間限定のカップル契約ですか?」

「はい」

「でしたら少しお安くなりますよ。自動的にメールアドレスや誕生日と言った個人情報相手が相手の携帯に登録される仕様になりますが問題の方は御座いませんか?」

「問題はないよな麦野?」

「うーん、そうね」

「お支払方法などは?」

「それなら一括払いで」

「カードと現金どちらになりますか？」

麦野は昨日とは違う財布を取り出すと中身を確認する。

「現金でお願いします」

「畏まりました」

指定された金額を払うと麦野は情報登録が終わった携帯の入った袋を手にとった。上条もそれを取ると店員にお礼を言ってから店を出る。

「ありがとな本当に金まで払ってもらって」

「もとより壊れた原因は私なんだから気にしないの」

腕時計を確認する。時間は午後五時半手前。まだ明るい空を見ながら麦野は歩き出した。

「目的も終わったし、またね上条」

「もう行くのか？　なんか食ってこうぜ」

「そうしたいんだけど、用事があるから待たねー」

そう言うと麦野は手を振ったがどうにも煮え切らない上条の表情に麦野は首を傾げた。

「どうしたのよ？」

「うーん、なんでもないまたな」

帰宅していく上条の背中を見つめながら麦野はため息をついた。

人間でいる今の自分でもこの世界は息苦しい。人として幸せを噛み締めると同時に人である良心が人殺しである自分の幸せを拒絶している。

「携帯起動させるか」

僅かな現実逃避のために箱に入った携帯を起動させた。

瞬間、それを待ち望んでいたように着信音になった。

「……………もしもし」

「こいつって奴はー、携帯替えたなら連絡しなさいよね。まあ良いけど」

「あばよ」

「ああああ、待って待ってよ！仕事があるんだって」

やけに高く響く声に麦野は眉間に皺を寄せた。

「うるせえ、ならさっさと要件を言いやがれ」

「まったくこいつって奴はー、最近能力者が暴れすぎてんの。あん

たにとつちやゴミみたいなもんだけど。調子こいてなにやら闇に手を染めた奴らの集まり叩いてほしいって」

「内容理解した。後はメールを送れ。今度こそあばよ」

なにか言ったが気にしない。問答無用で電話を切ると、センターにメールがきていた。

「……上条、当麻」

メールを送ってきたのはさっき別れたばかりの彼だった。

“また、会えるよな？会うなら今度俺が迎えに行くよ”

「あいつ、なんで」

こんなタイミングで……

暗部としての自分ならここで、誰が会うか馬鹿野郎。くらい送れたはずなのに、

指先が記した答えは――

“そうね。でも二、三日は無理みたい。誘ってくれてありがとう”

送信。

ああ、心と身体がちぐはぐだ。心は会うことなんて望んでないのに。身体は言うことをきかない。

指先からのメッセージ。それはたぶん本心。

規則的な機械音が鳴り響く。仕事のメールだ。

「さあて、今回は誰が死ぬのかな？」

『アイテム』始動

上条当麻は麦野沈利と別れた後、言いようのない不安に胸を締め付けられた。

その理由は、初めて会ったときも、病院でも、さっきの携帯ショッ
プだって、彼女はどこか遠くを眺めている事があった。

風景を見ているんじゃない。『昔』を視ているんだ。

上条にはそれが直ぐに分かった。

なにが悲しくて、なにが辛くて、あんな表情をするんだろう？

きつとそこには自分がまだ触れることの出来ない麦野沈利の心の闇がある。

救ってやれないだろうか。せめて病院で見せてくれた屈託のない自然な微笑みができるような女の子にしたい。

気が付けば携帯を起動させ、唯一ある麦野のメールアドレスに文章を打っていた。

“また、会えるよな？会えるなら今度俺が迎えに行くよ”

彼女の闇を知るには、彼女を知らなければならぬ。道のりは長い
がきつと麦野のメンタルは繊細だ。ゆっくり触れていかないと――

「麦野 おお おお!!」

「なによフレンダ。泣きながら抱きついてんじゃねえ」

しかしフレンダは離れず「だって、だってえ!」としゃくり上げてさらに抱擁に力を込める。

その様子に麦野は小さく嘆息をした。

『アイテム』のアジトに帰って来たら早速これだ。理由は知らないが、どうせ絹旗と喧嘩して負けたんだろう。そう結論付けると麦野はフレンダの頭を鷲掴みにし、力業で引き剥がす。

「まったく、いい加減にしろ。今夜十時から仕事入ったんだから、準備するわよ」

「そんな事より!」

作戦会議するために一番広い部屋に行こうとしたら今度は後ろから抱きつかれた。

「フレンダ……そんなにミンチになりてえか!」

「麦野大丈夫なの？結局、病院行ってどうしちゃった訳よ！身体は
だるかったりとかする？」

物凄い迫力で、なんだか責め立てられている気分だが、それだけフ
レンドが自分を心配してくれていた事が麦野の怒りを鎮めた。

「うん。……大丈夫よ。だからアンタも離しなさい」

「……そう、だね。あんまり圧迫したら駄目だもん」

なぜ圧迫なのか気になったが收拾がなつかないだろうと思い無視し
た。

そしてリビングのドアを開くと、どこか元氣のない絹旗といつもの
滝壺がいた。

「あ、お帰りなさい麦野。その、身体とか超大丈夫ですか？」

「なによ、絹旗までフレンドみたいな事言って。大丈夫、仕事には
支障はないから」

「そのことなんだけど、むぎの」

滝壺はいつもと変わらないおっとりとした口調で告げる。

「今日の仕事、私達だけでやるからむぎのは休んで。あとお酒の
んじゃ駄目だよ」

「仕事に支障は無いってば。それに私からなんで酒を取り上げるの
？」

それに答えたのは滝壺ではなくて、どうしたらいいか分からない、そんな顔をした絹旗だった。

「ほら、いくらまだ大丈夫だからって後が超辛くてなりますし、お酒なんて本当なら超飲んじや駄目なんですから我慢して下さい」

「いや、医者だってもう大丈夫って言ったんだから大丈夫よ。酒くらい飲んだっていいじゃない」

「駄目です。超駄目なんです」

「それと、むぎのおめでどう」

「はい、ありがとう滝壺。でなにが、おめでたいの」

今日は自分の誕生日だっけ？と思ったが全然違う。それに何だか話が噛み合っていない。

絹旗とフレンダは言いにくそうにモゴモゴしていたが、滝壺は違った。

「妊娠おめでどうむぎの」

「妊娠ね、ありが……ん？」

怪訝な表情になる麦野にフレンダは恐る恐ると言った感じて尋ねた。

「結局、何ヶ月になった訳よ？」

「はあ？ いやいや、ちょっと待て。なんで妊娠の話になってる、しかも私が！？」

「そんなに超恥ずかしがらなくてもいいんですよ麦野」

「違う！ 違うから！！」

必死に弁解する麦野に三人は優しい瞳で見つめた。

「病院から男と一緒に出てくるし、街中でイチャイチャとデート。麦野はその男にゾッコンな訳よ」

「大丈夫です。麦野が居なくても私達、超頑張りますから」

「だからゆっくり休んでね」

「テメエ等、そこに正座しろおおオオオオオオ！！！！」

麦野の怒声が学園都市の闇に響き、少女達の絶叫がかき消された。

そして、なぜそんな勘違いを生んだのか聞くと麦野は、入院理由も伝えなかったし、なにより上条と病院から出てきた事が元の原因だと分かり一方的な責めに入れなくなった。

「あー、勘違いさせた事は謝る。ごめん。でもよ、私だって暗部の人間だし、しかもリーダー。ちゃんと弁えてるつもりなんだけど」

「でも結局、麦野も一人の女の子な訳」

フレンダの最後の一言が切れた。それは麦野が無言で放ったへ原子

崩し」の一撃が頬を掠めたからだ。

「フーレンダア」

「……何も言ってますん」

ニコニコ笑顔な麦野と違いフレンダは青ざめてガクガクと震えが止まらなかった。

「ならむぎのは妊娠してないんだね？」

「してないわよ。もうその話し掘り起こすな」

「はい、プレゼント」

滝壺は麦野の手に紙でできた箱を置いた。それを見て硬直する麦野と、やっぱりいつも通りな滝壺。

絹旗が不思議そうな視線を麦野に向ける。しかし麦野はそれに気付かず、恐る恐る尋ねた。頼むから違うと言ってくれ！と言ったような気迫も交えて。

「滝壺さん、コレは一体なんでしょう？」

ついでに言うなら、麦野が絶対にしない丁寧な口調で。

「なについてコンドームむう！」

「滝壺おお！信じてたんだよ、アンタがよく分からないって言うってくれるってさあ！」

「ねえ、フレンド。滝壺さんが麦野に渡したやつって超何ですか？」

「…………ワタシ、ヨクワカラナイ」

「むー、本当は超知ってるでしょう！」

自分一人蚊帳の外で疎外感を感じた絹旗は頬を膨らませたが、フレンドにはそれが純粹無垢に見えて癒される。

「絹旗はずっとそのままでもいい訳よ」

「なんでそんな遠い目してるんですか？」

フレンドはその問いに答えず、滝壺の両肩を掴み激しく前後に揺らす麦野を見つめた。

「でもむぎの、それがあるのと無いのでは大きく違うんだよ」

「分かってんだよオオオオオオオ！でも滝壺がこんなの持ってるの駄目！その役目はせめてフレンドだろうが！！」

「麦野 おおおお？！麦野の中の私ってどんな位置付け！？」

「超置いてきぼりにしないで下さいーい！」

滝壺の落とした爆弾の影響で收拾がつかなくなり『アイテム』始まって以来の大混乱が巻き起こった。

ピリリッ！

しかしそれはリーダーである麦野の携帯が鳴った事により今までの喧騒が嘘のようにその場は水を打った。

さっきまでとは違う表情の麦野は直ぐに携帯を開きメールを確認する。あつと言う間に目を通すと椅子から立ち上がった。

「行くわよ、絹旗下っ端に連絡お願い」

「はい」

それは『アイテム』始動の合図であり、闇に生きる彼女達の一面を知る瞬間となる。

そして、

「今回は能力者の集まりだけど、気にせず殲滅しろだとき」

「それだけ価値のない奴らって訳よ」

傲慢の武器を片手にフレンダは外へと繋がる扉を押し開ける。

学園都市で光の届かぬ闇が口を開いて待っていた。

「目的地に居る奴等は……」

ついに麦野の中に巣くう闇と化け物が鎌首を持ち上げた。

「ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね！」

のんびりとした時間だった。そう、“だった”のだ。

「待てえええ！戦えって言ってるのッ！！」

「ダアアア！なんでビリビリが居るんだよ！！」

「ビリビリ言うな！」

「ならピ○チュウだ！」

「ああ！何だって！？」

雷撃が上条の左頭部掠め、チリチリとした音と髪の毛を燃やした特有の臭いがする。

「テメェ！当たったらどーすんだ！」

「なら戦え！」

「不幸だあああああ！！」

街に少年の絶叫が響く。

確かに学園都市、能力者なんか珍しくないこの世界でも道のど真ん中で能力者を使うのは珍しいようだ。

学生達はぎょつとしたように道の隅に移動していく。

「俺は今日退院したばかりなんだぞ！」

「えっ！？そうだったの……ってそんな手に乗るか！アンタ昨日平気で逃げたじゃない！」

昨日、上条当麻は麦野沈利と出会う前に御坂美琴と出会っていたのだ。もちろんその後は今ののように全力鬼ごっこになった訳だが。

「ビリビリは門限とかあんだろ！」

「なんとかなるわよ！」

因みにこの場合、“なんとかなる”ではなく“なんとかする”の間違いだったりする。だがしかし“なんともならない”の可能性が九割。

御坂御坂が門限破って厳しい罰則を喰らうのは決まった。

故に彼女も白棄^{やけ}を起こしている。

「アンタが戦わないと私だけ痛い思いするでしょう！」

「なら帰れ！」

上条は体力に物を言わせ逃げ切ろうかと思ったが、どうにも彼女も体力があるらしく引き離せない。

「クソッ！」

上条は素早く裏路地に入り御坂の視界から逃れようとした。

細く人が二人も並んで入れないような道には障害物はなく、真っ直ぐ突き抜けるとまだ裏路地の迷路が広がっていた。ちょうどTの字になったさっきよりも格段に道幅のある場合だった。

「待てやゴラァァ！」

コンクリートの壁に反響して御坂の怒号が響く。反射的に上条は左に曲がったが、行き止まりになっていた。

「やべえ、どうする」

流石に上条でも壁を登ることなんて出来ない。

御坂の声が大きくなるなか上条はたまたま、道の端にある物が目に付いた。

「そこか！」

御坂は壁に向かって電撃を放とうとして、踏みとどまった。

「あれ？こっちじゃない？」

しかし上条は居らず勢いを挫かれた御坂は辺りを見渡す。あるのは道の端ある木で出来た箱が積み上げられているくらいだった。

そしてその箱の中から上条は、早くどっか行け！と願っている。

「行き止まりだし、反対方向か！」

それに応えるように御坂は右へと駆け出した。

それにホッとした。しかし念の為に上条は五分くらい箱の中で息を殺す。

それがこれからの人生を左右するとは知らずに。

もう、いいか？

上条は蓋を開けようとするすると数人の話し声が聞こえた。

「これが取引のブツですか？」

「ああ、中身は見んなよ。あくまで俺らは運搬だ。見るんなら死ぬ覚悟で見ろよ」

「まさに冥土の土産ってか？ 笑えねえぜ」

「早く運ぶぞ」

声は四人だが足音はそれ以上。上条はさらに息を殺した。話を聞いている限りでは見つければ蜂の巣だ。生きて帰れる保証はない。

「……よっと」

え！？ えええ！

急に上条が入った木箱が持ち上げられた。

「よし車に詰め込め」

「全部入るんですか？」

「二台あるから心配すんな。それより急がねーと依頼人と鉢合わせだ」

「まずいんですか？」

「顔を見ない、指定時間までにブツを置く。それが俺らのミッションだ」

短く告げるとリーダー核の男は時計を確認した。

「まだ時間あるな」

「こっちの車積み終わったぞ」

「それじゃそっちは行きますか。場所は副リーダーのテメエも知ってんだろ？」

「了解した。後から行く」

それを確認し上条が入った木箱のある車は発進した。

かつて無い事件に巻き込まれることとなった上条当麻はあまりの事に魂が抜けていた。

不幸だ、とさへ呟くことのできない状況。

そして車は学園都市からも見放された、第19学区へと走り出す。

そこに暗部最強の女王クイーンがいると知らずに。

運命は廻り出す。歯車は勢いを止めるどころか加速する。

そして始まる事のない物語が今、始まった。

『アイテム』始動（後書き）

次からのお礼文とかあとがきに書きますね。

なんだかその方が見やすいと思うので

入場者3000人突破！！

皆さん、有り難う御座います！

〈原子崩し〉

長い間、車に揺られどこに來たかさへ分らない。

ただ時間からすると、第7学区の外に違いない。

そのくらい長い時間、同じ様な姿勢を保ってきた上条は限界だった。腰に痛みが走り、うまく姿勢を変えられない。そして何より、この木箱は上条が体操座りをして上半身を前に倒さないと入らないサイズで、狭すぎて動きようもない。

いい加減限界が來たが車が止まった。赤信号だからと言うわけではないようだ。エンジンまで完全に停止して、人が降りてくる気配がする。

「アイツ等あと10分もすれば着くみたいだ。早く荷物運べ」

「リーダーも運んで下さいよ」

「リーダーだからいいの」

なんだか馬鹿らしい会話に上条は気が抜けたが、持ち上げられる感覚に身を硬くした。

そこまで長く移動した訳ではなく平らな地面に下ろされた。

それから20分はその作業が続き荷物を運び終えた集団はぞろぞろ

と車に向かう。

今回の仕事はどうだとか、今日はもう寝るとか、プライベートなものばかりで上条の緊張の糸も少し緩んだ。

そして無音になった時、上条は音を出さないように箱から外に出て、律儀に蓋を閉める。

「どこだここ？」

月の光で辛うじて見えたのは、駐車場のような広く柱の少ない空間。そして余りにボロボロな建物だということ。

廃屋と言う表現しか出てこない。

物陰に隠れるように移動していると、上条は壁になにやらテープのようなものが貼ってあるのに気づいた。

「なんだコレ？」

一見、修正テープだが手触りがなんだか違う。それに真新しい。何かの暗号だろうか？

そんな事を考えていると、背筋が凍るような悲鳴と絶叫が上条の耳まで殴り込んできた。

「アガアア、ギイヤアアアアアアアア！」

「ひいいい！！あ……あああ！！！！」

「グガアアアアア！！ヒギイツ！」

断末魔の叫び声はいきなり途絶え、駐車場の外で激しい閃光が瞬いた。

続いてバタバタと足音が駐車場に雪崩れ込み、何人かの男達は恐怖でもつれる足を懸命に引っ張って走ってきていた。

皆一様に恐怖で顔が強張り、気の弱い奴は既に涙で顔が酷いことになっている。

上条は訳が分からなくなり足が全く動かなくなった。

さっきの断末魔はどうした？なんでこいつらこんなに、死に物狂いなんだよ？

現実味を帯びない光景は上条から行動力を削ぎ落とし、呆然とさせた。

「あはははははは！」

よく響く声に全身の毛が逆立った。一瞬で口の中が干上がりべた付いた舌が動かない。

瞬きさへ忘れて、上条は漆黒の闇を凝視した。響く足音。それは、じわりじわりと恐怖を伴い近づいてきた。

「あ……あ……ああ」

誰かが絶望の訪れに声を震わせる。

「ハロー、狩られるだけの家畜野郎！」

深淵の底より出てきたのは、一人の化け物だった。

月明かりに照らされた美しい顔は、命を狩る事に飢えた獅子のように牙を剥き出し歪み。その瞳は狂気に満ちていた。

「さて、あの荷物を誰に渡そうとしたのか、言ってもらおうか？
それともジュージュー焼いてグリルパーティーにでもする？」

光の玉が女の顔をはっきり照らした。

その光景は上条まで届き、今まで動かなかった口が静かに音を零した。

「…む、ぎの……？」

「どっちでもいいか、一人残りゃ十分だァッ！」

光の一線が二人の男を貫く。悲鳴を上げる暇なく絶命した。

なにが起きたのか分からない。殺された本人達など、なおのこと分からなかっただろう。

彼女がやった行動は、なにもない。ただ点在する光が高速で二人の上半身を奪い去った。

ドシャッ！と重たい音を立てて崩れ落ちた死体はビクビクと痙攣しながら鮮血をコンクリートに流す。

唐突すぎて脳が一時的に真っ白になった。あまりに無残な死に様を見て、怖いだとかそんな感情は浮かんで来ない。

呼吸さへ忘れた空間に絶叫が轟いた。

「うわあああああッ！！！！あああ………イヤダアアアアアッ！！！」

耳をつんざく絶叫に上条は震え上がり、止まった呼吸が帰ってきたと同時に物陰から飛び出した。

「麦野オオオオオ！！！」

「っ！」

麦野は突然の上条の奇襲に身を強ばられたが、暗部女王の貫禄がへ原子崩し〓の盾を展開する。

しかし、

硝子を砕いたような歪な音と共に消え去り、上条の右の拳が麦野の腹部にめり込む。

「ぐあッ！」

彼女はよろめくと、呆然と上条を見た。最後の希望が打ち砕かれたような表情で、瞳は大きく揺れ、今にも崩れそうだった。

しかし上条にはそれについて深く考査をしている隙はない。生き残った五人を見ることなく上条は怒鳴った。

「早く逃げろッ!!」

上条の登場に度肝を抜かれ、またもや固まっていた者達は今度こそ蜘蛛の子散らすように逃げる。

だが出口に小柄な人影が立っていた。

「標的見つけた訳よ!」

場違いな明るい声をした女の子が壁を何かで引っかくと、そこから一直線に壁が爆散する。

今度は悲鳴を上げることが出来ただろうが、膨大な音の波で彼等の最期の声は聞こえなかった。

「麦野どうしたの?」

微動だにしない麦野の後ろ姿にフレンドはゆっくり近づく。フレンドはまだ上条に気づいていないようだ。

「そうかよ……」

低く唸るような声にフレンドは歩みを止めた。

失望と虚無。それがぐちゃぐちゃに入り混じった声は闇に向かって吐き出されていた。

「そういう事かよッ! 上条オオオオオオ!!」

大気全体を震わせた激昂の叫びは、憤怒や絶望に染まったものだった。

フレンダはその麦野の声だけで泣き出しそうになる。理性の壁をぶち破って出てきた猛獣は闇の中に突進した。

「グアッ！」

肉を打つ音とまだ若い男の苦痛に呻く声が広い空間に響く。

続いて〈原子崩し〉の閃光が闇を薙払う。そしてフレンダが視認したのはウニ頭の青年だった。

青年は右手一本で〈原子崩し〉を粉碎する。

「麦野オ！なんでお前が人殺しをしてんだ！！」

「はあ？お前なんかに言われる筋合いはないわよ。こっち側の人間の奴がアッ！！」

麦野はそう解釈した。

上条当麻がここに理由を、

麦野はそう誤解した。

上条当麻が何故、自分に楯突くのかを――――

「考えれば簡単だったじゃない。そんなチート野郎が“表”の人間やってける訳ないわよね！私がそうだったんだから！学園都市の“

闇”が見逃す事なんて、あるわけない!!」

電子の極光が六本、麦野の怒鳴り声と共に一帯を焼き払う。床や壁のコンクリートがドロドロに融解してオレンジ色に鈍く発光する。

闇が不気味に明るくなった。

「麦野がなに言ってんのかよく分からねえが、こんな事してよくないだろ!」

上条のこれ以上無いほどの真剣な怒気を含んだ言葉に動じず麦野は笑い、嗤った。

「あっははは!馬っ鹿かテメェわよ!」

上条は麦野が〈原子崩し〉を撃つ前に直進した。

しかし麦野は電子の壁を形成する訳でもなく、極光の一撃を自分の足元近くを碎いた。それはコンクリートの破片を打ち上げ、散らばし上条を迎撃する。

間一髪で転がると、立て続けに〈原子崩し〉が上条に直進、しかし右手で消すと麦野は居なかった。

立ち上がろうとした上条は無理やり床に押しつけられた。

「うおッ!」

ズン!と背中に衝撃が走り、主に腹部が圧迫されてうまく呼吸がでない。

そして、虫の羽ばたきの音に似ているが、それよりも重く、低い音が上条の耳に聞こえた。

「クソ！」

「ねえかーみじょお、選ばせてやるよ。黒こげのミイラがいいか、それとも、あっちこっち穴だらけがいいか。どーする？」

眩しい光の玉が麦野の周りに点在する。

上条を踏みつけた麦野は狩りを楽しむように口元に残忍な笑みを刻む。最期を選ぶ権利の譲渡は相手が命乞いをするのを誘発するため。

その細く糸のような希望に縋る人間を突き落とすのは最高の悦楽、快楽だ。

命乞いをするか泣き叫ぶか、または両方か。

“闇”に巣くい、命を食い散らかすもう一人の麦野が上条から、そのいずれかの言葉を今か今かと待ち望む。

そして上条は、

「俺は……」

震えた声に麦野はさらに笑みを深くした。

「どっちも選ばない!!」

「ああ！」

一瞬の隙をついて上条は右手で麦野の足を掴むと方向関係なく強引に引っ張った。バランスを崩し派手に転倒した麦野に上条は掴みかかった。

今まで圧倒的有利にいた麦野だったが、一気に逆転されフレンドは、彼女を助けるために武器を取り出した。

「フレンドア！これは私の獲物だ、手え出したらお前を上下左右に引き裂くぞオッ！！」

だが、麦野に怒鳴られフレンドは踏みとどまる。

「でも、麦野！」

上条の右の拳が振り下ろされ、麦野はそれを掴み押し返そうとする。上条からしたら左側はまったくその逆で膠着状態だった。

しかし構わず麦野は叫んだ。

「さっさと絹旗の処にでも行け！いいか、邪魔したらテメエらもブチ殺しだ！」

「……………分かった訳よ」

苦渋の選択の末、フレンドは麦野に従い出口に向かって走り出した。その背中が見えなくなったのを確認すると上条はさらに力を込める。

「なんでだよ！なんでなんだよ！どうして麦野が」

「いつまで“表”を気取ってんだ、アア！」

“表”だとか“裏”だとか知らねえ。でも、こんな事はやつちやいけねえんだ！」

殴られる覚悟で左手の拘束を解き、利き手でない拳で麦野を殴った。

それは軌道を外し麦野の右の肩口に入った。

「アガッ……くう！」

脚を振り上げ麦野は上条を蹴り飛ばすと、距離を取るように転がり小刻みに痙攣を繰り返す右腕を忌々しそうに見つめて。

「麦野、お前は間違ってる！人を殺してなんになるんだ！」

その言葉で麦野の中に存在する“何か”が解き放たれた。

「間違ってる？間違ってるのはどっちだアア！私が“間違い”ならこのクソツたれな世界はなんなんだ、学園都市の暗部を舐めてんじやねえよ、無能力者の分際で！なら否定してみろ！“化け物”利用するだけ利用するシステムとその真っ黒な社会をなアアアアアア！！！」

麦野はなんの躊躇いもなくポケットからカードのような物を多数空中にばら蒔く。

それが何を意味するかは分からないが、上条の本能が“全力で逃げ

ろ！”と叫んだ。

身体はその通りに出口に向かって駆け出した。

「終わりだよオオッ！！！」

今までにない圧倒的な光が無差別に世界を薙払い、焼き尽くし粉碎した。

真っ白になった視界、全てが奪われていく感覚。

そして、

建物自体が崩壊を始めた。

壮絶な轟音と土煙が第19学区の一角で巻き起こる。その絶望的な光景に絹旗やフレンドは言葉を失った。

体晶の影響で疲弊した滝壺は、完全倒壊した建物から麦野のA I Mが消えていない事を感じとると、頬を少し緩めた。だが、油断出来ない。生き埋めになっているかもしれないのだ。

「大丈夫、まだむぎののA I M拡散力場は消えてない。助けに行こう」

「滝壺さんは超休んでください！フレンドは滝壺さんをお願いします。私なら瓦礫くらい超持ち上げられますから！」

絹旗が一人で崩壊した廃ビルに向かおうとすると、フレンドがそれを止めた。

「それなら滝壺を連れて行くべきだと思う。結局、そっちの方が麦野の場所とか正確に分かる訳よ」

「そうですけど……」

「大丈夫だよきぬばた。それよりむぎのが心配。なんだかさっきからむぎののAIM拡散力場がおかしい」

その言葉に絹旗は少し離れた崩壊した廃ビルを見つめた。

瞬間、一筋の極光が夜空に消えていった。

それは〈原子崩し〉の光で、麦野が生きている事を示している筈なのに、皆は素直に喜べなかった。

不安だけが胸の内に溜まる。そしてその不安は的中する。

「アッハハハハ！あはははは！！間違ってる？私が、私が間違いの！？ククク、ふふ、あは、アハハハハ！！！」

彼女の自我がゆっくりと融解を始めた。

“化け物”だとか暗部女王だとか、人間でいた筈の麦野沈利がすべて境目が溶けてぐちゃぐちゃになっていく。

「殺した、殺した、殺した殺した殺した殺した！」

最初の怯えたような声から徐々に猟奇的響きを孕ませ、狂った哄笑が続いた。

痛々しく融解していく彼女は、ピタリと全ての行動を止めると、後ろを振り向く。

そこには、あちらこちらから血を流しそれでも立ち上がった上条当麻の姿があった。

震える足に力を込め、一步の距離を確実に縮めると、そっと手を差し出した。

「迎えに来たぞ、麦野」

優しく微笑みかけてくれる彼に、麦野は泣き出しそうになった。

それは、暗部の自分なのか、化け物の自分なのか、人間である自分なのか、分からない。

ただ、嬉しかったのかもしれない。

「要らないんだよ」

でも、もう区別がつかなくなった麦野はその手を振り払った。

「なら、お前が手を取るまで俺は諦めない！」

彼は変わらず手を差し伸べてくれた――――

〈原子崩し〉（後書き）

入場者総数

五千人突破！

感想やお気に入り登録有り難う御座います！

眠い……、頑張りすぎたみたいだ。

〈幻想殺し〉

「っ！」

真っ白な光に薙払われた上条は一時的に意識を失い、今漸く目を覚めました。

しかし起き上がろうとすると全身に痛みが走り身体が思うように動かない。ひどくゆっくりな動作になってしまう。

「は、はは。すげえ、不幸なのか幸運なのか分かんねえや……」

仰向けになって上条が見た光景は、いろんな瓦礫がお互いを支え合うようにして、倒壊をギリギリ避けていた奇跡の賜物だった。

しかし身体には無数の傷が刻まれていた。特に左肩辺りは〈原子崩し〉の一撃が掠ったらしく、肉が少し削れている。

上条は一通り、身体が動くのを確認すると、立ち上がった。それだけで肉体が悲鳴を上げる。

「……クソ、早く麦野を捜さない」と

覚束無い足取りで上へ登れそうな所を探す、今の身体では正直無理だ。

全てが限界に到達している上条は膝を付く。そしてズボンのポケットの固い感触に気づき取り出す。

それは、麦野が上条の為に選んで、買ってくれた携帯だった。

「あつ、さっきので壊れてないだらな？」

急いで開くと携帯の画面からは光が発せられた。

「メールが来てる？」

御坂美琴に追いかけて回された時に届いたのだろう。気づかなかった。
メールの主は――

「……麦野、沈利」

思わず声に出してしまった。

そうだ、あの時まで会話をしていたじゃないか。普通のありふれた
日常の会話。

それが急に恋しくなり、上条は唇を噛み締めた。恐らくこの大騒動
に巻き込まれて三時間も経ってない。なのに、こんなにもあの時間
が大切な物に感じられる。

その時、上条は唐突に考えた。

なら麦野沈利はどうだろう？彼女の言動からして、この非日常が当
たり前になったのは昨日今日の話じゃない。もっと昔だ。

だとすれば、麦野にとって“平凡な会話”だけでもそれはとても幸
福な事で、その話し相手は恐らく上条当麻ただ一人なのだろうと、
鈍感な上条でも分かった。

メールを開く。

そこには

“そうね。でも二、三日は無理みたい。誘ってくれてありがとう”

その文面を見て上条は泣き出したくなった。こんなにも普通の女の子なのに、こんなにも社会の“闇”に染まらなければならぬのか？

今まで麦野が浮かべた、寂しそうで、どこか諦めた表情をした彼女が上条の脳裏を過ぎった。

助けよう、迎えに行こう。あんな表情をさせないために。

今は社会の“闇”なんて知ったことか。今、大切なのはそれに絶望し苦しんでいる彼女を救うことだ。

上条は携帯を仕舞うと立ち上がった。最初の時のように身体を動かすだけで痛みが走る事はない。あまり痛みに脳が痛覚を遮断しているのかは分からないが、今はそれが有り難い。

「でも、やっぱり道が無いんだよな」

見渡せどそこは限られた空間。狭いそこには瓦礫の間から零れる月光が静かに上条を照らすだけだった。本来ならこんな時は無駄に動かず救助待ちである。

だが状況はそうも言っていられない。上条と同じように彼女がこの奇跡的な空間に居るとは限らない。重い瓦礫のしたに居たならば、

事態は一刻を争う。

だが杞憂に終わった。

轟音を轟かせ、全てを貫く破壊の極光が上条の背後の瓦礫を蒸発させる。慌てて振り返ると、麦野が狂った哄笑を上げていた。

上条はゆっくりと右の拳を握った。誰に言うわけではなく、自分に言い聞かせるように独白する。

「二、三日は無理だって書いてたけど、今日迎えに来るのはいいよな、麦野」

そして彼はたった一人を助けるために立ち上がり、手を差し伸べた。理由なんて簡単だ。特別ななんて必要ない。ただ、笑って欲しい、あの屈託のない微笑みで。

だから、

「迎えに来たぞ、麦野」

麦野は手を取る事はしなかった。曖昧でぐちゃぐちゃで融解した精神はもはや“麦野沈利”と言う個を保っていない。

故に彼女は陰惨に歪んだ唇で自らを、こう称した。

「私は“麦野”なんかじゃない！〈原子崩し〉だ！！！」

「違う！お前は麦野だ、人として笑って悲しめる“麦野沈利”なんだよ！！！」

しかし彼女は肩を揺らしながら嗤う。おかしくて堪らないようだ。

見せ付けるように彼女の周りに限らず、空間に数百は優に超える光の玉が点在する。

「ははははは！私は〈原子崩し〉の全てを理解した。全ての電子が解る。もう人間なんて器じゃない！それこそ“麦野沈利”なんて小さな器に入らないわ！呼吸をするのと等しいくらい自然と演算が可能。これなら本当の出力で〈原子崩し〉が撃てる。身体を崩壊させる事はない！標準を合わせる事も一瞬で終わる！！！」

心が痛くなったのを上条は理解した。人間を捨てたと言うのか？人間であることがそんなに不便だと？

違う……違うだろッ！！！！

「いいぜ、麦野。お前が人を棄てたって言うなら、先ずはその幻想

をぶち殺す!!」

「やってみろ! 〈原子崩し〉でテメエを原子の塵に変えてやるからよオオオオオ!!」

問答無用で〈原子崩し〉の弾幕が上条に襲い掛かった。回避不可能な程の数。それは原子崩しの視界を真っ白に染め上げ塗り潰す。

「アハハハハ! こんなもんかよ、足りねえぞ!!」

「ああ、そうだな。全然足りねえよ」

僅かに原子崩しの表情が怪訝になる。

おかしい、確かに最低出力だけどアレを防ぐなんて……

実際まだ弾幕の影響で土煙は晴れない。原子崩しは極太の一撃を無慈悲に放つ。

だが、聞き慣れてしまった硝子を砕く歪な音が虚空に響く。彼は土煙から出てきた。無傷とは言えないが、しっかりと二本足で歩いて来る姿に原子崩しは不服だった。

「なんで生きてんだ？」

「お前を迎えに来たからだ麦野」

「“麦野”はいない。それは昔の私だ! 原子崩しが今の私。わざわざ蝶が蛹さなぎに戻るなんてないの。そっちこそ何時まで“麦野沈利”って言う幻想求めてやがるッ!!!」

怒りの咆哮が原子崩しから迸る。瞳は瞳孔まで開き、牙をむき出しにした彼女はまさに獣のようだった。

確かに“麦野沈利”でもここまで堕ちなかっただろう。

普通なら諦める事を諦めない。上条当麻の本質を垣間見た原子崩しは何かがぶち切れる音がした。

「そおかよ。ならへ原子崩し」の本当の一撃を見せてやる。さっきみたいな弾幕程度の比じゃねえぞクソ野郎ッ!!!!!!」

「麦野は原子崩しなんかじゃない。お前は“麦野沈利”なんだ! 世界でたった一人の“麦野沈利” っていう人間なんだ! いい加減、目を覚まそうぜ!!!!!!」

お互いの主義主張を確かめ二人は同時に理解した。交われない、理解してあげられない。それくらい違うのだ。

そして同じくらい引けない理由がある。

なら出来ることは、全力で対峙する事だけ。対極であるが故に引き合わされた運命なら、ここから先の結末も運命だろう。

彼はただ一直線に走り出した。

「麦野……沈利iiiiiiii!!!!!!」

「上条……当麻アアアアア!!!!!!」

彼女が見えなくなるくらい眩く、そして無慈悲な極光が原子崩しを中心として膨れ上がり、空間を押しつける。

オーバードライブ
大破壊と言える全てを滅却させる光に上条は恐れる事なく右の拳をぶつけた。

「グッ！」

だが、膨大な質量に対して右手の力は大きく下回り押し返される。両足に力を入れ踏みとどまると筋肉と骨が嫌な音を立てた。

「お……おおおおおおおおおおおおお……！！！！！！」

上条が吼えた。

全てを揺さぶる大きく鋭い雄叫びに上条自身、内側から何かが溢れ出るのを感じた。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ！！！！！！！！」

歪な音が今まで無音だった原子崩しの世界に轟いた。それは今まで硝子を叩き割ったような歪な音ではない。まるで何かを噛み砕き、粉碎する鈍い音だ。

「な、なんだ！」

食い破られた。その一言に相応しい結果だった。最高にして最悪の〈原子崩し〉の最大の一撃は――――

「なんなんだよ、ソレ！！！」

上条当麻の右手に朧気で、だがはつきりと龍の顎が噛み砕いた。そして上条は原子崩しに弾丸のように迫った。

一瞬で原子崩しの目の前に大口を開いた龍が迫り、彼女は悲鳴が喉に詰る。

「ひっ！！！」

恐怖で頭が混乱して避けるだとか、そんな考えさえも失われていた。

「おおオオオオおおおおオオオオオオおおオオオ
オオオオツツ!!!!!!」

雄叫びはどちらが吼えているのかも分からない。

原子崩しには世界がゆっくり動いているように見えた。龍の顎がビデオをスローモーションにしたようにじわじわと襲い掛かる。

ついに自分の頭部が龍の顎の中に入った。

そして、世界の全てが暗転した瞬間、原子崩しの頭の中で扉を勢いよく閉めたような音がした。

滝壺は放心した絹旗を支えながらその瞬間を見た。本当ならば自身の身体が吹き飛び跡も残らないであろう出力で〈原子崩し〉を行使した麦野。それを打ち消し謎の龍の顎を出現させた上条。

普段表情に変化のない滝壺もその驚愕の光景の前に目を見開きその頬には冷や汗を流していた。

フレンダと絹旗は完全に啞然として真っ白な状態だった。ほっとくと後一時間は帰ってこないだろう。

だから滝壺は控え目に絹旗の肩を揺すった。

「きぬばた、起きて。むぎのとあの人迎えに行かなきゃ」

「ふえ！？あ、えっと」

「落ち着いて、大丈夫だから。フレンダも起きて」

「結局、あの二人万国吃驚人間……」

世界レベルで驚かれる壮絶な人間に、晴れてフレンダに登録された二人は寄り添うように横たわり気絶していた。

「救急車、よんでフレンダ。きぬばた、二人の所まで行こう」

「……………超死んでませんよね？」

「…たぶん大丈夫」

その言葉にきぬばたは泣き出しそうになり滝壺を置いて駆け出してしまった。

滝壺はまだ五月蠅く騒ぐ心臓を宥めるように深く呼吸をする。あの青年が最高にして最悪の〈原子崩し〉の最大の一撃を消し去って、麦野を飲み込んだ時からずっとそうだ。逆に二人が激戦を繰り広げていた時は呼吸も心臓の鼓動も忘れていたのに。

「えっと、取り敢えず二人を回収して動きたい訳よ」

「今、きぬばたが二人を運んでる」

自分より大きい二人を軽々持ち上げた絹旗は凄いとしか言い様のない速さで瓦礫を駆け上がっていた。その表情には安堵が見て取れる。

「二人とも超生きてます！」

「それじゃ、その運搬は絹旗に任せて降りよう」

「フレンダも超手伝って下さい！」

そんなたわいない『アイテム』の二人を見ながら滝壺はピクリとも動かない上条に微笑みと感謝の言葉を小さく送った。

「ありがとう、むぎのを助けてくれて」

遠くでサイレンの音がする。

滝壺は願った。

今日の事を切欠にむぎのの世界が変わりますように。

それはいい方向に行ってほしい。初めて会った時から独りで有り続けた彼女の為にも。

今日の星空と月はとても綺麗なものに見えた。

〈幻想殺し〉（後書き）

来場者数

祝・一万人突破！！！！

……なんだろう。

いろいろ不安になってきたぞ。いや、頑張れ自分！ポジティブに頑張れ！

最近、色んな小説を読み返していますが、やっぱり皆さん素晴らしいですね。

戦闘描写の練習をしなければ。でも生身の人間の戦闘描写って結構難しいんですね。一方通行みたいに音速とかで動ける方が案外書きやすいという罠。

アクションもので、なおかつ普通の人間が戦う読み物はないだろうか。

上条さんの防御力は立派に普通を超越していますが。（浜面も同じ）

再入院

声がする。遠くか近くかは分からない。

ただ、声がする。大きく、そして途方もなく分厚い扉を挟んだ向こう側から声がする。低く、高く、唸る獣の声だ。

そして、原子崩しは言った――

いつかお前を喰い殺す！！

雷鳴にも似た爆音だった。鼓膜だけではなく全身にビリビリと衝撃が走る。

麦野はそれを、他人事のように聞いていた。

ゆっくりと意識が覚醒していく中、腹になにかが無遠慮に乗っかつ

てきた。

「グエツ！」

「なにカエルみたいな声を超出してるんですかウニ頭？」

「なについて、お前が飛び乗るからだろ！」

忌々しそうに睨む上条に絹旗は腕を組み見下ろす。その表情はどうか勝ち誇った様なものがあつた。

「これくらいで超騒がないで下さい。一体だれが超ここまで運んでやったと思ってるんです」

「それでもやったら駄目だろう！内臓出る所だったぞ、それよりテメェ誰だ！？」

「自己紹介が遅れました。絹旗最愛です」

あっさり自分の名を明かした絹旗に上条は拍子抜けした。

「絹旗ね。俺は」

「ウニ頭」

「上条！上条当麻だ！」

「そんな事、超知ってますよ。でもウニ頭」

「ウニウニ言うなああ！」

飛び起きた上条に絹旗はベッドから急いで降りるとドア開けて誰かを呼んだ。

「滝壺さん、ついでにフレンダ。ウニ頭が超起きましたよ」

「絹旗、ついでってどう言う訳よ」

「ついではついでです」

その様子の上条はベッドに腰掛けると身体のあちらこちらに鈍痛が走る。

その痛みに昨夜の事を思い出した。

「昨日はありがとう、かみじょう」

「麦野のことらな気にすんなよ」

「ありがとう」

上条としてはあまり堅苦しくして欲しくなかったが彼女は本当に御礼が言いたいだけで、そうならば上条の答えはこれしかない。

「どう致しまして」

上条に御礼を言ったピンクジャージの女の子は座り心地の悪そうなパイプ椅子に座った。それからドア付近で口論する二人に手招きをする。

「二人とも」

「はい」

それはさながら母親に呼ばれた子のような反応で上条は小さく微笑んだ。

「結局、ニヤニヤしてキモい訳よ」

「な、なんだと！」

「超話しが進まないから止めて下さい」

不毛な喧嘩になる前に絹旗は歯止めをかけると、滝壺が口を開いた。

「滝壺理后っていうの、よろしくね」

「フレンド。ファミリーネームは聞かないでね」

「えーと、よろしくな滝壺にフレンド」

軽く自己紹介も終えた事を確認して絹旗は質問した。

「ウニ頭は超どうしてあんな場所に居たんですか？」

質問ないように“事と場合によっては……”という怪しい響きが混じっており上条は慎重に言葉を選んだ。

「信じるかは絹旗次第だけど、とある電撃使いに追い回されて、やり過ぎす為に路地裏の木箱に隠れたら」

「その中身がヤバイものと知らずに？」

「そうだ。そしたら運ばれるは麦野からは攻撃されるは大変だったんだぞ」

「ならむぎのとはいつ知り合ったの？」

この質問は滝壺からだった。

「それは……」

言うべきか上条は迷った。それは出会った時の彼女を思い返せば、いくら友人だからと言って軽々しく話せない。

その様子を見て滝壺は静かに首を振った。

「ごめんね。変な氣と聞いて」

「いや、それは……」

会話が續かない。この嫌な静寂はいつかのファミレスと同じだ。だからフレンダは雰囲気を一転させる為に提案する。

「上条、麦野に会いに行ったら？もう起きてるかもしれない訳よ」

「ああ、そうするよ」

ベッドから降りた上条は包帯の巻かれた足を少し引きずりながら歩いていく。

そして病室から彼が完全に出て行くと、フレンダは絹旗に視線を送った。

「で、あの話し信じる？ 裏の奴なら早めに処分しないと」

「はっきり言って超怪しいです。LEVEL5を倒せるLEVEL0なんて超あり得ません。あんな能力なら引き込まれておかしくないですし。やっぱり……」

「決めるのはむぎのだよ」

滝壺の静かに制止をかける言葉に二人は押し黙った。そうだ、結論は麦野が下す。麦野なら上条当麻という青年がどの世界の住人か知っているだろう。

上条はスポーツドリンクのペットボトルを二つ片手に持ち麦野の病室を目指す。

パタパタとスリッパを鳴らしながら廊下を歩いていると、向こう側から白衣を着たカエルに似た医者がやって来た。

「おや、歩けるのかい。君の太股辺り挟れてたから不安だったが、

大丈夫そうだね？」

「挟れてた！？」

思わずペットボトルを取り落とす。しかし医者は柔和な笑みでそれを見つめる。

「足が動かなくなるほどではなかったからね？それより彼女に会いに行つてあげなさい。もう起きたから」

「あ、有り難う御座います！」

ペットボトルを取ると上条は走り出した。後ろ姿が小さくなる。医者はカルテを険しい表情で睨んだ。麦野のカルテだった。

「しかし、なぜ……」

「やあ、冥土歸し。そのカルテをくれないかい？」

「……君は！」

上条が歩いて来た道から一人の女性がヒールを鳴らしながら悠々と現れた。

黒く長い髪を頭の高い位置で結い、切れ長の瞳は薄ら笑いを浮かべ、紅を引いていない割には赤く。どこか毒々しい微笑みを口元に刻んでいた。

美と何かしらの魔性を孕んだ雰囲気屈する事なく、冥土歸しと呼ばれた医者は強固な意志でそれを拒んだ。

「残念だが、渡せないね。本名不詳、コードエラーこれは僕の大事な患者さんの情報だ」

「おやおや、だけどこの不肖不出来の私の愛しい愛しい、研究対象でもあるんだ。どうしても駄目かい？」

「僕の気持ちは変わらないよ」

「アッハッハ！仕方ないね。君を敵に回すのは忍びないから今日は退散するよ。またね冥土歸し」

一語一語が絡み付く抑揚のある声に冥土歸しはどこかうんざりとした顔をする。

「早く帰ってくれ。ここは君が居ていい場所じゃない」

「つれないね。師匠もお元気で」

“師匠”の一言に今度こそ嫌悪の表情をした。忘れたくてたまらないと言いたげな彼に本名不詳は妖艶な笑みを湛えた。

それ以上なにも言わず彼女は歩き出す。来た道を引き返しながら携帯を開き通話を始めた。

「あー、数多？そうこの不肖不出来の私だ。相談したい事あるから私の根城に来てよ。………つまんなくないって。もしかしたら君が今研究してる物の糸口が見つかるよ？」

それだけ伝えると本名不詳は携帯を閉じる。口元の愉しげな笑みに

は悪魔の微笑みにも似たものを感じさせた。

「……………う、緊張するな」

昨日の事もあるし、いきなり撃たれないだろうか。そんな心配をする自分の小心さを怨みながらノックした。

「どうぞ」

平坦な声だった。

「失礼します。麦野、大丈夫か？」

「ああ、上条か。あんたに比べりゃ軽傷な方よ」

頭に包帯を巻いた彼女はヒラヒラと手を降る。元気そうな姿にホッと安心した。

「よかった。ほら飲むだろ？」

「……………なんだか、昨日とは反対ね」

「そうだな。昨日は麦野がくれたもんな」

「……ありがと」

「おう」

軽く受け答えすると二人はキャップを捻り取ると、冷たくさっぱりとした甘さのある液体を流し込む。

口を離すと、麦野はペットボトルを弄りながら問う。

「ねえ上条は、私達と同じなの」

「同じ人間だ」

「それを聞いたんじゃない。私達と同じ事をしたことあるの？人殺しとか……」

そつと麦野は瞳を伏せた。人に誇れる事じゃないのは百も承知でやってきた事だが、後ろめたさが無い訳ではないらしい。

その事に上条は内心良かった、と思う。

「ない」

はっきりとした否定の言葉に麦野は身を縮めた。彼女の内では罪悪感が湧き起こる。

真っ白な世界の彼に闇の一端を見せてしまった。そして、何よりも人が無惨に死ぬ姿を見せ付けてしまった。命が尊いと思う彼にその姿はどの様に映ったのだろう。

「……麦野。お前がしてきた事を聞かない。だからそんな顔するなよ」

「でも上条には汚い世界を見せたのは事実。本来なら私は上条を殺さないといけない。……見られたから」

泣き出しそうな麦野を見て上条は彼女の頭に右手を優しく置いた。それからゆつくりと髪を梳く。

「麦野は俺をどうするんだ？」

「……あんたがあの場合に居たこと隠蔽する」

勿論、バレたら厳罰ものよ、と麦野は苦笑した。上条を一時的とも永遠ともどちらに転がるか分からない処置をするのは、きっとそれが限界なのだろう。

「いいのか俺の為なんかに？」

「うん、いいの」

麦野はシーツを強く握り締める。どこか覚悟を決めた面持ちをしていた。

それから何かを思い出したように上条に振り向く。

「上条、最後あんたなにしたの？」

「え？ なになに……」

「あんたの右手から竜の頭が生えたのよ」

「……………」

「呆れた。覚えてないのね」

眉間に皺をよせ考え込んでいた上条に突き放すような一言を放つ。
しかし仕方ない、覚えてないものは覚えてないのだから。

「わりい、なんのことだかサッパリ」

「しょうがない。ならもう聞かないわ。この病院の医者、腕が良すぎるから明日には快復できるわね」

「なら退院パーティーでもするか？」

スパーン！と扉がいきなりスライドして二人は身体を強ばらせたが、
明るい声が聞こえた。

「それは賛成な訳よ！！」

「フレンダ！そこはラブシーンを超堪能するために息を潜めるべきです！」

飛び出してきたフレンダを引き止める絹旗。しかしもう遅い。

「フーレンダア、それに絹旗あどっから聞き耳立ててたのかにやーん？」

「……ぐ、ごめんなさい」

「テメエ等、下半身に別れを告げろ!!」

「ぎゃああああああ!!」

「おいおい、喧嘩すんなよ。それにパーティーなら多い方がいいだろう?」

「それとこれとは話が別だ!」

「上条! 助けてほしい訳よ!」

「いやあああ! 超助けて下さい!」

足と腰にしがみつく二人をあやしなから上条は麦野を宥める。意外と重労働だ。

「なにしてるのみんな?」

遅れて来た滝壺がその不思議な光景に首を傾げる。

「お、滝壺。俺と麦野が退院したらパーティーやるんだけど来るよな?」

「行く」

間髪入れずに滝壺は返事した。麦野は勝手パーティーをする方向で進んでいるのが気に入らないのかそっぽを向く。

「私に行かないわよ」

「むぎのも来るって」

「ちょっと滝壺！」

「むぎの」

「なによ」

「………来ないとストライキするよ」

「仕事しろ！」

「いやいや、それ麦野がいつでも説得力ない訳よ」

「ああ！フレンダ言うようになったわねえ？」

殺し屋も泣いて逃げ出すような悪辣な顔をした麦野に睨まれたフレンダは素早く上条の後ろに隠れた。

「麦野対策！」

「巻き込むな！」

「かーみじょお、恨むならフレンダを恨めよ？真っ二つにしてやる
！！」

「うおおおい！」

「上条頑張って！」

無邪気に騒ぐ『アイテム』を見て滝壺は初めて皆が心から笑っているのを傍観する。本当に上条当麻は不思議な人間だ。

心は無条件に許せる。そんな人がむぎのの側にずっといてくれたら。でも――

だが、心の中でその考えを否定した。上条の気持ちを無視しては意味がない。彼が麦野を選ぶには、……………つまりそうするしかない。

愛のキューピット作戦

絹旗とフレンダにも協力してもらおうと滝壺は策を巡らし惟る。多少強引かもしれないが、そこはご愛嬌。そしてそれでも駄目なら、諦めよう。

「いらっしゃーい」

間延びした声が木原数多を出迎えた。

「こいつつうから来てみりゃ、何やってんだ？」

「ん、『ピンセット』を使って情報収集」

右手についた金属グローブのようなものを指差しそう答えた。人差し指と中指の二本にはガラスで出来た長い爪のようなものがついていて、そのガラスの中に、さらに細い金属の杭のようなパーツが収まっている。

「勝手に使っているのかよ？」

「私の根城の一品だよ？そんなのいらない。でもアレイスターには許可貰ったから大丈夫でしょ」

そう彼女の根城と言うのは、第一八学区・霧ヶ丘女学院の近くにある素粒子工学研究所だった。

それから『ピンセット』を操作しながら空中に存在する、そして空中に漂う何かを掴んだ。

「ほおやっぱり『滞空回線』の情報網は素晴らしいね」

「早くしろ、俺は忙しいんだよ」

「0次元の極点」

「!？」

その言葉に木原は驚愕の表情を浮かべ、その反対に本名不詳の女は淡泊な表情だった。『ピンセット』の操作をしたまま木原に背を向け取り出した詳細なデータを機器へと転送させる。

「不肖不出来のこの私も調べたんだが、アレって素晴らしく面白いね。どんな猫箱か気になって仕方ないんだよ。千変万化の神秘を現実に取り引きずり下ろすのは楽しいもの」

「それをどこで知った？」

「おや、私の情報網が卓越してるのは知ってるだろ？今更驚かないでよめんどくさい」

言及されたのにそれをしれっと突き返した本名不詳はつまらなさそうに肩を竦め、ファイルに綴じられてあった書類の紙束を真っ白なテーブルに並べた。

「それで、一次元を破る能力者を見つけたんだ」

「けっ、よく言うぜ」

「ふて腐れるなよ。不肖不出来のこの私が0次元に興味を抱き、適応する能力者を見つけられたのは数多のおかげだ」

褒められる事はどうでもいい。しかし目の前の女の甘言に木原はあからさまに嫌そうな顔をして床に唾を吐いた。

「気持ちわりいんだよ。口閉じろ」

「はっ、君はやっぱり言うねえ。ぶち殺したいわ。でもまあ、血縁者だからいいか。不肖不出来のこの私と違って数多は優秀だからね」

「なにが不肖不出来だ」

木原は忌々しそうに女を見据え牙を剥き出す。それは肉食獣がさらなる化け物を威嚇するそれに酷似していた。

「木原一族の最高傑作がよお！」

女は無言で笑った。静かに微笑みを湛え、木原の敵意をそよ風程度に受け取ると内ポケットから写真を取り出しテーブルに置いた。

「そんなのどーでもいい。適応する能力者は第四位のLEVEL5
麦野沈利。性格に難ありだけど全然OKでしょう。それとも私がやっていい？」

「好きにしろ。それこそどーでもいい」

「あら残念。もうちょっと食いつくと思ったのに」

楽しみが半減してつまらなさそうに唇を尖らせるが、それもいいか。と開き直り本名不詳はパソコンを起動させた。

「むしろお前に目を付けられた第四位サマが可哀想だぜ」

「酷いな。私は一途だよ？今は彼女以外どーだっていい。しっかりし0次元の極点か。応用はどれくらいかな？〈未元物質〉や一步通行

くらいほしいな。でないとつまらない」

嬉々としてキーボードを弾く本名不詳をほっというて木原は資料に目を通した。

そしてとある項目に目を細める。

「〈原子崩し〉の一時的覚醒？」

「あん？ああ、それ。〈原子崩し〉は昨日一時的に一方通行と同じ段階まで昇華したけど、残念。不明な理由で元のただのLEVEL5になっちゃった。まあ、恐らく覚醒前より各段に能力は飛躍してるだろうけど」

彼女は説明し終わると白衣を来て別の部屋へ飛んで行った。

「……貰ってくか」

木原は勝手に重要だと思われる部分を抜き取りそのまま研究所を後にした。

しかしその程度ならこの本名不詳には蚊に刺された程度。別に気にも止めないだろう。

そして移動した彼女は昨日の出来事を文字の羅列にして処理していた。

「不明な理由の原因、〈幻想殺し〉か。……イラつくなあ！折角の研究対象の価値下げやがってよお！殺せないのが口惜しいわ」

悪鬼のように醜悪に顔を歪め流れていく文字に毒を吐く。無意味と

わかっていてもこの怒濤の怒りは鎮められない。

気を取り直したように、本名不詳はニンマリと笑った。

「ま、いつか。大切なのはこれからだ」

再入院（後書き）

お気に入り
五十人突破！

有り難う御座います！本当に有り難う御座います！

しかし、上麦って人気なんですね。

祝・再退院

「体の方に異常はないね？」

「これと言って」

「そうか。……君には話さないといけない事があるんだ」

麦野はカエル顔の医者が張り詰めた表情をしている事に内心強張った。

「君の精神が恐らく、二つに分かれている。もしそうなら、能力を使う君に何らかの負荷が生じるだろうね？だから、少しでも変だと感じたら連絡をしなさい。いいね？」

「……………はい」

少しでも目を背けていたかったが、改めて目の当たりにした自分の中の変化に麦野は困惑した。無意識で手を白くなるほど握り締める。その力んだ肩に冥土帰しは優しく手を置いた。

「あまり抱え込まない事だ。自分が自分に押しつぶされてしまうよ」

「有り難う御座います」

嗚呼、なぜこの世界はこんな人殺しの自分に優しくしてくれるんだろ――

「それじゃ、御大事に。君は既に僕の患者さんだ。遠慮はいらないからね？」

「でも、出来るだけ自分で解決したい問題ですから頼るのは、最終手段です」

それもまた一つの道だと、冥土帰しは頷いた。

「麦野ー！タクシー来たよ！」

「はいはい、すぐ行くから！先生、有り難う御座いました」

「うん、上条君にもよろしくね？」

穏やかな微笑みで見送ると冥土帰しはゆっくり病院に戻っていった。彼を必要としている人々は今日も絶えない。

それは、彼が本当の医者だからだろう。

助手席に深く座り込んだ上条は後ろで騒ぐ女子四人、いや三人の会話を居心地が悪くなった。

「うう、納得いかない。超納得できません！」

「なによ絹旗。あんたなんで泣いてんの？」

後部座席には三人までしかスペースがない。なので出た提案は、絹旗を麦野の膝の上に乗せる、だった。

しかし、この歳特有の子供扱いしてほしくない！という彼女にはこれはちょっと屈辱的らしい。

「中学になって、膝の上抱っこなんて超あんまりです！………それに」

「中学ってあんたまだギリ小学生じゃないの？十二歳でしょ」

いじけた絹旗の頭を撫でながら麦野は彼女の言った矛盾を指摘した。しかし絹旗はそれ以上、思う所があるらしく聞いてない。

「どうして麦野はそんな我が儘ボディなんですか！？理不尽です！超理不尽すぎます！」

「藪から棒になによ」

「その辺を否定しないあたり、やっぱり麦野は凄い訳よ。でも絹旗の言いたい事分かるなあ。どうしたらボン！キュッ！ボン！の凹凸スタイルになれるの？秘訣はなに？」

「お前らセクハラで訴えるぞ。人をそんな目で見てんじゃねえよ！」

「背中に当たる感覚が超妬ましい！」

「なに！それは羨ましい訳よ！！」

なにやら胸の大きさ談議になりつつある流れを上条は聞き流す。この話題には関わらない方がいい。と直感が告げる。

しかし上条の後ろの席に座る滝壺は不思議そうに聞いてきた。

「かみじょうも胸が大きいと嬉しい？」

「うえ！？い、いやあ氣にした事ないかな」

「え？男の人って大きな胸が超好きなんじゃないんですか？」

「それは超偏見です！」

絹旗の間違った男性認識を改めつつ、上条はどっと疲れた。基本、ガールズトークは男が理解できない話題や意識の相違がある。この場合だってそうだろう。

「絹旗は背伸びしすぎじゃないか？子供扱いに不満を感じるのとは分かるけど、もうちょっと無邪氣にしてた方が可愛いぞ？」

「む！でも子供って言うことでジェットコースターに超乗れなかった私の気持ちを超考えて下さい！」

「ごめん、絹旗は無邪氣だよ。そのままでいて」

「ウニ頭の癖して超生意気です」

頬を膨らませて不機嫌なのをアピールしているのか、それともいつもそうなのか上条の知るところではないが、そうしていると年相応の子供だ。

そんな子供が人殺しをしてるんだ。上条がつい思いにふけてしまいそんな事を心の内で呟いて、虚しさと悲しさがそこにあった。

彼女にこの気持ちを打ち明けても同情としか受け取ってもらえないだろう。でも思わずにはいられない。

激しいジレンマだ。社会が彼女に強要している事は許せないが、自分に対抗できる何かがあるわけじゃない。無力と言う言葉がこんなにも心を抉るなんて知らなかった。

「……はぁ…」

こんな荒んだ心でどんな綺麗なモノを見ても色褪せて見える。

「どうしたのかみじょう？」

「うん、平和だなあってさ」

今、この時が。

しかし感傷に浸っている暇をくれなかった。

「なんだか上条って早死にしそうな訳よ」

「なんですと!!」

「今のは確かにB級映画の超死亡フラグ台詞並みでしたもんね」

また車内が盛り上がった時、麦野が運転手に声を掛けた。

「すみません、この辺りで私降ります」

「あれ、どうしたの麦野？」

フレンダの問い掛けに麦野は面倒くさそうに明るい栗色の髪をかき上げた。

「仕事よ」

「!」

その一言に、特に後部座席の皆は顔色を変えたが麦野はさらに続ける。

「半導体の切断とか、マイクロチップの凄く小さき奴の切断とかチマチマしたのをやるの」

「あ、なるほど」

安堵が含まれた絹旗の声に麦野は頷くと携帯の時計を見た。

「だからパーティーは昼か夜ね。滝壺達は外食かなんか考えといて」

「結局、押し付けられた訳よ」

若干、棘があるフレンダの愚痴に麦野は勝ち誇ったように胸を張る。

「いいじゃない。私と上条の退院祝いなんでしょ？それくらいやんなさいよ」

「任せて」

そう言ったのは滝壺で、麦野は珍しいものを見るような視線を送った。

しかし滝壺はいつも通りなにを考えているか分からない。

そこに上条が恐る恐る声を掛けてきた。

「邪魔じゃなかったら、ついて行ってもいいか？」

「大丈夫“普通”の仕事よ」

「駄目、か？」

「……………」

声もそうだが、表情からして上条が捨てられた子犬に見えた。あまりに悲痛な面持ちで俯き、麦野にやんわりとだが拒絶されたのが響いたのだ。

そこに、さあどうする？と言った『アイテム』メンバーの視線が麦野に突き刺さり彼女は苦虫を噛み潰したような表情をする。

暫くの沈黙の後、麦野が観念したように両手を上げた。

「分かった。降参よ。付いてきてもいい、でも上条は凄く暇になるわよ絶対にね」

「ああ、それでも構わない！有り難う麦野」

「有り難うって大袈裟な……」

呆れながら麦野はタクシー代を払うと上条と共に車内から出た。

硝子越しに三人が手を振る。それに応えるように上条が片手を上げ、麦野は適当に返す。

タクシーは滑らかに走り出し、車道の向こう側へと姿を消した。

「それじゃ、行くか」

「そうね。少しバス移動するわよ」

そう言う彼女が歩き出した。慣れ親しんだ道なのだろうか、迷わずバス停までたどり着くと時刻表を確認してベンチに座る。上条もその隣に座った。

「後、六分くらいね。上条はなんで私についてきたの？」

「たぶん麦野の事を知りたかったからだ。俺なんかが踏み入れられない事ばかりだけど、今みたいなことなら良いんだよね？」

「まあ、ね。でもLEVEL5は基本能力やその他の事にはかなり秘匿されるの。公開されるのは案外名前くらいよ、本当に。だから私が仕事してる所見られないかも」

ロングブーツを穿いた脚をぶらつかせながら麦野は真っ青な空を仰いだ。

「いいさ。俺が勝手についてきたんだ。終わるまで待ってるよ」

裏表のない優しい彼の本音に麦野は空見詰めたまま溜め息をついた。どうしようもなく暖かい。

「捨てた筈なのに、棄てて溝に浸かった筈なのに。なんであんたはそんな事言うの？」

「麦野が棄てたなら俺が拾ってやる。簡単な、生易しい問題じゃないのは百も承知だ。でも、やっぱり笑ってほしいんだ。これは俺のエゴだけど」

最後の一言に麦野は笑った。全くその通りだと。そしてその行為を黙認し、止めさせない自分は――――

「全くもって大馬鹿ね」

「どうしたんだよ急に？」

「上条だけには絶対に言わない」

彼は言ったのだ。自分が捨てて、棄てたモノを拾ってくれると。な

ら、彼の前ならきつと人間である“麦野沈利”が許される。人の心を棄て化け物になる事を選択しなければならぬ暗闇の世界だけじゃない。

それだけで、心がこんなにも軽くて自分の中の氷の世界がゆっくり融解していく。

そう、ゆっくりと“溶け出す”――

溶け出す？融解？

刹那、麦野視界が闇に染まり胃をひっくり返したような不快感に襲われた。慌てて口元を押さえ呻くと、上条は急な展開に当惑。

「ぐう！……んッ！」

「おい、大丈夫か！？」

背中をさする上条はこれが焼け石に水だと分かった。麦野が苦痛の為にさらに顔色が悪くなっていく。嫌な汗が噴き出し呼吸音もさらに小さくなっていく彼女を見て上条は携帯を急いで開き、救急車を呼ぼうとしたら麦野がそれを止めた。

「だい、丈夫だか……ら」

「どこが大丈夫なんだ！顔面蒼白な奴に言われても説得力無いぞ！

「？」

「いい、の。……本当に、大丈夫」

息も絶え絶えに言葉を紡ぐ麦野は一度、大きく空気を吸い込むと上条に寄りかかった。

「麦野？」

「うん、大丈夫。だいぶマシになった」

吐き気の後には猛烈な頭痛にも襲われ正直、死ぬかと思ったが身体は持ちこたえてくれた。

優しく背中を叩きながら上条は麦野を心配そうに見詰める。

「無理すんな、ってもう遅いか」

「なにか、思い出しかけたんだけど。何だったかな？」

虚ろな瞳で囁く麦野の言葉に上条は首を捻った。

「なにを忘れたんだよ？」

「解ったら苦労しない。昨日の事、実は途中から虫食いみたいに記憶がまばらに飛んでるの。あの医者も不思議がってた」

なんと返したらいいか分からず黙っていると麦野は立ち上がった。慌てて支えようと麦野はまた大きく呼吸をする。

「ふう……。ありがとう。バス来たわよ」

「今日は家に帰ったらどうだ？」

「……実は最近この手の仕事サボってたから、今日来なかったらヤバイのよね……」

「麦野……、今度からちゃんとやれよ？」

「………確約はしない！」

開き直った彼女はもういつも通りでバスの中に入っていった。その後から上条も乗り込む。

人が少なく、上条達は適当に空いた場所座った。

「どこまで行くんだ？それまで寝てていいぞ」

「人前だともう眠れないのよ」

彼女の歴史の一端に触れた気がした。

それは上条が想像する以上に黒く冷たいものだろう。

「そうか、仕方ないな。でも麦野、無茶はするなよ？」

「それも確約しない」

「そこはしてくれ……」

麦野は返事を返さず黙って窓の外を見た。

それから30分は無言を押し通したが麦野が降車するボタンを押した。

「次か？」

「そ、半導体研究所とかよ」

バスが止まり扉が開くと麦野と上条は料金を払い降りた。そして目の前の建物に麦野は慣れた感じで入って行く。

自動ドアをくぐり、中に入るとクーラーが稼働している音がする。涼やかな微風に癒されていると、麦野が上条を手招きした。

「なにやってんの、こっち来なさい」

「悪い、クーラーの風に当たってた」

「おや、君は誰だい？ ああ、それとやっと来たんだね麦野さん」

白い廊下の奥から姿を現したのは、真っ黒の髪を頭の高い位置で結った女だった。化粧のない顔は清潔感があり、唇は紅を引いていない割には赤く、どこか毒々しい。

その女の顔を見て麦野は表情を消した。

「一応聞くな？ 君は誰だい、麦野沈利さんの友人それとも……」

「私の付き添い」

「そっか、つまらない所だけごゆっくり」

素っ気ない麦野の返答にも眉一つ動かさず受け答えると、女はのんびりと歩を進めた。

「いつものアレお願いね。ナノメートル並みのサイズは君の極細へ原子崩し」じゃないと無理だからね。三ヶ月もほったらかしされたからどうなるかと冷や冷やしたもんだ」

嫌味なく言っているつもりなのだろうが、元来絡みつくような抑揚の声で喋る彼女がどんなに賞賛しても嫌味に聞こえてしまう。

おかげで麦野の眉間には縦皺が刻まれた。

「喋んなクソババア！気持ち悪いいんだよ！」

「あっは！君も言うねえ。麦野さんにはいろいろ期待してるから、お灸を据える事が出来ないのが残念だあ」

麦野の発言にも憤慨した様子は見せず、おっとりした声で言ったお灸を据える発言もなんだか冗談じみて聞こえる。

「さて、持ち場について貰おうかな？なんせ三ヶ月分もあるんだから。ああ、君はこっち来てくれるかい？そっちは麦野さん専用通路だからさ」

麦野と同じ扉を潜ろうとした上条に女は声を掛けた。

上条は頷くと麦野に振り向く。

「なんだから、一緒には居られないみたいだな」

「……仕方ない。それじゃまたね」

一瞬だけ、迷った素振りを見せたが無理に自分を納得させると麦野は一人、扉の向こうへ消えてしまった。

「おいで」

「あ、はい！」

女は先導する。ヒールを鳴らしながら長い廊下を歩く。上条はその後ろについて行った。

それから突き当たりの扉を押し開くと、上条を招き入れ扉を閉めた。

そこはガラス張りの壁で下が見下ろせる造りになっている。女は椅子に座ると目の前の機械を操作し始めた。

「ねえ、君の名前は？」

「上条当麻です。えっと……」

「ん？ ああ、私の名前は本名不詳だ。コードエラーよろしくね上条君」

「いや、名前じゃないですよ」

思いつき名前が無いと言っている彼女に上条はどう対応しているのか分からなかった。

「うん、名無しだよ。名前がない歴Ⅱ年齢だからさ」

「彼女居ない歴みたいと言わないで下さい。なんだか締まりがないですよ」

「好きに呼べばいい。それに敬語なんて使わなくていい。人の為になるような事してないし」

無機質な音を出す機器を操りながら本名不詳と名乗った女は手元のモニターで部屋に入ってきた麦野を見るとマイクを手を取った。

「いつも通りやるぞ」

「いつも通り頼むよ」

短い会話を終わらせると麦野は天井からぶら下げてある板に向かって〈原子崩し〉の極光を撃つ。普通の板なら貫通しているが、特殊な物らしくぶつかった〈原子崩し〉の極光を細く升目になるようにして、向こう側にある半導体を切断した。

それが終わると直ぐに新しい半導体の板が出て来る。また麦野が特殊な板に〈原子崩し〉を当て、加工させら極光は半導体を斬る。

何とも単純な流れ作業だ。

「案外、地味なんだな…」

「でも、麦野さんにしか出来ない事だ。もうちょい精密さが上がれば拡散支援半導体の板なんて必要なくなるかな？」

シリコンバルーン
「拡散支援半導体？」

本名不詳の口から出てきた不思議ワードに上条は首を捻った。

「うん、彼女が初めて拡散支援半導体を使った映像あるけど見る？」

「じゃ、ちよつと見ようかな」

軽く二つ返事をする女は手元のモニターを変え映像を流し始めた。

そこには今よりも三、四歳は幼い彼女が映し出され、カードのような物に向かって〈原子崩し〉を撃つ。それがなんと一四本の極光に枝分かれした映像だった。

それを見て上条は冷や汗を流す。見覚えがありすぎる。昨日のアレだ。

「さっきのが拡散支援半導体さ。こうやって便利な物に使えるわけだ」

「戦闘向きな道具でもありますよね？」

「なに、アレを喰らったことあんの？」

「……………」

沈黙を肯定と取った本名不詳は長い溜め息をついた。

呆れた表情の彼女は麦野に物を言う訳ではなく上条に言った。

「どうやって生き延びたよ」

「運？」

「幸運だね。つか拡散支援半導体を使わせる状況にどうやって追い込んだの？」

「…さあ？」

「ふうーん」

両者なにかしら含みを持たせた一言に会話が切れる。そこに麦野の怒鳴り声が響いた。

「おい！いつまでやんだよッ！」

「後五十枚。三ヶ月って偉大な時の流れだね？」

「お前絶対根に持ってるだろ！！」

「さあね。お仕事溜めたのは君だよ君。麦野さんはキリキリ働く」

「……覚えとけよ」

マイクのスイッチを切ると本名不詳は頬杖をついて、流し目で上条の右手を見た。

「上条君は麦野さんと恋仲？」

「いやいや、あんだだけの美人が上条さんなに振り向くわけじゃないですよ。てか恋仲なんて今時使う人居たんですね」

「最近はカップルだとか恋人だもんね。接吻とか近頃のガキは知らないんだろうなあ」

しみじみと呟きながら本名不詳は椅子に座ったまま背伸びをする。

上条は撃つ速度を上げ早く終わらせようと躍起になった麦野を観察していた。

「おお、速い速い」

「彼女、飽きると雑にぶっ放すからね。でも中心点ズレてないのに連射速度とか上がったな。まあ何せ三ヶ月前の情報だし、進歩してるのは当たり前か」

本名不詳は嬉しそうにメモを走らせると内ポケットにしまった。

今回の仕事が終わった事を伝える電子音が鳴る。それを止めると女は上条を手招きした。どうやら部屋を出るらしい。

「つまんなかったろ？単純過ぎる流れ作業でさ」

「でも、真面目な顔をしてた麦野が新鮮だったかな」

「いつも彼女、どんな顔をしてるの？」

廊下にはヒールで硬質な床を叩く音だけが虚しく響く。

「憂いた表情をしてる」

「そうか」

「なんとかして笑顔にしてやりたいんだ」

「それは難しいね」

声音を変えることなく上条に言葉を突き刺す。

「でも、諦めてたまるか」

「出会って日の浅い君がなんでそんなことにこだわるの？」

「目の前で泣いてる人を放っておけないだろう？」

「それは君の価値観だ。私は違う。きっと放っておくさ、面倒だしね。なによも」

さらっと上条の倫理をぼっさり切り捨てた本名不詳は歩調を変えない。そして振り向かない。子供の心を砕いたとしても自分を中心とした堅い精神は傷つかなかった。

そこらの奴らなら上条の事を偉いと賞賛するかも知れないが、内心、夢物語だと馬鹿にする方が圧倒的に多い。恐らくこれが一般の対応だ。

だが本名不詳は上条の考え方自体、と言うよりも自分にそれが当て

はまらない事を指摘した。なにも皆が優しく強い訳ではないと、彼女は遠回りながら言っている。

何となく頭で彼女の言いたい事が理解出来た上条はその後ろ姿を見つめた。

「本名不詳さんって実は嫌われ役買ってでるでしょう？」

「あつは！そー言われたのは初めてだな。ただ個人と言う単一存在は大切なだけだよ。代替え出来ないんだから困りもんだ。特に研究だそう」

最後の一言が無ければなあ、と上条は呟いた。それは彼女に届いたかは解らないが、本名不詳は楽しそうに扉を開けた。

その先には麦野が腕を組んで待っていた。ややご機嫌斜めである。

「お疲れ様麦野さん。銀行に振り込むからご心配なく。それとも現生がいい？」

「銀行でよろしく、行くわよ上条」

「えっと、またいつか！」

先に行ってしまった麦野を急いで追いかけて駆けだした背中を見ながら本名不詳はニコニコと笑った。

「うん、必ず会うよ君達とはね？………しっかし面白い子だ。稀にみる純朴青年、絶滅危惧種だよ」

喉に引っかかったような笑い方をする。次に舌なめずりをした。嚙猛な獣と言うよりは執着に獲物を狙う爬虫類、特に蛇のそれに近い。携帯が控え目にバイブと音で着信を知らせる。取って耳に当てると彼女の第一声はこうだった。

「どうしたアレイスター？」

祝・再退院（後書き）

ふう、これで何話目だっけ？

帰り道の出来事

麦野と上条が研究所を後にして、残った本名不詳は携帯片手にパソコンのキーを弾いていた。コードエラー

「んー、麦野沈利の能力は確かに上がった。けど、覚醒してはいないみたいだ。冥土帰しのパソコンにハッキングして分かったけど、彼女記憶が一部分欠落してる」

「なるほど、記憶の欠落、か」

「こちらの推測だが、〈幻想殺し〉のせいだよな？彼が殺した、若しくは麦野沈利の奥深くに閉じ込めたのは“原子崩し”だ。記憶が欠落してるのは、思い出しただけで覚醒して今度こそ麦野沈利が喰われるのを手前で食い止めてる程度。ギリギリ人間でいる状態。ねえ、彼女に暗部の仕事回していいの？」

「推測は外れてない。そうなのだろう。彼が幻想殺しに願ったのは、人間を捨てた麦野沈利を元に戻すことだ。暗部の事、特に『アイテム』は君に一任しよう」

携帯端末の奥から、男にも女にも、老人や子供にも聞こえる悪寒のする声。しかし本名不詳は特別気にはしていなかった。彼女の器が大きいのではなく、ただ同じくらいの変人なだけだ。

「コイツ、全権私に投げ捨てやがったなこん畜生。……0次元の極点には支障はないから、別に覚醒促す事はしなくていいんだけど」

「いや、覚醒をさせてくれ」

珍しいアレイスターの欲求に本名不詳は指の動きを止める。情報処理に割いていた集中力を会話に集中させた。

「なんで、発狂するよ絶対だ。一方通行の比かどうかは分からないが損害は被る」

「プランの一つである〈幻想殺し〉の力があの戦いで鱗片を見せた。理由はそれだけだ」

「はあ、なんだかややこしい。ついでに〈幻想殺し〉もよろしくって事かい？」

小さく零れた笑い声に本名不詳は肯定と受け取った。

「……今年は厄年だな」

抗いようがないのでせいぜいたっぷりの皮肉を込める。相手は特に意に介さず特有の声で別れを告げた。

「では、朗報を期待しているよ」

「アンタがやれ」

切実な言葉は携帯のツー、ツー、と言う音に飲み込まれ本人の耳以外入らなかった。

「あーッ！やっと終わった」

「どんだけ仕事ため込んでたんだよ」

「さっきの五ヶ月溜めた奴と半導体切断の奴、三ヵ月分の仕事を溜めてただけよ。まあ流石にヤバかったわ」

すっかり太陽が真上に来ていた。病院を早朝に出たのが嘘のようだ。

「その口調だとあといくら放置してんだ？」

麦野は指折りに数える。

「五個くらい？」

「悪いこと言わない。今から仕事を消化しに行こう」

「やだあ」

「可愛く言ってもダメ！」

「……脱いでもダメ？」

思わず上条の視線が麦野の豊満な膨らみに向く。服の上からでも分かるくらい豊かな胸だ。ふと、絹旗の言葉が回想された。

『背中に当たる感覚が妬ましい!』

無意識に喉が鳴る。

ニヤニヤと笑う麦野と目があった。

あらぬ方向に思考がぶっ飛んでいた上条は、我に返るとさっきの自分を厳しく叱りつける。

しっかりしろ上条当麻!! お前は紳士だろうがッ!!!!!!

「脱ぐのはもっとダメだ! 公衆の面前ですよ麦野さん!!」

「鼻の下伸ばしてたかーみじょうが言う台詞じゃないわよね?」

痛い所を突かれてぐうの音も出ない。

「否定できません。でも、いきなり脱ぐだなんて言われたら驚くだろ!? ハッ、まさか最近の学園都市の都市伝説にある“脱ぎ女”は麦野だったのか?!」

「ちよっ! 変な言い掛かり止めなさいよ! 誰が人前で脱ぐか!!」

道の真ん中で堂々と喧嘩し始める二人は周りの視線を否応なく集める。しかし殆どの人はチラ見程度だ。

「言っとくけど露出癖なんてないから!!」

「説得力がないと感じてしまうのはなぜだろう……」

「かーみじょう」

「はい！なんでもありません！！」

麦野の周りに不健康な色をした発光体が浮遊する。上条は反射的に敬礼をした。

すると不意に予想だにしない方向ら声を掛けられた。

「すまない、青い車を見なかったか？」

「はい？」

声をした方を二人同時に振り向くと、なんだか眠たそうな顔をした、そして目の下に隈を深く刻みつけた女性が少し困り顔で立っていた。

「実は車を止めた駐車場を忘れてしまってたね。交差点の近くだったんだが……」

「ジャッジメント風紀委員に聞けよ」

突き放したような麦野の対応に上条はギョツとしたが、女性は気にせず腕を緩やかに組んだ。

「ああ、そう思って歩いて居たんだが見つからないものでな。暇そうな君達に手伝って貰おうと思ってね」

さらりと酷い言いようである。

「時間あるよな麦野？」

「ん、なに助けるの？」

「ああ、そうだ」

「はああ、発病した」

「なんだよ、その言い草は」

そんな言い合いをしていると、女性は手で自分を仰ぎポツリと呟く。

「熱いな……」

ワイシャツのボタンをプチプチと外していく。あまりにも普通に外していくために唾然として行動を起こせない二人。

周りの反応など無視して女性はワイシャツを脱ぎ、見事上半身下着になった。

「っ！？？」

絶句するしかない。

女性はシャツを腕にかけると額を拭う。

「炎天下の中歩くと疲れるな」

「……………それよりシャツ着ろ」

麦野は声を絞り出して女性に命令するが、彼女は腰に手を当てよく分からない顔をした。

「なぜだ。暑いじゃないか」

「いやいや、早く着て下さい!!」

今まで石になっていた上条はシャツを奪い取ると女性に着せようとした。

麦野はその対応はちょっとマズいと思って注意しようとしたら、何処からか悲鳴が上がった。

「女の人が襲われてる!!」

ああ、やっぱりそう思ったか。と麦野は独白する。

そして別の所から怒鳴り声が出た。

「あ、アンタ! なに公衆の面前で女性襲ってんのよ! ……天誅ッ
!!」

「ゲッ! ビリビリ、これは違っ」

「問答無用だあああああ!!!!」

真っ直ぐ中学生くらいの女の子が上条に突進する。上条はシャツを麦野に押し付けると、中学生から逃げるために走り出した。

「不幸だあああああああ!!!!」

お決まりの台詞を絶叫しながら全力で駆け出す背中を黙って見つめ、手の中のシャツを上半身ほぼ裸の女性に突き出した。

「自分の為じゃなくて、私の為だと思うならコレを着ろ。いや、着て下さいお願いします」

もう土下座してでも着てほしいくらいだ。

彼女はシャツを着る事を承諾した。しかし涼のある場所に行くと言う条件で。

「ここは涼しいな。生き返ったようだ」

「私はアンタを殺したい気分だ」

麦野は頭痛のする原因を半眼で睨むが女性は椅子に座ると、スープカレーの缶を差し出した。

「なんでホット？」

麦野はオープンカフェの安い椅子に深々と座りながらそう尋ねた。

さっき目の前の女性が言ったようにオープンカフェなのに涼しいのは空調を工夫しているからだ。

「暑い時には熱い物が健康にいい。それにカレーのスパイスには疲労回復を促す成分がある」

「いや、理屈は理解できた。でも暑いと冷たい物を飲むのが普通じゃない？」

「む、そうか。若い娘はそう考えるものなんだな。買い直してくる」

「大人しく座ってて。それにゲテモノ買ってきそうで怖いから。で、アンタ名前は？」

「私は木山春生だ。君は？」

木山と答えた女性は椅子に座りながら質問した。

「……麦野沈利」

淡泊に答えると木山はスープカレーを飲む手を止めた。

「麦野？」

「聞いたことくらいあるんでしょ。第四位〈原子崩し〉くらい」

「君がか。なんだか普通の人だな」

「外見まで化け物でたまるか」

木山は再びスープカレーを飲みながら流し目で麦野を見つめた。

「どうした、飲まないのか？」

「…………いや、それは」

「うん？」

「いただきます」

麦野は一気に飲み干すと体温が上昇したのを感じた。

「いい飲みっぷりだね」

「酒の方が飲みたいくらいですよ」

「だがしかし君は学生さんだろ？高校生ならまだジュースだ」

その言葉に麦野は感動し打ち震えていた。今の今まで大学生だと散々思われていた中で、恐らく唯一彼女が自分の学生の位を一発で見抜いたからだ。

ちょっと嬉しくて泣き出しそうだ。

「木山さんっていい人ですね」

それだけで良い人なら安いものである。

しかし木山は瞳を伏せた。

「いい人か……」

「どうしました？」

小さく振りかぶると木山は顔を上げた。

「いや何でもない。さて……」

「うわぁっ！」

立ち上がりとした彼女に不幸な出来事が起こった。

それはとある少年がアイスを買ってもらいはしゃいでいると転けてしまい。しかもアイスが木山のスカートを汚した。

「ご、ごめんなさい」

うなだれて涙声になりながら謝る少年に麦野は少し感心した。きちんと謝れるなら許すべきだ。

木山は少年の頭に手を優しく置くと微笑みながら言った。

「心配するな。脱げば大丈夫だ」

そう、脱げば………って!!

「だから脱ぐなッ!!」

「へ?」

スカートを太股辺りまで脱いだ木山は突然怒鳴った麦野に疑問の声をぶつけた。

少年はもう真っ白になっていた。

「まったく、こっちに来い！」

スカートを穿かせると麦野は木山は女子トイレに強制移動させた。

少年には悪いが暫く放置である。

「ほら、個室に入ってて。スカート洗うから」

「うん。悪いね」

「それよりいきなり脱ぐな」

それから麦野は無言でスカートを洗い始めた。クリームはまだ固まっていなかったから直ぐに落ちた。皺がつかないように丁寧に絞る。雑巾絞りなんて厳禁だ。

それから空気乾燥機にスカートを突っ込み乾かしていく。

学園都市が誇る空気乾燥機は濡れている物に合わせて風圧、温度を変え素早く乾かす優れもの。後三分もすれば乾くだろう。

「すまないね」

「……まあ、今回だけだと思う」

「そうだ。君はさつき化け物だと言っていたが、最初に居た彼と一緒に居たときも今も君は普通の女の子に見えるよ」

その言葉に麦野の身体が固まった。

息を飲む気配を感じた木山は言い聞かせるように麦野に囁く。

「君は君が思っている以上に女の子だよ。だって麦野さん、彼のと好きなんだろう？」

「はあっ?! なに言ってるの。アレはそんなじゃない! 上条は……」

萎んでいく声に木山は小さく笑った。

「何について悩んでいるか私には分からないが、有耶無耶してしまえば、多分君は後悔する。好きか嫌いか。特別か友人かの区別はしておいて損はないはずだ」

「っ! うるせえ!」

麦野は乾いたスカートを個室に投げ込んだ。雑に扱った割には木山は怒ってなどいなかった。

「綺麗に乾かすね。皺が全然ない」

「ふん!」

「素直じゃないのも青春か……」

どこか悟ったような響きに麦野は久しぶりに子供扱いされて戸惑った。精神面で比べたら恐らくこの人に適わない。そう納得させるだけの何かがある。それは傷ついた者を包み込む母性のようなものなのかもしれない。

麦野はこんな人がすこぶる苦手だ。境界線を見捨ててズカズカ割り込む奴は大っ嫌いなのに、また違う強引さには戸惑ってしまう。

木山は個室から出てくると顔だけじゃなく耳まで真っ赤にした麦野を見て微笑んだ。

「やっぱり青春だね」

「次なにか言ったら真っ二つにするぞ」

「む、それは凄いな」

「驚くな！」

まったくもって苦手である。

「車を探しに行こうか」

「まさか、手伝えって？」

「そうだが？」

当たり前だと言わんばかりの木山に麦野は肩を落とした。もう抵抗する気力も皆無だ。

「分かったわよ。はあ……」

溜め息が最近多い気がする。

「まったくなんで駐車場を忘れるかな」

「でも無事に見つかったよ有り難う麦野さん」

そう言って木山はエンジンをかける。

麦野はその車を凝視していた。ランボルギーニ・ガヤルド。イギリスのスポーツカーであり、ガルウィングドアのタイプ。しかもかなりの高級車だ。

コイツ、ぼーっとした見た目の割には凄いもんに乗ってんだな。と言るのが麦野の素直な感想だった。

「教鞭を取っていた頃を思い出して楽しかったよ」

「へえ、なら今はなにしてるの？」

「ああ、AIM拡散力場を主に脳生理学を専攻とした学者だよ」

「学者さんね。でもアンタ学者よりも学校の先生が似合ってるよ」

麦野の言葉に木山は嬉しそうに目を細めた。

「そうか、そう言って貰えて嬉しいよ。またどこかで」

「その時は車無くしてないでよ」

うんざりしたように言ったら木山も苦笑した。

「善処しよう」

それだけを言うと彼女は車をゆっくり発進させた。見栄えのいい車は直ぐに見えなくなり麦野は今日一日が、長く思えた。

「帰るか」

麦野はすっかりパーティーの事を忘れて自宅へと、その歩を進めた。

帰り道の出来事（後書き）

なんか書くこと無いので皆様に質問！！（今回の小説の後付けくらいしろッ！）

皆様の好きな歌手は誰ですか？（この小説と全く関係ない？！）

パーティー

パン！と何かが破れる音がした。

「おかえりー！そして退院おめでとう」

「超退院おめでとうございます！」

それはフレンダと絹旗が麦野にクラッカーを向けて紐を引いたからに他ならない。

目を白黒している麦野に二人は近寄り家に上がる事を促した。

「ほらほら、早くご飯食べようよ」

「上条も麦野の為に料理を超作ってるんですから」

「いや、ここ私の家よね？鍵は閉めてきたし、なんであんた達家に入ってるの？」

麦野の疑問にフレンダは自慢するように答えた。

「フン！窓の鍵までは閉めてなかった訳よ。そこから入って内側から施錠を外しただけ」

「泥棒紛いな事やって誇るなッ！」

「イタッ！」

勢いよく頭を叩いた麦野はブーツを脱ぐとフローリングの床にスリッパを出して迷うことなくリビングに向かう。

魚を焼いているような匂いが麦野の空腹感を刺激した。

「ただいま」

「あ、お帰りむぎの。待ってて、鮭が焼けたら食べよう」

食器を並べる滝壺は一度手を止めると、出入り口を見る。しかしそこには誰もいなかった。本来なら麦野がそこに居るはずなのだが、麦野は鮭と言う単語に反応してキッチンに走り出した後だった。

滝壺はリビングから見えるキッチンを覗き込む。

「かーみじょう！鮭焼いてるってホント？」

麦野が上条の背中に抱きつきながら鮭を焼いているであろうグリルを見つめた。

「おわ！今焼いてるぞ。それより麦野ちゃんと手を洗えよ」

「はいはい」

軽快な足取りで麦野は手を洗いに行く。上条は鮭の焼き加減を見て、ひっくり返す。

その時、滝壺が隣にやってきた。

「お皿：終わったよ。ピザ持って行くね？」

「ああ、頼む」

「むぎの胸、柔らかかった？」

「ブフォ！？た、た滝壺さんなにをいっているんですの？！」

青天の霹靂ともいえる滝壺の発言に上条の口調は、どこかの風紀委員^{セント}になっていた。正直、似合わない。

「私も一度、むぎのに抱かれた事ある。その時とっても柔らかかった」

懐かしそうに語る滝壺を目尻に上条は口元を押さえた。

確かに柔らかかったと、上条は思う。しかし本人が聞いたなら百回はぶち殺し確定だ。

「かみじょうは、どう思う？」

「……これは拷問ですか？」

「質問です」

真面目な顔で質問すれば真面目な顔で返答してくれた。だが、上条にとってはおちつとも嬉しくない。

「柔らかかったです」

「なにが？」

「胸、とか。でも全体的に柔らかいと思うぞ。男女差かな？あとい
い香りがした」

「へえ」

「髪なんて細くてサラサラで柔らかいし、麦野って美人だよな。ん、
そろそろ焼けたな。えっとグリルは水に浸けとくか？」

「うん。その前に歯あ食いしばれ、かーみじょお！」

上条の全身の血が音を立てて引いた。油の切れた人形のように錆び
付いた動きで振り向けば、そこには素敵な笑顔の麦野がいた。

視界の奥では滝壺はテーブルにピザを置き、サラダをかき混ぜフレ
ンダと絹旗の皿に盛り付けている。三人は我関せずといった具合だ。

「麦野、これは、その！」

「……………食べるわよ」

それだけ言うと彼女は何もせずにリビングに向かう。首の皮一枚で
繋がった上条はその場にへたり込みたくなったが、焼き鮭を皿に盛
って4人の居るテーブルまで運んだ。

そして椅子に座ると斜め前の滝壺に囁く。

「滝壺、やってくれたな」

「私は質問しただけ。はい、サラダ」

「サンキュー。ほい、ピザ」

代わりにピザを滝壺に渡す。滝壺は受け取ると、ありがとう、と囁きピザを頬張る。

「ミートソースパスタが美味しい訳よ！」

「上条さんの自信作だからな。ピザは滝壺が作ったんだ」

「うん、生地はかみじょうも手伝ってくれた」

「超料理ができるんですね」

絹旗はサラダをつつきながらしみじみと呟く。

「きぬはたもやってみる？」

「いいんですか？」

「うん、いいよ。ポテトサラダから作ってみよう」

滝壺の提案に瞳を輝かせた絹旗は嬉しそうにサラダを食べる。その様子にフrendはやれやれと言った感じで茶化した。

「結局、絹旗は子供な訳よ」

「フレンダなんか超言われたくありません！」

「ほら、食事中に喧嘩しないの。フレンダ、私にもパスタ取って」

麦野がフレンダに取り皿を渡し、フレンダはパスタを適量盛ると麦野に返した。

さっそく麦野はパスタにフォークを差し込む。それから上品に巻き上げると、これまた上品に食べた。その姿を見て上条は彼女が良い家柄のお嬢様なんだと思った。

「うん！美味しい。上条は料理もできるの？」

「いや、パスタは安売りしてたりするからそれでよく作ってたただけだ。レパートリーはそんなに多くないかな？麦野は料理するのか？」

「するわよ。外食ばかりだと栄養バランスが偏るから。それに料理を怠ると女は男より悲惨になるものなんだから」

それを聞いてフレンダは溜め息をついた。

「はぁ…料理をしてないのは私と絹旗だけか……」

「今度から私、料理を超やります」

「なら、またみんなで食べたいな」

上条の言葉に四人は笑顔で頷いた。『アイテム』の皆もこんなに楽

しい食事と言うのは初めてかもしれない。ファミレスで集まっても好き勝手に料理を頼んだり、二名は外から持ち込み同じ料理を食べたという出来事も今日が初めてだ。

「なら私がその時超作ります！」

「私も手伝おうかな」

そして雑談に花を咲かせつつ食事をしていた上条は麦野が取り出したボトルが目にとまった。

「ふっふっふーん」

なにやら嬉しそうに シュワシュワと音が鳴る薄ピンクの液体をグラスに注ぐ。

それを見たフレンドが自分もと言わんばかりにコップを差し出す。

「フレンドこれジュースじゃなくてシャンパンよ？」

「分かってる分かってる。でも飲んでみたい訳よ」

「飲むなよ未成年だろ！」

「気にしない。気にしたら負けよ」

麦野は上条の注意を適当にあしらいつレンドのコップに半分注ぐ。その量にフレンドは不満足に麦野を見た。

「先ずは半分。それが駄目ならアンタにはまだ早い。滝壺は酔った

ら面倒だし、絹旗なんて論外ね。上条はいる？」

「謹慎処分にされたく無いからパス」

あっさり断った上条に麦野はつまらなそうな表情をした。しかし当たり前前の判断なのでそれ以上何も言わずグラスのシャンパンをフレンドのコップに軽くぶつける。

硬質な物同士が短い音を鳴らす。

「乾杯」

「かんぱーい」

麦野は広がる味を楽しむように少量含んだが、反対にフレンドは一気飲みした。いくら量が少ないからと言って飲み干したフレンドに絹旗は有り得ない者を見るような視線を送った。

「超なにやってるんですか」

「んー、思ったほど美味しくない」

一応彼女なりに味わったがいまいちだったようで、麦野はフレンドのコップに水を注いだ。

「ならフレンドにはいらないわね。滝壺は少しだけ飲む？」

「うん、もらう」

「どうぞ」

麦野は身を乗り出して滝壺のコップにシャンパンを注いだ。フレンダと違いたっぷり注いでやる。

「乾杯」

「乾杯、むぎの」

二度目の乾杯は静かだった。二人は喉を通っていく冷たい液体のさっぱりとした味を楽しみ、腹に溜まるにつれ熱くなる感覚に恍惚の表情を見せた。

「あ、いいわ」

「美味しい…」

「超理解出来ません」

そう言いながらピザを食べる絹旗の頭を上条はゆっくり撫でた。

「いや、まだ分かんなくていいぞ。いつか飲める時は来るけど飲むかは絹旗次第だ」

「不味いから超飲めません。ウニ頭は美味しいと思います?」

「うーん、飲んだことないからわかんねえや」

貧乏学生をやってきた上条には、この学園都市で出回る酒の高額さは知っている。手を出せたもんじゃない。

大人の目を掻い潜り手に入れた酒は学生の間では、学園都市の外でいう麻薬と似た扱いだ。

それに上条自身、酒を飲んでみたいと思ったことがない。

「むぎの、もう一杯」

「これで最後ね」

「うん、それじゃ」

「一気飲みね！」

それを止める暇なく二人はグラスの中身を一気に呷った。恒例なのか、麦野と滝壺はハイタッチをする。

「むぎの、今度は何を飲むの？」

「ワインでもいっとく？」

「白ワインがいいな」

「りょーかい、任せなさい！」

軽く麦野はウインクをすると椅子から立ち上がった。

「さて、ごちそうさま。風呂を溜めてくるから食器下げといて。後で洗うから」

「それなら俺がやろうか？」

麦野は一度立ち止まると首を横に振った。

「食器棚とか、食器の置き方が違うとそれだけでイラッとするから駄目。私がやるわ。好きに寛いでて」

「はーい」

「フレンダ、食器下げるの手伝って」

「それじゃ、上条は絹旗よろしくね」

フレンダと滝壺はキッチンに消え、絹旗と上条はチラリと見つめ合った。

「超なんですかウニ頭」

「やっぱりそうとしか呼ばないの？」

「この呼び名、超気に入ってるんです」

「分かったよ。なら突っ込まねえ。テレビでも見るか？」

上条はリモコン片手にソファーに座ると絹旗も隣に座る。

「見ます。上条はお泊まりするんですか？」

「随分長居したな。帰るにして遅い……」

「廊下で寝て下さい」

「お前俺の扱い酷くないか!？」

絹旗は笑いながらリモコンのボタンを押す。特に面白い番組がないので自然とニュースを見る形になった。

ニュースは最近、謎の爆破事件の様子を伝えている。何やら重力を操作してアルミを爆弾に変えているそうだ。負傷者も何人か出ているのに犯人は未だ不明。警備員と風紀委員は総力を上げて捜索している模様。

下らない、と上条は素直にそう思った。

「なんでこんな事が起きるんだろうな」

「子供が爆弾を超持つてる様なもんです。深くは考えてないんですよ」

テレビが報じる事に談義していると麦野がそれを見ながらソファの背もたれに体重を掛ける。

「能力が上がって試し撃ちがしたいんでしょう。私にもあったわ」

「まさか人を……」

絹旗が真っ青になって呟いたのに対して麦野は平然と答えた。

「取り壊し予定の廃ビル目掛けてドバーンだった。大きな音を立てながら崩れていく様は爽快よ」

「いや、それは」

迷惑なのかそうじゃないのか分からない。

そして絹旗は別に試そうとは思わないらしい。

「布団出しといたから。勝手に寝なさい。上条は、どうしようかしら」

「あれだったら帰るぞ」

しかし上条の提案に麦野は悩んだ。

「時間も遅いし警備員アンチスキルに見つかった大目玉よ。止まって行きなさい。部屋は、私の所くらいかな」

「え？」

「勿論、床よ。毛布くらいならあるから心配なく」

心配などなさそうな麦野に上条は慌てて否定した。

「いや、別の所を心配しろよ！ なにかあったらどうするんだ」

「何かする気な訳？」

そう質問したのはフレンダだった。

彼女は慌てふためく上条を半眼で睨む。

「そこまでしないぞ！」

「むぎのに何かするかみじょうは応援できないかも」

さらに滝壺まで見放す一言に上条はうなだれた。

「俺、どうすればいい？」

「だから、廊下で超寝れば万事解決」

「やっぱり絹旗、俺に恨みあるだろ？」

「さあ？」

絹旗の頬を引っ張る。彼女は抵抗しようと上条の右手を引き剥がそうとする。しかし能力は発動しなかった。

「ひょっと！超なにしたんれすか！」

「んー、聞こえないな！ハッハッハ！」

「むううー！！！」

暴れ出した絹旗は上条の下顎目掛けて頭突きした。

「ゴフツ！」

「ふん！ウニ頭が超悪いんです！」

「あらあら、舌は、くっついてるから大丈夫か」

ソファーに倒れた上条の容態をフレンダは調べたが命に別状はない。そこに麦野の声が飛んできた。

「あんた達風呂に入ってきてなさい！」

食器がぶつかり合う音がする。ついでに水の音もだ。

それにフレンダと絹旗は応えた。

「それじゃ入りますか！」

「麦野のお風呂は超広いから大好きです」

「かみじょう、置いていくね」

上条を放置すると三人は風呂に向かって行った。

麦野は皿を洗い終わると、顎を撫でる上条の隣に座る。

「なにやってんの？それに私にあの人押し付けた後どこに行っただのよ」

「あれは本当にごめん。ビリビリに追いかけられて長距離走してたら滝壺達と出会って事情説明して助けてもらったんだ。そしたら手料理を作るって滝壺が」

「ふーん。サプライズ含めて連絡なしって訳か」

納得した麦野はソファーに寄っ掛かった。それから天井を見つめな

がら目を細める。

あの時、木山春生に言われた事が蘇る。

——好きか嫌いか。特別か友人かの区別はしておいて損はないはずだ——

私はコイツをどうしたいんだろ？嫌い、じゃない。特別？確かに自分の周りに居ないような奴だとは認める。

だけど、それだけで特別かどうかは分からない。ただ、落ち着く事は確かだ。安心する。

この思いが特別なのだとしたら——

その瞬間、麦野の顔がボツと赤くなった。

「どうした麦野？」

覗き込む上条に麦野は思わず悲鳴を上げそうになったがぐっところえて、少し距離を取りつつ咳払いをした。

「なんでも無いわよ。……その上条は、私のこと、どう思う？さっきさ、……えっと美人、だって」

「あ……」

麦野の気恥ずかしそうな雰囲気に触発されたのか上条も真っ赤になり、口ごもりながら言葉を紡いだ。

「その、あん時言ったのは本当に本心だ。お前は、否定とか……するだろうけど、麦野は」

ピリリリッ！

無機質な電子音がすべてを崩壊させた。その音は麦野のポケットから聞こえる。

ピリリリッ！

二人の時間が僅かに止まる。

ピリリリッ！

「誰だテメエこんな時間に電話してんじゃねえぞ！！間違い電話ならブチ殺しだ！！」

「ちよっ、こいつってやつはー！仕事よし・ご・と！アンタになんか用事が無かったら電話なんてしないから！！むしろ通話料金返せっ！」

妙に甘ったるく、媚びたような女性の声に麦野は心臓が跳ねた。

「さあ、今回の場所は――」

視界の隅で上条の表情がみるみる怪訝なものになっていった。

止めて……

止めてッ！……………

そんな目で見ないで……

築き上げた心が踏みにじられた気がした。

たった一本の電話で……

パーティー（後書き）

前回の質問に答えてくれた皆様有り難う御座います！

感謝感激です！

私の好きなアーティストは

YUI

坂本真綾

牧野由衣

志方あきこ

ポルノグラフィティ

BUMP OF CHICKEN

などなど

今回の質問は

小説の描写、もっと詳しくした方がいい。

○か×

はい、いいえ

YESかNO

で、お答え下さい（冗談。好きに答えて下さい）

乖離現象

「この前の任務で抹殺命令でしたでしょ？その依頼人がやっぱりヤバイ奴でさー」

いつもならこんな聞き流したって暗記できる。なのに今、それが出来ない。指が震える。

怖い、怖い。

人間でいられた時が終わりに近づくのが、とても怖くて。

この電話一つで、私は闇の中に沈む化け物なのだと思い知らされた。

「麦野、お前まさか」

「ごめん。ごめんね上条」

携帯を遠くに置き出来るだけ音声を入れないようにする。ついでにゆっくりと離れると腕を掴まれた。

暖かくて優しい、力強い腕に気づけば抱かれていた。

「行くな。お前には人殺しをさせたくない」

「……なら、上条は私の為に血を被ってくれる？人を殺せる？吐き気がしなくなるくらい死体を見れる？……………仲間が裏切ったら躊躇なく殺せるの？」

無感情に凍えた麦野の声に上条は呼吸が止まった。平坦に紡がれた言葉の中身は余りにも残酷で、最後の一文にはまた別質の感情が覗いていた。

裏切られた事がある。仲間に。生きるか死ぬかの世界だ情報提供どころか、背中を刺されたのかもしれない。

今まで感じてきた疑問が上条の中でゆっくり確証に変わる。

「俺には出来ない、だけど！」

「ごめんね上条。そうだよ。だってあんたは」

麦野は上条を腕の中からすり抜け逆に上条を抱き締めた。

そして、一言を囁み締めながら耳元で囁いた。

「優しすぎるんだ」

「アガ!？」

肉を強く打つ音が上条の鼓膜と頭を揺らした。意識が霧散して行く。

麦野は上条を気絶させ、ソファーに寝かせると携帯を手に取り玄関まで歩き始めた。

「場所はどこだ？」

「こいつってやつはー。やっと終わったか。ねえねえ、さっきの男の声って」

「場所はどこだ？」

感情がすっぱりと抜け落ちた声に電話の女は口を噤んだ。何時もの麦野なら烈火の如く怒り狂ってもおかしくはない。もし初めて麦野と話す者だったら深く言及しただろうが、そこそこ付き合いのある女は電話口で冷や汗をかいた。

麦野はもう怒っているだとかそんな問題じゃない所まで感情が揺れている。

自然と感じられる殺気の塊に女は喉元にナイフを押しつけられたような感覚に陥った。

だから女は麦野の欲求に静かに答えるしかない。

「第17学区よ。詳しい地理はメールで知らせる。今回の仕事内容もね」

それだけ伝えると、前置きなしに通話が切れた。その時、嫌な汗が噴き出す。

女は深く椅子に座ると黙々とメールを製作し始めた。

麦野は一人で暗部が仕様する車に乗り第17学区を目指していた。運転手は一言も話さず、無言と静寂が重苦しく支配する。

その中、麦野は携帯の液晶画面の文字をスクロールさせ、文を読み進めていた。

内容は、一部の暗部組織が“とある事”に備えて秘密裏に機材を集めて何かを作っているらしい。

詳しいことがぼかされているのは、それが暗部よりも恐ろしい闇の一端があることを示唆していた。

ならば、相手のやろうとしている事に手を出さない方がいいと麦野は思った。知れば学園都市の全てを敵に回す事になるだろう。

「停めろ」

短く命令すると男は急いで車を停止させた。

麦野は降りるとそのまま研究所のような所に入る。

殆どが全自動の機械で溢れたこの学区には殆ど人などいない。その中で煌々と光を放つ場所是否が応でも目立った。

白い壁に囲まれた世界に静かに靴音が響く。

真っ直ぐの廊下を進んだ先には両手押しの扉が鎮座していた。

それを麦野は〈原子崩し〉の一撃で粉碎する。オレンジ色に溶けた

穴に麦野は悠々と入る。一瞬だけ熱い空気が出迎えた。抜けた先の広い空間には男が二人唾然として固まっている。麦野はその内の一人に無表情で〈原子崩し〉の光閃を撃った。

跡形も残らず消え去った仲間に残された男は腰を抜かし、助けを求めようとする前に、腹を蹴られた。

「グエッ！」

「さあて、取り敢えずリーダーどこかしら？ 下らない抵抗したら四肢のどれか焼き切るぞ」

「た、助けてえ！！」

「はははははははははは！ 助けてなんて暗部の奴なら言わないだろ。……リーダーはどこに居るの？」

その問いに男はガチガチと歯を鳴らす。恐怖が舌を強ばらせた。

「お、お俺達下っ端、に……聞くなよ」

「あっそ」

突き放したような言葉と同時に男の上半身が消え去った。悲鳴や絶叫は発せられる暇さえない。

無感情に人を殺し。人の命にとことん無関心になった麦野は亡霊のように歩き出した。愉しめない。命を貪り食い散らかし、残虐の限りを尽くしたって。相手がいつそのこと殺してくれと懇願するまで甚振っても、今の自分はこの状況を悦べない。

吐き気がする。肉の焼けた、血生臭い臭いが肺腑を抉る。

「っ！」

頭をかち割られたように痛い。

何かが自分の中で蠢く。

——……あっはははははは！殺せよ！狩られるだけの家畜に情でも湧いたか？あの野郎に絆されて温くなりやがってよ売女あ！？

………違う！

——愉快に尻振りやがって、それでも暗部に君臨した女王様かよ？
実は人を殺したくない乙女だなんて、……言えねえよなあ？何人殺した？思い出せる？

………黙れッ！

壁を殴りつけても脳を引っ搔き回される痛みは一向に晴れない。か
細い呼吸音を繰り返しながら麦野は奥に進んでいった。

戻れない道に進んでいく。

——なあ、早く私に喰われろ。そしたら楽になるさ。痛くて苦しい
でしょう？

………なんなのよアンタ？

——酷いわね。忘れたの？いや、アンタのせいじゃないか。お前が
“人間”で有るために切り離された
だよ

………？聞こえないけど

——アア！まったく面倒臭いことしやがって。こんなとこまで制限す
んのかよ！忌々しい奴だ

………何で私の中にアンタが居るの？

——それはお前が思い出せ。でないと私は外に出られないもの。そ
れじゃなきゃ早く喰われろ

………本当にさっきからそればかりね

震える手で手すりを掴みゆっくりと麦野は階段を下りた。地下に繋
がる道は次第に薄暗くなっていく。

最後まで降りるとロボットを製造する為の機材が収容された部屋に
ついた。

——ん？ちょっと借りるぞ

「!？」

身体が勝手に右に跳ねた。すぐ後ろの壁が鋭い音を鳴らし火花を散
らす。

銃弾だと理解する前に麦野は機材の後ろに身を滑り込ませた。

——三人か……

………確かにそうね

立て続けに連発される弾丸の感覚は複数人のもので、麦野はそう簡単に物陰から出られなくなった。

——身体を貸せ。全員殺せばいいんだろ？

………二度と身体が戻ってこなさそうだから却下

銃弾の量が減ったのを感じ、麦野は〈原子崩し〉を四方八方にぶち撒けた。広範囲を殲滅させた光の軌道後は金属はドロドロに溶け、見た者を畏縮させる。

「あが、…あがあああああああ！……！」

「ゴオアアアアアアアア！……！」

——下手くそ。一発で三人くらい仕留めろ。テメエの精神だけには介入出来ないんだ。身体を少しだけ貸せ

………断る

——はあ？ 非効率なんだよ！ テメエは指くわえて見てろ！

それは今のお前の状況だ、と言いたかったが麦野はその言葉を飲み込む。言ったら絶対に面倒な事になる。

——今、失礼なこと思わなかった？

………何もないけど

それだけ言うと麦野は闇を走り出す。直ぐさま銃弾が壁や床を削った。最後の一人は既に狙いを麦野に定めているらしい。

——だとすれば、次に来るのは、

………火力のデカイ重火器か砲撃！

麦野は物陰から走り出す。相手は銃を乱射してこない。それでも走り続けていると麦野の直ぐ後ろで爆発が起きた。

「ぐあっ！」

熱風と爆風に煽られ宙を舞う。シャレにならない衝撃波に肺の空気が全て押し出され、床を無様に転がった。瓦礫が落ちていたらしく彼女の肉を歪に引き裂く。

「く、そがあ！」

莫大な光量の塊を打ち上げる。そして照らし出された狙撃者は武器を捨てて逃げ出した。

「逃がせねえぞおお！！テメエは私が上下左右にきちんと引き裂いてやるからよおッ！！！！」

迸ったのは怒りか、それとも〈原子崩し〉の極光か。——若しくは、

[illegible]

人と形容するにはあまりにも暴虐な魔物か。

「ぎやあああああああ！ ががが ああ あああああ！」

「あー、やっぱり精神にだけは手を出せなかったか。でも、手に入れた」

身体の機能を確かめるように彼女は指を腕を肩を脚を動かした。引き裂くような笑みを刻む。

「麦野、お前の感情がここまで不安定じゃなかったら乗っ取れなかった。だから、感謝してる」

人間の心では抑えきれないモノは陰惨に、無慈悲に嗤う。死亡宣告とも言うべきものを宿主に叩きつけるために。

「お前は一生、そこに居ろ。そして私が喰い殺す！」

「かみじょう風邪引くよ」

「ウニ頭、ソファで超寝ちゃったんですか？」

お風呂から上がった二人は麦野を探してリビングまで来たが、居たのはソファに転がっていた上条当麻一人だけだった。

「起こさないと……」

「超任せて下さい。…とうっ！」

「ぐぼっ！」

「ふはははは！超起きろ！」

「この絹旗！二度も人の腹に突進しやがってえ！」

病院と同じ起こし方に上条は激怒したが、

「ッ麦野！」

「うわぁ！」

飛び起きた上条に絹旗はバランスを崩しソファに尻餅をつくが、上条は気にしていられないようすで玄関に走り出した。

「待って！」

それを滝壺が追う。

咄嗟に上条の腕を掴み振り向かせると滝壺は彼の瞳を見据えた。

「落ち着いてかみじょう。……むぎのに何があったの？」

「麦野はたぶん、暗部の仕事ってやつをしに行った……」

「……むぎの」

上条の答えに滝壺は力が抜けた。彼女にしては珍しく驚愕の表情を見せる。

「第17学区だってどこまで聞いた。だから迎えに行かないと、麦野は」

「待って、今調べるから」

滝壺はそれだけ言う携帯を取り出し素早くボタンを押した。そしてワンコールで出た人に矢継ぎ早に問う。

「『アイテム』正規メンバーの滝壺理后。リーダーむぎのを第17学区に連れて行った人は誰？」

「それなら、――」

電話番号まで聞き出し滝壺は次にその男に電話をする。

出た奴に一言二言告げると携帯を閉じて滝壺は靴を履いた。Tシャツに短パンというラフな格好だが、気にしない。と言うより暑い日ならこんな感じだ。

「行こうかみじょう」

「絹旗にフレンダはどうする？」

「それなら超ご心配なく」

「バッチリ聞いてた訳よ。滝壺、こっちはこっちのやり方で麦野を
探すから、滝壺に上条、よろしくね」

「うん。任せて」

「大丈夫だ。連れて帰ってくる」

夜の闇に飛び出した二人を見送り、フレンダは携帯を開き電話帳を
開く。

いつも仕事を回してくる女に電話を入れる。しかし、

お掛けになった電話番号はただいま電波の届かない所にいるか――

「結局、役立たずな奴！」

「もっと別の誰かに電話しましょう」

「シケてんな。最近の奴は齒応えがねえ」

返り血を浴びた栗色の髪をした彼女は死体の海に佇んでいた。真っ白で統一された部屋は大量の赤や赤黒い何かで斑に染められている。

誰だか知らないが、転がった生首を蹴って壁に激突させ、また赤い領域を増やした。特濃の鉄と肉の臭いが立ち込める。

「ふふふ、あはははは！」

「やあ、愉快的かい“原子崩し”？」

間延びした声が彼女の鼓膜に絡みつく。その声は聞き覚えがあった。工業分野ではよく会った人物の声だ。彼女はこの女が嫌いだった。羊の皮を被った狼、そう思った。ニコニコ笑顔を振りまきながら、この惨劇に似合う死臭を纏うこの女が不気味で気持ち悪かった。

「なんだ、やっぱりこっちの住人かよ本名不祥」
コードエラー

「あっは！そうだよ。ねえ、気分はどう？」

「最高だ」

「そう。ねえ“原子崩し”君の能力を使った新しい方式が見つかったんだ。試してみない？」

紅を引いていない割に赤い唇が蠱惑的に囁く。

「へえ、そのうま味はなによ？」

「0次元の極点。宇宙の果てからも物を手元に呼び寄せ、気に入らないモノはその果てに飛ばす方式さ。面白いでしょ？」

ニンマリと笑う本名不祥とは対照的に原子崩しは獰猛に笑ってみせた。

「いいねソレ。教えてよ」

「ならついて来てよ。教えて上げる」

血臭の溢れた部屋から本名不祥は出て行く。原子崩しはその後を追った。

乖離現象（後書き）

いっぺん、間違えて消去してしまったら時間が掛かりました。すみません

次元の理

男はうんざりしていた。麦野沈利を第17学区まで送り届け、後は家で寝ようかと思っていた時に同じ『アイテム』メンバーの一人に車を出すように頼まれたのだから。

「むぎのが行った所までお願い」

しかし自分は下っ端だ。逆らったら即厳罰。だから男は車を走らせる他ない。

信号を確認して右折する。その時、黒塗りで光沢のある高級車が通り過ぎた。あまり見掛けない車を気にとめつつ男はアクセルを踏んだ。

広々とした車内には女が二人座っていた。一人は黒く艶のある髪を高い位置で結い、狂気に滲む瞳は静かに目の前の血染めの女に注がれていた。

そして渡した資料を読み終えた彼女、麦野沈利の内より産み出された怪物はそれよりもさらに歪んだ狂気を持って笑う。

「いいわねコレ。凄く面白いじゃない。私の能力もこんな応用が出来るんだ」

「それについては原子崩し、君に謝らないとね」

コードエラー
本名不祥は含みを持たせて囁いた。原子崩しは早く言えと睨む。

「君の能力は本来ならば、汎用性に優れている筈なんだ。量子論を無視しているなら新たな理論が出て来る訳だ。しかし今の学園都市でもその理論発掘は不可能。君は産まれてくるには早すぎた」

「でも、アンタの口振りだと少なくとも新たな理論の一端には触れている。違う？」

「御明察。それこそ不肖不出来のこの私と違いその0次元の極点を見つけた親戚のおかげで、さらなる飛躍された理論を導いのさ」

アンタが見つけたんじゃないんだ……、と口の中で呟いた麦野はまた資料に目を通した。これを解析すれば自分が三次元の全てを掌握できる。

その事実が原子崩しの背筋をゾクゾクさせた。未知の世界を行使する程の力が手に入ると思うと笑いが止まらなくらいだ。

「ふふふ、全ての電子を操るだけじゃない！」

「そう、もし成功したなら第三位くらい、いや今の君なら本当に瞬殺だね。あと、君さ曖昧の形の電子をもう“射出するだけ”じゃないはずだ」

断定した言葉に原子崩しは妖艶さを孕ませた艶やかな笑みを浮かべる。

電子を曖昧な形のまま、という所は変わらないが射出以外の仕様方法があるらしい。

「物質を曖昧な形に出来ると思うんだが、違う？全ての物質に含まれる電子。その電子を曖昧にさせれば恐らく物質は崩壊する。ミクロ単位であらゆる物を繋ぎ合わせる支えが消えたんだ、当たり前の結果なはず」

「出来る。それはもう実証済み。でも人間や生き物みたいに電子が一秒間で多種多様に変わる生物には難しいわね。時間がかかったわ。能力者同士だったり多対一には向かないのは事実よ」

返り血がついた頬を撫でる。すっかり乾いた血は剥がれ落ち細かい粒になって消えていった。

「でもあの部屋に死体は四つも転がってたよ。多対一に向かない割にはよくその方法で殺せたね？」

「よくその方法で殺したって分かったわね」

苦い表情をした本名不祥は惨劇の舞台を思い出す。

あれはまさしく死の世界だった。

服は敗れていない。しかし着ていた人間は摺り潰された、あるいは臓腑をぶち撒けていた。破裂したように肉と血が広範囲に部屋を汚

し赤黒い腸や胃は散乱して、普通の死に方ではない。

〈原子崩し〉の一撃にしては肉と血が焼けた異臭なかった。ただ鉄の濃厚な臭いがしていた世界。あまりにもグロテスクだった。

思い出ただけで胃の中が気持ち悪い。

「そんな殺し方じゃなかったし、なにより皮膚が見当たらなかった。原子崩し、アンタが消したのは表面と血管の部分と筋肉だと思ってね」

「正解。一人そんなふうに死んだらみんな発狂したりして楽しかった！」

命を指先一つで破裂させる彼女にとっては遊びかも知れないが、その他の者からすればはつきりいって迷惑以前に恐ろしい。

〈原子崩し〉の極光と違い目に見えない所でプチプチと細胞が殺され、末に風船のように破裂して死ぬなんて真っ平御免だ。

「まあ、アレだ。癌細胞の消滅だとかに使えそうよね？」

「そうね。でも私が人助けなんて嫌よ」

「科学の進歩は同時に医療の進歩だ。その能力くらい提供しなよ」

物は考えよう。そんな使い方も出来るが、本人は嫌だと言う。エグい殺し方に使うより遥かに優良な使用方法だと思うのだが、誠に残念だ。

しかし原子崩しの意識はすでに別の所にあった。

「それより、お風呂に入りたい」

「服はどうする？」

「バスローブくらいあるでしょう。それを貸せ」

相も変わらず傍若無人な彼女に本名不祥の頬が痙攣する。憤りを押し殺し独白した。

「とんでもない人拾ったよ」

「0次元を解析し終えるまで帰らないから」

「は？ いやいやいや、帰れ不肖不出来のこの私の身体と精神が持たないから！」

「いいでしょ。どうせ本名不祥が世話するんじゃないでメイドとかにやらせれば」

もうどうにでもなれと彼女は思った。

それより、

「何で私がメイド雇ってるの知ってるんだい？」

「運転手と執事パトラーがいるのにメイドがない訳ないでしょう」

彼女を迎えに来るとき連れてきた面々を思い出し本名不祥は唸った。

このように豪壮にしていると目立つが検問などで深く探りが入れられないのが特なのだ。今回は血塗れの女を連れている訳だし一般車より安全で安心。

カモフラージュを含めたのだが、原子崩しを居座らせるくらいの余裕を与えてしまったらしい。

「君、執事をバトラーって読んだよね？……どんな家柄の出身なのさ」

「一般家庭よ。それよりアンタの家、家令とかいるの？」

嘘付け！と怒鳴りたくなった。一般家庭なら間違いなく執事は“しつじ”と読む。そして家政婦を雇えるくらいの裕福さで育ったなら家令なんて知らないはずだ。

彼女はとてつもない豪華な暮らしをしてきたらしい。

「一応いるよ」

「懐かしいわね。家にいた頃を思い出すわ」

「世話係だったの？」

「そうよ。ピアノとかやらされた記憶が蘇る」

「上流階級の子供の嗜みだね。ご苦労サマ」

「ま、全部簡単過ぎてつまらなかったんだけどね」

「……………」

だから天才は嫌いなんだと本名不祥は毒づいた。可愛げの欠片もない。

「実験は明日からね。今日は寝なさい」

「疲れたしそうさしてもらおう」

スモークガラスの向こう側を見詰めながら原子崩しは嗤う。

この忌々しい地位を脱ぎ捨てる時がきた事に彼女は歓喜していた。

上条と滝壺はひたすら走っていた。研究所の中は驚くほど静かで、不安にさせる。

もう麦野は去ったのではないのかと。

「これは！」

「うんむぎのの〈原子崩し〉の痕だよ」

床を溶かした痕が深々と刻まれていた。その近くに上半身無くした死体が転がっている。

吐き出したくなる衝動と、あの時無様に気絶させられた自分の不甲斐なさにも上条は強く手を握り締めた。

その死体に滝壺が近づき様子をマジマジと観察する。止めに入りた
いが意味のある行動のため上条はそこから一步も動けなかった。

「むぎのはもういない」

彼女が唐突に呟き携帯を手取る。

「そんなに……時間経ってたのか？」

「うん、それに……やっぱり静かすぎる」

滝壺の言うとおり、無音すぎて耳が痛いくらいだ。麦野が交戦しているなら轟音程度じゃすまさない。

滝壺は指を走らせ電話をした。

「きぬはた、遅かったみたい居ないよ。むぎの帰ってきた？」

「いえ、超まだです。電話の女は出ないし麦野も出ない。どうしま
しょう滝壺さん？」

切羽詰まった状態なのだろう。電話口の絹旗はすっかり弱腰になっ

ていた。

「体晶が、あれば」

苦しそうに滝壺が呟く。絹旗も歯切れ悪く答えた。

「麦野が管理してますし、私としては超反対です。一日だけ待ちましよう。麦野がひょっこり帰って来るかもしれないじゃないですか」

「うん、一度帰ってくるね」

電話を切ると滝壺は立ち上がった。

「一度、帰るしかないか」

「うん、かみじょう明日学校でしょう？寮まで送るよ」

「なに言ってるんだ滝壺。そんなこと言ってる場合じゃないんだぞ」

「分かってないのはかみじょうだよ。……暗部の問題をかみじょうに押し付けられない。明日から私達だけでむぎのを探す」

決別の意をはっきり込めた滝壺の言葉は上条の意志を的確に決った。

「でも、滝壺！」

「かみじょう、むぎのを探した結果とんでもない事になったら、私達かみじょうを守れない。そしたらむぎのに合わせる顔がないの」

彼女は上条が傷つく事も言っているが、一番言いたいのは表の人間

でいられる社会的地位が揺らぐ事を恐れていた。

だから滝壺は上条を突き放すしかない。

「もし、それでも探すなら、かみじょうは泥の海に沈む事になる。
そんなのダメ」

その言葉は滝壺だからこんなにも心を揺らすのだろう。暗部の闇に沈む事を望まなかった彼女だからこそ、上条の決断を鈍らせる。

何も言えないまま時間だけが過ぎた。

「…………ごめんね。意地悪なこと言って。…でもむぎのを探してくれて、ありがとう」

「滝壺は俺を心配してくれたんだ意地悪じゃない。俺が何も考えてなかったから……」

「そんなかみじょうだから、むぎのは貴方を好きになったんだよ」

「え？」

不意を衝く滝壺の一言に上条は理解するまで時間がかかった。

家に帰った本名不祥は只管パソコンのキーを弾きながら電話をしていた。
コードエラー ひたすら

相手は最近よくやり取りをしている上司、と言うよりこの街の最高権力者だった。

「はあ、なんつーの？ 原子崩しの能力で次元を斬り裂く事は可能だ。それでさ、未元物質ダークマターを中心にLEVEL6に辿り着く理論を考えた訳だが」

「なにか、進展はあったかい？」

「大雑把に言うくと、LEVEL6になる為には6次元を掌握しなければならぬ。未元物質ダークマターの能力は“この世界”に無い物を具現化させること。でも無から有の製造は不可。で、一番可能性のある理論は6次元からの召喚だ」

電話口から少しだけ考えるような呟きが聞こえた。

「未元物質ダークマターは既にLEVEL6の片鱗は掴んでいる。もちろんそれを“反射”できる一方通行もだ。LEVEL5のこの二人だけ別次元と言われているのは、まさに感じてる世界観と常識が違うからさ。6次元から見た3次元は“1次元”になる。上位二人からしたら、いくらLEVEL5だからと言ってもまだまだ人間の範疇さ」

「君の推測は、面白い」

「発想の勝利ってやつだろ。第一位が6次元のベクトルの精髓を統

べる者、第二位が6次元の物質の精髓を掌握した者、そして成長した第四位は、6次元の全てを制する者になる。6次元Ⅱ“神の世界”ならば……」

「6次元を理解した者はLEVEL6、若しくはそれ以上……」

会話が途切れた。

荒唐無稽と言えばここまで荒唐無稽な話はないだろう。だがそこに魅入られれば、一筋の希望を信じたくなってしまう。

いや、本名不祥の場合はもう実行するつもりだ。

「上位の次元を引きずり降ろせる“鍵”は手に入れた。そして私は彼女を必ず神の世界まで押し上げる」

「出来るのかい？」

その問いに本名不祥は力強く答えた。揺るがぬ芯を持って。

「やってやるさ。不肖不出来のこの私に足りない物が多いが、補えば不可能ではない。そして麦野沈利は“神の世界に辿り着く者”から“神に辿り着く者”にする。時間が無いのは分かっているが、時間はかけさせてもらおうよアレイスター」

「やってみるといい。新たな可能性の芽を枯れさせないようにしてくれ。実現したなら彼女は第一候補メインプランになる」

「今の第一候補メインプランはそしたらどうなるのさ？第二候補サブプランになるの？」

「いや、第一候補のままだ」
メインプラン

「今の第二候補は？」
スベアプラン

「そのままだ」

「メイン二つのスベア一つか。垣根の坊やは可哀想だね」

可哀想だと微塵も感じさせない本名不祥の声音にアレイスターもど
うでもよさそうに言った。

「第二候補は私の意思から外れようとする。それが無ければ第一候
補にもなったんだがな………」

「あらら、じゃ垣根の坊やは自分から墓穴掘ったのか。そこまでき
くと哀れだな。それじゃ報告は終了。なにかあったら逐一報告する
から、またな」

電源ボタンを押し通話を切る。

そして彼女はいつもの作業に没頭した。能力の成長に必要な事象を
調べる為に高速でキーを叩く。

繋いだ先は学園都市が誇る最高の機械頭脳だった。

次元の理（後書き）

ここでは6次元云々について個人的解釈と説明をします。

6次元を説明すると4次元と5次元の説明もいるのですが、それは削って6次元だけの説明をします。

6次元とは簡単にいえば、過去・未来・現在と全ての時間軸を集合させた、〈全ての時間が集まった次元〉、らしいです。

そして4次元と5次元の理論の延長線なので全ての可能性を内包し、全ての可能性を現実のものに出来る世界でもあります。

今回は全ての可能性を現実にする、つまり有り得ないものを呼び出せる第二位の方を中心に考えてみました。

原作で垣根の事を神の世界の片鱗を〜と書いていらしたんで、自分の解釈でそこを6次元に設定しました。片鱗ですのたぶん垣根の場合、覚醒してでもまだ4次元、5次元だったのでしょうけど。

これ以上の説明は若しくは質問等は感想かメッセージでお願いします

気付かなかった頃には戻れない

「またね、かみじょう」

何も言えなかった。

何も出来なかった。

走り去る車が、とても非情に思えた。それは自分の無力を何かに擦り付けたかったから。弱い自分を、見たくなかった。

でも、

「畜生ッ！認めるしかねえよ。お前は！お前は無力だッ！！」

認めた瞬間、虚無感と脱力感が埋め尽くす。

泣き出したくなるのを堪え、エレベーターに乗った。もう、なんの感情も湧いてこない。

「俺は、何がしたかったんだ……………」

助けたかった。麦野沈利という女の子を。何かに追い詰められ迷子のように震えて、泣いていたあの子を。

しかし、助けるには麦野の闇はとても深く底が見えなかった。社会その物が複雑で壮大な闇を形成していた。

「ただいま……………」

この自分の家の暗さより上条の気持ちは真っ暗だった。それは電気の明かりをつけた事では晴れない。

ベッドに座り込み上条は長く重たいため息をついた。

ゆっくりと蝕む睡魔に身を任せながら上条は己を呪った。

それからどれくらい時間が経っただろうか。深く眠っていた筈なのに上条の意識は急に覚醒した。

「……朝？」

カーテンの隙間から朝日が覗く。

時間は六時。早く起きすぎたと思いながら上条は顔を洗う。そして鏡を見て嘲笑った。

「なんて顔、してんだよ」

本来ならこんな“絶望”した表情をしていいのは自分じゃない。麦野だ。……いや、電話に出たときこんな表情してたなあ。

過去の出来事だからなのか感情が大きくブレることはなかった。軽く鏡を殴りつけ、朝ご飯と弁当の準備をする。気分的問題もあり素っ気ない食事になった。まず、美味しくない。

自分好きな味の卵焼き。しかし一口以上は箸が進まない。食べ物を粗末にする奴は許さない上条だが、今日の前の物をゴミ箱にぶち込みたくなる。

嫌気が差す。

いつまで現実から逃げれば気が済むんだ。そう言い聞かせ立ち上がる。皿にラップをして冷蔵庫に入れた。気分を一転させたからと言って食欲が湧いた訳ではない。

言わば空元気なのだ。応急処置以下の対処で、上条の痼りは残ったままだ。それでも暗いままでいるのが嫌だった。

制服に着替え、教材を黒い革の鞆に詰め込む。時計を見れば七時。まだ時間はあるが上条は荷物を持つと玄関の扉を開けた。

「土御門？」

その先には同じ様に登校するために鍵を閉めようとしていた友人、土御門元春がいた。

「おー、カミヤんどうした。今日は何時になく早いな」

「なんだか、じっとしてられなくてな」

相槌で返した土御門は鍵を閉めた。それからからかう口調でこう聞いた。

「にゃー、それは昨日帰りが遅かった事と関係あり？」

「まあ、な」

「珍しいにゃー。カミヤんは悩まず突っ走る奴だと思ってたぜい？」

「俺だって悩むよ。それくらい難しい問題なんだ」

二人はエレベーターが来るのを待ちながら雑談する。

晴れない顔をした友人に土御門は腕を組んで唸った。

「人間関係の事で悩んでいるのか？」

「うん、つい最近知り合った女性に」

「女！？にゃー大変だにゃー！！カミやんがついに異性と言うものを気にしているだなんて！明日は槍の雨か……………」

続きを遮った上にとっても失礼な事を言う土御門を上条はジロリと睨む。

「お前な……。まるで俺がアブノーマルみたいな言い方すんなよ。異性にはバッチリ興味があるぞ！！」

「カミやん、俺はお前が男に迫られても驚かないんだぜい」

「驚けッ！そして友人を助けろ！」

「愛には制限は無い。それは俺がシスコンでロリコンであるようにだな」

「その話はもういい」

熱く語ろうとする手前で上条が終止符を打つと土御門は唇を尖らせ不満そうにした。しかし直ぐに何時もの胡散臭い笑みを浮かべると、

到着したエレベーターに乗り込む。

上条も入った事を確認するとボタンを押す。

「少しは気が楽になったか？」

「え？」

何気ない友人の一言に上条は破顔した。

気遣ってくれていたのだと理解すると、今まで空洞になっていた心が暖かくなっていた。

「あれだったら吐き出しちまえ。俺に出来るのはそれを聞くくらいだにゃー」

「……いいのか？ 愚痴みたいなものだぞ？」

「友人の悩みが軽くなるなら安い買い物だぜい。だから絶望したような顔するな」

いい友達を持ったと上条は思った。この都市に来る前なら考えられないくらい恵まれている。

しかし土御門は別の事を思っていた。

第四位の〈原子崩し〉麦野沈利。最近、上条が知り合った女は彼女と『アイテム』のメンバーだ。

“女性”と上条が言っていたから恐らく年上。そして暗部の歴も相

当長い彼女が上条の悩みの種だと踏んでいる。

あのメンバーの中で最も業の深い麦野なら、上条を踏みとどまらせる事も可能だ。無鉄砲な彼はそう簡単に引き下がらない。暗部の複雑な問題でも真っ正面から殴りかかる筈だろう。

でも、それは上条が暗部の相当血生臭い歴史や仕組みを知っていないのは立ち止まらない。事と場合によっては、土御門は麦野沈利を暗殺する気でいた。

「その人にさ、笑ってほしいんだ」

「は？」

答えは土御門が想像していたものではなかった。

ゆっくりと鉄の扉が横にスライドして一階につく。上条は少しだけ軽くなった足取りで外にでる。日差しは強くなく穏やかなものだった。

その後に続いてきた土御門は何とも言えない顔をしていた。

アスファルトで舗装された道を二人並んで歩く。

「笑ってほしいってどーいう事だにゃー？」

「なんて言えればいいかな。その人の周りとか心の半分くらいが闇に染まってるんだ。自分自身じゃもうどうしようもないくらいいさ。でも一回だけ本当に笑って、その人綺麗なんだけど可愛かった。また見たいし、ずっとそんな感じで笑ってくれたら、いいのに………俺何

も出来なくて。情けないよな」

「詳しくは知らないがカミやんは悩みすぎだぜい？人には出来ないことがあって当たり前だ。それに知り合ったばかりなんだろう？なら深くその人に突っ込むな、後々面倒なことになるぞ」

どこか大人びて、そして他人と一步線を引いた土御門の言葉に上条は首を縦に振らなかった。

「その人はそうなることを望んだ訳じゃない。なのに辛い思いをしないといけないのは、おかしいだろう！」

「カミやん、人の内面に触れられるのは、その人の家族や本当の親友。若しくは恋人くらいだ。たぶんカミやんがどうにか出来る隙間はないぜ」

思わず上条は口をつぐんだ。人を尊重した答えであったからだろう。特に心を許した相手でもないのに自分のデリケートな部分を踏み荒らされるのは困る。

「そう、かもな」

「だろ？だから気に病むな。でも、笑顔が見たいだなんて、恋患いかと思ったぜい」

「……………」

返事のない友人を覗き込むと、より一層難しい顔をしていた。

「土御門、その人に笑ってもらいたいだとか、もっと知りたい、その……抱き締めてやりたいと思うのは、恋なのか？」

何かが崩れ落ちる音がした。

それは土御門が持っていた鞆がずれ落ち、固いアスファルトに落ちた音だったのか。それとも超が無限に付くくらい鈍感な友人が恋をしていた事に対しての驚き、思考回路が消え去った音なのかは誰にも分からなかった。

そして、上条の真摯な眼差しに土御門は頭を抱えた。寄りによってとんでもない女に恋をしたものだ。

「カミやん普通の人なら恋だって気づくぞ。むしろ抱き締めたいまで気持ちがあつ走るのに、それをただ受け入れてるカミやんはただの馬鹿だ」

「い、いや一度抱き締めただけ結構柔らかくて、気持ちよくてさ。出来ればもっと抱き締めたり触りたいなあ。なんて」

「うるせえ！ノロケるんじゃない！」

「ノロケてないだろ！お前の義妹語りの方が五月蠅いじゃないか！」

「にゃーッ！今の発言はいくらカミやんでも撤回して貰おうか！？」

話の流れが勢いよく脱線して、収集がなくなつた二人は取っ組み合いを始めそうなほど睨み合った。

土御門が少しずつ、少しずつ距離を縮め。上条は防御が出来るよう

に後退しながら腰を沈める。お互い、一瞬で足に力を入れ地面を蹴った。

その時、

「おい！カミやんにツツチー！なにしとるん？」

遠くから手を振る青髪ピアス、通称青ピが割って入った。

「聞け青ピ、カミやんが彼女を作ったぞ！」

「なんやと！？抜け駆けや、カミやんもげろ！」

「馬鹿言ってんじゃねえよ！付き合ってられるか、先に学校行くからな！」

荷物片手に全力で走り去る上条に土御門は、前言撤回しろおお！
！！！と叫び、青髪ピアスは呪詛の言葉を吐きながら追い掛け始めた。

三人はそのまま教室に付くまで全力で走りつづけた。

「にゃー！一番だぜい」

「くっそ、抜かれた。二番かよ」

「やっぱりツツチーにはかなわなかったかあ。悔しいな」

まだ誰もいない教室に汗だくで転がり込んだ三人は自分の机で倒れ込む。

「にしてもカミちゃん彼女出来たってホンマ？」

「土御門の妄言だ」

「酷いぜカミちゃん！だってカミちゃんが好きになったら相手は落ちたも同然だにゃー！」

あまりの言い草に土御門は机を叩いた。

「なに、カミちゃんから好きになっただと！明日は槍と火の雨や」

「お前ら、つくづく失礼だぞ」

ぐったりしながら上条は滝壺に言われた事を思い出す。

「そんなかみじょうたがら、むぎのは貴方を好きになったんだよ」

それは麦野と長く一緒にいたから分かったのかもしれない。だがそれが友達感覚の好意かどうかで上条は揺れていた。

もつと詳しく聞くべきだったか、と後悔するがその辺は麦野本人から聞かなければとも思う。

俺が麦野を好きになったのっていつだろ？

実は本名不祥からコードエラー“恋仲なのか？”と聞かれた時には、心臓は五月蠅いほど鼓動を刻んでいた。しかし自覚のないあの時は突然の事で驚いただけだ、ということ片付けた。

あの時から既に無自覚ながら惹かれていたのだろうか？それとも別の要因があるのか？

最初はただの放つとけない性格から始まったが、今はなんで彼女に会おうとするんだろう。確かに、いきなり居なくなれば心配する。そして最後に彼女を見たのは、自分だと言う責任感もない訳じゃない。しかしここまで自分を不安にさせ、探したいと思うのは別の感情だと分かる。

それが異性としての好意なのかは分からないが。

「なあ、本当にこれが好きって感情なのか？」

誰に聞いた訳でもない独白に土御門と青髪ピアスは顔を見合わせた。

それから困った表情をして土御門はポツポツ語り始めた。

「難しいぜカミヤん。それは誰でもない自分で決めるんだ。はやし立てちゃったが、カミヤんが違うと思うならそれは好きでも恋でもない」

「そやね、相手の気持ちもある。カミヤんはどないしたいの？」

冗談抜きで真面目に答えた友人に上条も真面目に答えた。

「会いたい。ただ会いたいんだ」

それを聞いた二人は上条の両脇に移動し二の腕辺りを掴むと、引き摺るように教室の出入り口に連れて行き、突き出した。

「行ってこいカミヤん！こっちは任せとき」

「そこまで言うなら止めない。心配だけどカミヤんならいい方向に行くと思ってる。だから会ってくるんだにゃー！」

啞然とした上条だが、小さく笑うと走り出した。

「ありがとな土御門、青ピ！」

直ぐに曲がり見えなくなった背中に、子供が旅立つ親の気持ちを味わった二人はドアにもたれ掛かった。

「行っちゃまったな青髪」

「まあ、自力で気付いた訳でないにしても、カミヤんにしたら上出来や！」

友人の切欠と見送りに感謝しつつ上条は階段を駆け下り、生徒玄関を潜り抜け、校門を飛び出した。

当てなどない。一度は滝壺たちに会おうと思ったが、昨日の今日だ。なかなか顔を会わせづらい。

なので上条はとある人物を探す事にした。

その人物が全ての元凶だと知らずに。

「さてと、原子崩し。実験を始めようか」

絡みつくような抑揚の声が無機質な白い部屋に響く。

その声に原子崩しは頷くと、手のひらに意識を集中させた。

気付かなかった頃には戻れない（後書き）

さて、夜が寒くなりましたね。皆さん体調に気をつけて下さい。

皆さんが読んだことのある本で忘れられない作品はなんですか？

最近、周りにある本を読み尽くして手持ち無沙汰なのです。
何かないでしょうか？

反離した心

そこは木漏れ日が差した世界だった。

そこには原子崩し^{マルチタウナー}が佇んでいた。麦野沈利であって厳密には麦野沈利ではない彼女は時々、精神の世界を見る。表の世界に繋がるこの場所はかつて自分と麦野が共有した場所。

お互いを感知しないように背中合わせで話しだってした事はなかったが、辛いことも悲しいことも共有した存在だと思っていた。しかし、麦野は彼に出会ってから変わってしまった。

“人間でありたい”

麦野沈利は上条当麻に触れ、強く願うようになった。それは人間という枠組みに入りきれない〈原子崩し〉は必要だということ。しかし麦野沈利はLEVEL5である事にも執着はあった。

選ばれたのは、闇に君臨し人殺しで悦楽を得ていた原子崩し。人格であり“自分だけの現実”でもあった彼女を殺す訳ではなく、この世界の隅に追いやった。

そうすれば、少なくとも人殺しではなくなる。必要な時に呼び出せばいい、そう思っていた。

これで上条の、あの光の中にいられると。

しかし唐突に裏切られた。それが誤解だとは後から知ったが、当時は上条が闇の人間だと思った。

希望が絶望に暗転し“ 麦野沈利 ” が壊れた時を見計らい原子崩しは、彼女を喰い殺そうとしたが、竜に喰われて以来、麦野沈利に手は出せないのだ。

これでは復讐が出来ないと、原子崩しは怒りをため込んでいた。

裏切られた復讐。

見捨てた麦野に思い知らせるために。

殺す方法を模索する――

時間は遡る。

朝の六時。コードエラー 本名不祥は麦野に宛がわれた部屋に居た。今、この部屋の主は寝ている。

静かで規則正しい呼吸は彼女が深く眠っている事を教えてくれた。

本名不祥はベッドに腰を下ろし麦野の頬に手を添える。きめ細かく柔らかい感触に目を細め、繊細で彫刻のように整った美しい顔立ちを眺めた。同じ女性として羨ましい限りの玲瓏たるその姿。しかし、思わず目で追いたくなる美貌に本名不祥は無関心だった。一片の興味も唆られない。

彼女が強く惹かれるのは能力による多様な可能性。言わば脳だ。必要なのは首から上でもある。

艶やかで見る者を魅了する唇をなぞる。

「……んう」

僅かに彼女が身動きをする。本名不祥は気にせずじつくりと色々な所を撫で回す。手が柔らかくサラサラとした髪を梳く。その感触を気に入ったのか何度も行ったり来たりを繰り返した。持ち上げ両手でもてあそび、そっと返しにこやかに笑った。

「おはよう、原子崩し。お目覚めはいかが？」

「起きて一番最初に見た相手が、テメエじゃなかったら最高よ。で、寝込みを襲うだなんて悪趣味ね」

「あっは！言うね。やっぱり君はいいね。好きだよ原子崩し……」

最後の言葉は擦れどことなく色香感じさせた。耳元を掠めた愛撫するような吐息に原子崩しは顔を顰める。

「気持ち悪い離れろ。言っとくけど私にはそっちの気ないから」

「ご心配なく。私は両方いけるから。普通の人がいう愛の形とは遙かにかけ離れたものだけだ」

「どうせ研究価値としての愛なんでしょう？」

「ふふふ……、どおおう」

絡みつき離さない声が悪戯に響く。

「私は君を否定しない。追いやらない、裏切らない。ねえ、だからさ原子崩しも私を裏切らないでね。朝ご飯はパンでいい？」

「……………うるせえ。黙れ変態科学者」

原子崩しはベッドから降りると部屋を出て行った。本名不祥もその後を追う。原子崩しに貸した無地の黒いTシャツにジーンパンという軽い格好は、普段ファッションに人一倍力を入れる彼女を知っている人間が見たら卒倒するだろうなあ、と本名不祥は独りごちる。

豪邸に相応しくリビングと食堂は別らしく、食堂は美しい木目のフロアリングの床で使い古され気品が漂う。この様に歴史の重みを感じさせる美は金を積みめ得られるものではない。脈々と受け継がれ損なわない努力が必要だ。

「別荘を思い出すわ」

「不肖不出来のこの私の本邸は君にとって別荘程度か……。複雑だよ」

「随分とアンティークね。シャンデリアが電気じゃなくて蠟燭って」

「昔の持ち主に言ってよ。不便で仕方ないんだからあ」

適当に座る本名不祥の向かい側に原子崩しは座った。頬杖を付き近くのベルを鳴らす。直ぐさまメイドの一人が駆け付けた。早い到着だが洗練された無駄のない動作で本名不祥の斜め後ろに立つ。

「朝食を、二人分お願いね？」

「畏まりました。ジャムはどう致しますか？」

「君が好きな味で」

手慣れた雰囲気注文するとメイドは恭しく頭を下げ、食堂を退室する。

大きな出窓が並ぶこの部屋はシャンデリアに灯りをともさなくとも明るい。居心地のよい朝日は部屋全体を照らす。二人はその暖かさにうっとりとして会話などしなかった。

風のざわめく音以外、静寂を肯定していた。

「……………ねえ、原子崩し。0次元を会得したら、どおするの？」

静かすぎて声が大きく響く。

「さあね？その時次第よ」

「ふうん。ずっと私の側にいない。……………実は、0次元より荒唐無

稽だが君の能力でとある事をすればLEVEL6になれる。…可能性があるのさ」

重要な事を打ち明けている筈なのに本名不祥は雑談のネタのように扱う。

それに反して原子崩しの表情は疑うものだった。この都市が誕生してそれなりに経つがLEVEL6に辿り着いた者は存在しない。なれる可能性があるからと言って原子崩しは手放しで喜ばず、逆に警戒した。

「へえ…でもなんで私なのよ？ 認めたくないけどLEVEL5で私より上位の奴らと何が違う？」

その問いはメイドが来たことにより途切れた。

音を立てないように並べていきながら素早い動きに原子崩しは感心した。

そしてまた恭しく退室する。

「失礼しました」

綺麗に並べられた朝食の数々に本名不祥は迷うことなくサラダを食べる。酸味の効いた特製ドレッシングの味付けに舌を打つ。

「美味しいね。…えっと、何が違うかと言うと君の可能性は第一位に劣らない。第三位くらいなら軽く飛び越してるくらいさ。第三位なんて電子を究極的に操る以外なんの可能性も秘めちゃいない。理論を検証して、工学や機械産業、パソコンに特化してるくらいだ。

今程度の科学力でも彼女の能力は実証できる。理論が詳しく明細されたものに則ってるせいかな、魅力がない。可能性というパンドラの箱も未知数という猫箱も全て開かれ、開発されたあの娘はそこの学者のいい餌程度か、広告塔で十分。その代わり、誰よりも扱いやすいLEVEL5だと言うことは認めざるおえないけど」

そこで言葉を切り、本名不祥はパンを口に放り込む。一般家庭程度のマナーの彼女は原子崩しのように上品には食事をしなかった。

原子崩しも食事をしながら本名不祥の言葉に耳を傾けている程度。しかしその瞳には貪欲な鈍い光を宿していた。

「第一位、第二位、第四位に共通しているのは理論が確立されていないことだ。現代科学じゃ説明不可。つまり、3次元の理論じゃない。まだ見つかって無かったとしても、地球上の理論じゃないね。宇宙に枝葉を伸ばさないと。しかし宇宙の法則は3次元なのか、はつきり言うとは不明だし、よく分からん。でも君たちの能力は間違いなく宇宙の物でもない。つまり5次元から6次元レベルの理論になる」

さらにパンを食い進めスープを飲む。

そして、静かに結論を出した。

「君の次元に穴を開ける力を使えば6次元を3次元に引きずり下ろせる。あくまでも、が付いて来るけど」

「まだまだ卓上理論ね」

「でも第一位はLEVEL6になると御墨付きだよ」

至極詰まらなさそうに答えた本名不詳に原子崩しは食いついた。

「お墨付きって、誰が？」

「誰って、学園都市最高の機械頭脳、ツリダイアグラム樹形図ツリダイアグラムの設計者だよ。あの子が第一位にその可能性を見出した。内容はいつか話すよ、必ずね」

先手を打って原子崩しの言及を避ける。

「可能性で一番優れてるのは誰よ」

しかし原子崩しは少しの情報を洩らさぬように本名不詳に質問した。そのことに対して彼女は惜しげもなく情報を晒す。

「それはずば抜けて君だ、と言ってやりたいが第二位の垣根の坊やだね。あの可能性の箱は小箱じゃない。大きすぎて底が見えないよ。だから垣根の坊やの可能性は全て掘り起こせない。それはつまり、能力者の彼自身生きている時間内に本当のLEVEL5に到達できる可能性も低いし、なにより万能過ぎて詰まんないのさ。君みたい欠点のある人を押し上げて、周りを見返す方が好きだし」

「誰に欠点があるだって？ いっちょ派手に臓物撒き散らすかコラア！」

「昨日のグロテスク惨殺事件思い出させないでよ、食事中なんだから」

言い終わらぬうちに朝食を終えた本名不詳は時計を確認する。半を過ぎて9の数字に差し掛かっていた。

椅子から立ち上がり、本名不詳は気分転換するように背伸びをした。

「食べ終わったら研究所に行くよ。試したいでしょう？」

原子崩しの怒りの銅線に堂々と触れながら受け流す。原子崩しは原子崩しでやり場の無い激情を押し殺すように食事を再開した。返事は無かったが了承したと受け取り、彼女は部屋を出る。

車の鍵を回しながら廊下を軽快に歩いていった。

本名不詳は車を二台持っている。一つは自分のプライベートで使う白いワンボックスカーだ。地味で目立たないありふれたそれは裏の世界で便利だったりする。しかし本分は情報提供や殺害リストの制作、またはパソコンをハッキングして情報収集となにかとデスクワークなので滅多には使わない。なので久しぶりにハンドルを握る事になるので軽く走らせようと思ったのだ。

しかし、

「それじゃ、ついたら起こしてね」

「原子崩し、いつ来た。私の後ろにいたのかい？」

「あとから追ってきた。思えばこの家のこと全然知らないし」

「事故したらごめんね。先に謝るわ」

「そんな時はあんたを火だるまにしてやるわよ」

運転席の後ろからヒシヒシと感じる威圧感殺気に冷や汗を感じながら本名不祥はエンジンをかけた。そして車は案外、心地良く滑り出す。

原子崩しは窓から差す日差しを浴びながらゆっくりと瞳を閉ざした。

そしてまた夢と現の境に降り立つ。背中に感じていた温もりが消え去ってからは心に空洞が出来たようだと言子崩しは思った。

闇に独りきり。孤独を強調するような、木漏れ日をこれほど疎んだことはないだろう。

膝を抱き、肩を縮こまらせなにも考えないようにした。いつしか消えるだろう虚しさから目を背ける為に。

だが今日は長く夢と現の境を漂わなかった。突然、引きずり上げられるような感覚がして、聴覚が女の声を拾った。

次第に鮮明になる声は――――

「起きろ！原子崩し付いたぞ」

「ふわぁ。付いたの？」

「そうついたの。じゃ行きますか」

研究者用の駐車場を横断し裏口から研究所に入る。

自分の所有物である建物を理解している本名不祥は無機質な世界を迷いなく進む。あまりにもスラスラ進むものだから逆に不安になった。

思わず原子崩しが声を上げる。

「どこ行くのよ？」

「この前君が、いや麦野さんが半導体切ったろう。そこだ。っと付いたよ。君はそこから部屋に入ってたね」

指を指した方向を見ると普通の白い扉があった。

「わかった。アンタはどうするの？」

「指示するために別の部屋。なに一緒に良かったかい？」

「逆に嬉しいわ。ムカつく奴の顔見なくて済むし」

心からそう思っている原子崩しに本名不祥は笑った。

「あっは！正直だね」

本名不祥は全てを言う前に別の扉に入って無機質な廊下を進んで、突き当たりの部屋に入る。そしてこの間のように椅子に座ると原子崩しが現れた。

マイクにスイッチを入れる。

「さてと、原子崩し。実験を始めようか」

絡みつくような抑揚の声が無機質な白い部屋に響く。

その声に原子崩しは頷くと、手のひらに意識を集中させた。

用意されていたのは空き缶。それを手の上に持って来ること。原理と演算は昨日叩き込んだ。

後は実行するのみ。

深呼吸をして息を止めると共に曖昧な電子が1次元の切断した。それを媒介に0次元に間接的に操作する。

その時、原子崩しの頭の中に見えない場所の光景が見えた。それは研究所の中身全てだった。

空間の形とそこに存在する物体の情報が映像として雪崩れ込む。小さいが今、この空間が原子崩しの手の平の上にある。全てを見透かした感覚に、気分が悪くなり膝を付くと、スピーカーから本名不祥が不安げに声をかけた。

「どうした？大丈夫かい？」

だが原子崩しは首を横に振ると立ち上がり口元を吊り上げる。そしてなにが楽しいのか、彼女は笑い出した。

「あははははッ！！」

唐突に本名不祥は理解した。どうやら闇を引きずり出したらしい。寝た子を起こそうとして、とんでもない怪物を目覚めさせたらしい。

「そおら！」

麦野は空き缶を移動させるのではなくどこからか巨大な本棚を持ってきた。

「ほお、空間移動系ならLEVEL4はあるね」

流石、宇宙の果てまで見通した力だ。予想を良い意味で裏切った原子崩しに本名不祥は小さな恐怖を感じた。

本当に彼女はLEVEL6になるのではないのだろうかと。

そこにアラームが鳴り響く。表から誰が入って来たようだ。

映し出された姿に本名不祥は鬱陶しそうな表情をする。

そこには、ツンツン頭の黒髪の青年が探るように入って来ていたからだ。幸い、原子崩しは昂揚して異常に気付いていない。

と思っていたが、本名不祥知らない。この建物に踏み入れた時から
原子崩しの世界なのだ………

反離した心（後書き）

祝！

VP50000人突破

小説を書き始めて1ヶ月が過ぎようとしています。
皆様、応援やメッセージ、感想を有難う御座います！

これからもよろしく願います

狂氣

「見つけたあああああああああああああああ……！！！！！！！！」

原子崩しの脳裏に写りこんだのは、この忌々しい呪いをかけた一人の青年の姿。

上条当麻だった。

[illegible]

純粹な殺意を剥き出しにして原子崩しは哄笑する。鳴り止まない反響は無機質な世界を揺らした。

「殺す！アイツを今度こそ引き裂く！クッククク、あは、あはははあはははははは！！！！！！」

麦野を殺せない原因を抹殺する。そうすれば恐らく“あの壁”が消え去って……会える筈だ。

もう一度、溶け合う。

でない、でない！！

「私が不完全なままなんだよオオオオオオ!!!」

目には見えない曖昧な電子が次元を真つ二つに引き裂いた。

そこから0次元に干渉して3次元を渡る。一瞬で世界が変わった。無機質な壁に囲まれた部屋ではなく、外の世界に繋がる扉の近くで上条当麻が目を白黒させていた。

「え？あ、麦野！」

「死ねええええ！」

歓喜の声を上げた上条と違い麦野は烈火のように荒れ狂った怒りをぶつけた。

電子の極光が一本、上条に怒濤の勢いで迫る。反射的に跳ね上がった右腕が〈原子崩し〉を砕く。それを見た原子崩しは苦々しく顔を歪めた。

「……吐き気のする右腕だな。さっさと焼き殺されろッ！！！」

「お前はあの時の麦野か？」

怒り狂った原子崩しは上条の質問に答えず電子の弾丸を造り上げた。電子がループする事によって形を保ち発射されるのを待つ。

話し合いが無理だと悟った上条は腰を低くして、いつでも走り出せるようにする。

その姿に原子崩しは満足した。殺し合いの始まりを告げたのは原子崩しからだった。

幾つかの電子の弾丸が高速で飛翔する。上条を直接狙わず蛍光灯を破壊した。派手にガラスの破片を飛び散らせ二人に降り注ぐ。上条

は慌てて回避したが、原子崩しは自分が傷付け事を恐れず彼に向かって突進した。破片が原子崩しの二の腕を切り裂く。熱を孕んだ痛みを無視して隙だらけの上条の腹に蹴りを放つ。

「あがああ!？」

豪快に吹き飛んだ上条は壁に体を打ち付けたと同時に原子崩しの後ろの扉が勢いよく開かれた。

そこには渋面の本名不祥コードエラーがいた。

「原子崩し、見つかったなら逃げるよ。邪魔されると後から厄介だからね」

無理だと分かっている、彼女は原子崩しに提案をする。だが、やはりと言うべきか原子崩しは視線だけで殺せそうな瞳で本名不祥を睨む。

「巫山戯んな! 私はコイツを殺したいんだよ。そうすれば」

「そうだとはい限らない。殺して永遠に麦野さんを閉じ込めるより情報を聞き出すべきだ」

触れれば噛み付く勢いでいる原子崩しは本名不祥の接触を拒んでいった。実は催眠スプレーを忍ばせていた為にその判断は正しいと言える。

なので内心本名不祥は舌打ちした。

「だから今回は引こう。残念だが私は上条当麻との間に取引材料が

ない」

「必要ないでしょう。手足引きちぎって拷問でもしとけば勝手に言うわよ」

何かと押し止めたい彼女は上条を見た。余程強く頭をぶつけたのか指先すら動いていない。

今が殺す絶好のチャンスである原子崩しはついに本名不祥に牙を向けた。

「これ以上邪魔するなら先ず、お前から蜂の巣にでもなるかッ?!」

「君ね、なんでそんなに彼を殺すことにこだわるのさ? もっと時間を」

「ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね!!」

「ッ!!!」

残りの全ての弾丸が本名不祥に向かって放たれた。しかし、常人離れた身のかなしで全弾すり抜ける。彼女は静かに後退すると長く息を吐き、深く呼吸をする。服の所々が被弾してしまったせいか、少し焦げ臭い。それが鼻孔を満たし、肺に溜まる。

心拍数を整え、本名不祥はとっさに動けるように少しだけ力を込めた。瞬発力を利用するためだ。

「原子崩し、なにを熱^{いさ}り立ってるの。話を聞いてくれるかい? お願いだよ」

「黙れ、まだ利用価値があるからって調子に乗ってると黒こげのミイラにする」

「上条当麻を殺しても価値はないだから落ち着いて、……!?!」

しかし本名不祥の言葉は、ふらつきながらも立ち上がった上条の姿により打ち切られた。

頭から血を流し、腹を押さえながらゆっくりと前に進む。その先には、原子崩しがいた。

「む……ぎ、の。お前……」

「まだ立ち上がれたんだ。良いわよ立ち上がれる足を消して上げるッ！」

音を立てて電子が収束する。上条は殺戮の一撃を撃とうとする原子崩しを無視して、その腕を見た。

「怪我、……し、てるじゃ……ねえか」

「……………」

どちらが怪我をしているんだ、と原子崩しは聞きたくなかったが、口を閉ざしてその質問を飲み込んだ。

覚束ない上条の足は止まることなく歩み続けた。気づけば近くなった距離に原子崩しは反射的に電子の極光を撃った。

上条はそれを左に半歩避ける。それだけで原子崩しの無慈悲の一撃は壁を突き破り外へ飛び出した。

本名不祥は誰もいないことをとっさに願った。

「む、ぎの！」

「まぐれで避けたくらいで調子に乗るな！」

今度は両側を焼き尽くす。上条はただ直進しただけで、制服の端を極光の一撃が掠めた。原子崩しは思わず舌打ちをする。彼女は上条がどちらかに避けると読んだが、予想を外し彼はただ前に進んだだけだった。

さらに近づく距離について原子崩しは焦燥感に駆られ、辺り一帯を焼き尽くす為に〈原子崩し〉を七本、ロビーに放つ。

刹那、三人を真っ白な光が包む。あまりの事に聴覚と視覚は消し飛ば。しかしそれだけでは終わらない。原子崩しは0次元の極点を使い上条が居るであろう場所を裂く。

その光景は本名不祥には見えなかった。

「…これで、死体なんて残らないわよね……………」

まだ眩く光る世界のなか何故か原子崩しの頬に温かい雫が一筋となつて伝う。

涙が流れている事にも気付かず俯く。世界が元の輝きを取り戻した。原子崩しは前を見たくなかった。何故だか、分からない。見てそこ

に何も無かったらとても、嫌だと思ってしまった。自分がやった事なのに。

すると少し離れた場所にいた本名不祥が息を呑む音が聞こえ、思わず顔を跳ね上げると原子崩しは絶句した。パクパクと口が動くが、言葉は出て来なかった。呼吸が乱れていくのが分かったが、目の前の状態が分からない。

原子崩しはこの恐怖にも歓喜にも似た感情を知っている。立ち上がってくれた、生きていてくれた。

死ぬほど殺したいと願った存在なのに、何故だか手放して喜びたくなった。彼が存命したことに熱いものがこみ上げてくる。

だが、相反する感情の板挟みになった原子崩しの精神は極度の混乱状態に陥り、上条が自分を睨んでいるように見えた。

なにか言っているが耳に入ってこない。罵っているのか、それとも諭しているのか今の原子崩しには判別できなくなっていた。

ただ残った理性が疑問を口にする。

「な、なんで！どうして生きてるのッ！！」

「さあな。……麦野、それと原子崩し。そろそろ、終わりにしねえか？」

上条当麻は原子崩しの蹴りを食らって頭から血を流した怪我以外、増えていなかった。ただ服の端や頭髮の一部は焦げていた。

「終わってたまるか！わ、私は漸く完璧になれるんだ！ここで、ここで終わったら………台無しなんだよおおおおお！！！！」

絶対に外さない位置からの無慈悲な一撃は――

「な、んで！？どうして！！？」

上条の耳元を掠めただけで終わってしまった。

いよいよ錯乱という深い溪谷に落ちそうになった原子崩しは必死に先ほどの不可解な現象を突き止めようと躍起になっていた。

決して外す事のない距離と位置。なのに上条を消し去る訳でなく掠めていた。彼は避けてなどいなかった。しかし狙いは外れ、彼は生きている。

まさか、光の屈折を利用した能力者だった？いや、なら右腕はなに？能力じゃなくて全く別の何かでそうすれば上条は二つの能力的なにかと能力を使える………、駄目、全然話にならない！こんな馬鹿げたことなんて有り得ない！！

決定打がない！そもそもアイツは生きているの？！だって何度も何度も殺す為に！！！！

原子崩しの推測とは全く違う推測を本名不祥は弾き出した。しかもそれは確信を持って。

彼は避けてもいない。なのに外すのは、原子崩しは無意識で攻撃していない。ギリギリのラインで当たらない攻撃しか撃っていない。あの時の広範囲殲滅用の七本の〈原子崩し〉はどこか二つの極光が交わってお互い相殺し、安全空間になったところに上条当麻は入り込んだに過ぎない。

原子崩し、君の本能が彼を殺す事を避けているんだ。君が彼を避けているんだよ。感情がどんなに高ぶっても上条当麻は殺せない。だって、――――

上条は原子崩しに向かって右腕を持ち上げた。原子崩しは突然現れた竜の顎を思い出し身を竦み上げる。恐怖により絶望的な呻き声が漏れた。

「あ、ああ……や、」

子供のように震える原子崩しを見て上条は苦笑した。

彼女には自分が恐ろしい存在に見えて仕方がないようだ。

「大丈夫、だから手を伸ばしてくれ。俺はそれを拒絶しない。受け止めてやるさ、お前の怒りだって絶望だって悲しみだって、涙も全部だ。泣いて、助けを求めているんだよ」

「い、ごめんなさい！ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……！！」

堰を切ったように、ごめんなさい。と謝り続ける原子崩しは崩れ落ちさらに体を小刻みに震わせながら小さくなる。

その彼女前に上条は膝を付きそつと語りかけた。

「原子崩し、麦野。俺に謝っても意味ないぞ。ちゃんと言わなきゃいけない人に言わないとな。だから、先ずはお前が俺の手を掴んでくれ。助けて、って言うてくれ。その一言が大切なんだ。そうしたら絶対に助けてやる。原子崩しに麦野、俺の声を聞いてくれ」

「うあっ!!?」

そつと触れようとした手前で原子崩しの体が跳ね上がった。驚いて見上げるより先にバチィ、と電気が火花を立てる音がした。

「本名不祥、テメェ!」

「危ない危ない。彼女を絆される訳にも連れて行かれるのもこっちの都合として駄目なんだよ」

スタンガンを指で弄びながら本名不祥は気絶して動かなくなった原子崩しを持ち上げる。肩に担ぐと彼女はまだ床に膝を付く上条を見下しながら赤く毒々しい唇を歪ませた。

「彼女を救いたいなら、情報戦略をしましょうか?このデータチップには私の所有する場所や、なんの目的で使用するのかとか事細かに書いてある。その中から潜伏先を、そうだね五日以内に見つけられたら彼女を返してあげる。破格の条件でしょう?」

その提案に上条は吼えた。

「ふざけんじゃねえぞ!! なんで麦野たちがそんな酷い事されなきゃいけないんだ!!!!」

「あっはははは!」

しかし本名不祥は可笑しそうに高笑いをする。目尻に溜まった涙を掬い取ると、ニンマリと嗤う。

「ここまで彼女を追い詰めておきながらよく言うわ。よく考えるべきは君さ上条当麻君。麦野沈利を追い詰めた張本人なのに無自覚とは、悲しいね。彼女に同情するよ」

流し目で気絶した原子崩しを見て、それから不可解そうに皺を寄せる上条に視線を戻す。

そしてデータチップを渡した。

「それより、麦野を返しやがれ!」

「あー、そうだ。忘れてた。バイバーイ上条君」

立ち上がろうとした上条の顎に鋭い蹴りが打ち込まれた。

それは一瞬で上条の意識を刈り取り、気絶させる。荒れた床に放置して行く事に若干抵抗を覚えた本名不祥だが警備員の事を考えると彼女はその場を立ち去った。

「鬼ごっこの幕開けだ」

楽しそうなその声を聞く者はいない

狂気（後書き）

冬の食べ物とは何ですか？

やっぱり鍋でしょう！

あと蜜柑

情報戦略

「大丈夫って訳よ？」

「……う」

「かみじょう、生きてるみたいだよ。きぬはた」

頭の中を揺らされた感覚に吐き気を感じながら目を開けると、心配そうに覗き込んだフレンドの顔と、遠ざかる滝壺の後ろ姿が見えた。

「今、データを超解析してるんです。もう少し待って下さい」

「がんばってきぬはた」

さらに向こう側に絹旗がパソコンと睨み合いをしていた。一心不乱にキーボードを叩き流れていく文字を追う姿には何か鬼気迫るものがあった。

上条はゆっくり上半身を起こす。滝壺がコップ一杯の水を差し出した。

「ありがとな滝壺」

「どう致しまして。所でなんでフレンドはかみじょうを拾ってきたの？」

「あ、起きたら話すんだったね。……麦野の〈原子崩し〉が見えた場所に急いで行ったら、上条が倒れてた訳よ」

その言葉に滝壺は怪訝そうな顔をし、絹旗はパソコンから目を離れた。

「で上条には何があったか聞きたい訳よ。突き放しといてなんだけど……………」

目を会わせ辛いのかフレンダは上条を真っ正面から見なかった。

「条件がある。それを受け入れたら、話す。受け入れられないなら、データチップは返してもらうし、話さない」

「……………かみじょう。条件はなに？それに条件を受け入れられないでも、私達はデータチップを奪えるよ」

「アレがなんだか詳しく分かるか？」

「…………それは」

皆の視線が、パソコンの画面に集中する。書かれているのは学園都市の施設や研究所の説明。特にめばしい情報とは決して言えないものだった。しかし絹旗は画面を替えた。

「何か宝探してみたいなゲームをしてるみたいですね。敵については超知りません。しかし、調べていけば……………」

「麦野がどんな状態か知ってるか？」

データの中にゲームの内容でも書いていたのか、絹旗は知っているようだが、上条の最後の切り札に絹旗は苦い顔をして歯噛みした。

「助けたと思う気持ちは一緒だろ！なら、今だけは“暗部”とか考えないでくれ、我が儘だけど。俺は麦野に会って伝えたい事があるんだ」

「伝えたいこと？」

フレンダが首を傾げると、上条は頷いて恥ずかしそうに頬を掻いた。

「俺、麦野が好きなんだ」

「は？」

「かみじょう……」

「……………」

三人は同じような反応をした。何かを言おうとして失敗し、フレンダは石化している。

ただ沈黙だけが当たりを包んだ時、上条の携帯が鳴った。突然の事に皆、肩を震わせて驚いた。真っ白になった意識を呼び戻した携帯を開き上条は息を呑んだ。画面に出てきた名前は、麦野沈利。

渦中の人からだった。

三人はそんな事も知らず、青ざめた上条を心配そうに見つめる。ゆっくりと通話ボタンを押した。

「ハロー！詳しくゲームの説明するよ。上条君、メモするもの無く

て大丈夫かい？」

どこか絡みつくような抑揚のある声には嫌というほど覚えがあり、無意識で上条は声を低くした。

「なんの用だ本名不祥」
コードエラー

「やだな、ゲームの説明だよ。君の対戦者でありながら説明役をしてるんだから感謝してよねえ。データチップはどう、解析してる？」

「それは……」

パソコンの前にいる絹旗を見ると彼女は頷いた。それは肯定の合図。

「してるぞ」

「なら簡易説明あったでしょう？五日以内に私を見つけられたら勝ちだ。勿論、学園都市にいる。でも規模はデカイよ、なんて言っちゃって学園都市全域だから。データに入っている建物や研究所の情報を頼りに搜索頑張ってるね。人海戦術が出来ない君にはちょっと多いけど、麦野さんの為だ。早く不肖不出来のこの私を見つけないと、どうなるかは保証しない」

一々人の怒りに触れるような言い方に上条は携帯を強く握り締めた。

ミシツと嫌な音が部屋に響く。

「単純なかくれんぼだ、規模が大きければ大きい程見つけるのが困難だけどねえ。君の推測を聞くのを楽しみにしてるよ。待たねー」

通話が切られ、上条はため息をついた。このゲームにはルールと言うルールが存在しないことが分かった。

ただ五日以内に見つければいい。上条が何人仲間を作ろうとも恐らく違反ではないだろう。

穴だらけのゲームは危険が付き物だと理解している『アイテム』の三人は思考の海に飛び込み、今回の事を整理している。各々は自分の世界から帰ってくると上条を見た。

「上条、まずは麦野がどうなったか教えて欲しい訳よ」

「次に本名不祥について超詳しくお願いします」

滝壺は二人の意見に同意して頷く。

「その前に、俺が麦野を探す事を認めてくれ。そして蔑ろにしないこと。それが条件だ」

「超今更ですウニ頭。もう“闇”に狙われてるも同然なんですから、たぶん本名不祥はこちら側の人間です。なので超巻き込ませて貰います。それにゲームの参加者はウニ頭だけ。ルールに従って麦野を取り戻すならどちらにせよウニ頭は必要です」

「……………結局、巻き込んだじゃったねかみじょう、ごめんなさい」

割り切って晴れ晴れとした絹旗と違い滝壺は後悔の念に駆られた。本当に巻き込みたくなかった彼女は自分の膝に視線を落とし、うなだれる。その肩をフレンドが優しく叩いた。

「滝壺が悪い訳じゃない。このバカ条が首を突っ込んだからよ！ね、元氣だして滝壺」

「……フレンドさん、もう少しソフトに言って下さいませんか？」

「ウニ頭、否定はしないんですね」

トドメに絹旗が痛いところを突くと上条が唸るばかりで何も言えなかった。その光景に滝壺は口元が綻んだ。

「そうだね。でも本当に危なくなったら引き返してもらおうから」

「分かったよ」

「本当に？かみじょうは知らないうちに戻って来そう何だけど」

「確かに」

それでも上条を疑う滝壺にフレンドは同意した。

この短期間でたわいなく話せるようになった四人は笑い話を含めて暗い気分を吹き飛ばすと、絹旗の声で本題に入った。

「では、今リーダーの麦野はどんな状態なんですか？」

「麦野は、別の人格に乗っ取られてる。自分の事を“原子崩し”だと名乗ってた。それに精神的に不安な状態なんだよ」

「原子崩し、ってまんま能力名じゃん」

フレンダの呆れたような、なんとも言えない眩きに上条は首を傾げた。

「そう言えば、麦野の能力ってどんなんだ？なんかビームをぶっ放したり、テレポートして来たり色々あるのか？」

「うん？ちょっと待って下さいウニ頭。前者のビームは超分かりませんが、麦野は空間移動出来ませんよ。それが出来たら多重能力者になります」

「でもいきなり麦野が現れたんだぞ。生で空間移動する奴見たの初めてだけど、間違い無く麦野は空間移動した」

「それって結局、近くに居た空間移動系能力者が麦野を飛ばしたんじゃないの？」

フレンダの意見が一番可能性の高いもので、誰でも思い付く事でもあった。

しかし上条にはそう思えなかった。本名不祥が麦野を勧誘した理由。それがあの空間移動だと思った。

「なら、空間移動するとき。その空間が歪んで見えたりとか、するのかな？」

「歪んで？……ないよ。いきなり現れる。普通の空間移動じゃないのかな？」

「でも、やっぱりフレンダの意見が超現実味があります」

「埒が明かない訳よ！麦野は置いといて、えっと本名不祥ってどんな奴？」

平行線を辿る会議に三人は頭を抱えた。でも今は麦野の能力はどうでもいい。一番必要なのは本名不祥についてだ。

その人物を全く知らないフレンドたちは上条の言葉を待った。

「アイツは形容し難い奴だな。底が全く見えない。ちょっと遊び癖があると俺は思う。わざわざこんなゲームしなくたっていい筈なのに」

「そうですね。超意味不明です。私ならそのまま逃げますよ、まるで捕まえて欲しいみたいじゃないですか」

「きぬはた、本当にその情報にある建物の中にいるのかな？実は全く違う場所とかに隠れてるとか？」

「どこまで信用すればいいのか分からない訳よ」

「いや、必ず本名不祥はこの中にいる。アイツは対戦者って言った。それは自分自身がゲーム盤に居ないと言えない事だ。それに、このゲームを降りて麦野が絶対に助けられる訳でもないなら、俺は小さなこの可能性に賭けたい」

しかし三人は不安そうに腕を組んだ。確かにこのゲームを降りたとして麦野に辿り着ける保障はない。あるのは広大な学園都市を舞台として宝探しだ。暗部の仕事を遣り繰りしながらでは身が保たない。

どちらにせよ希望は小さいのなら、と絹旗は腹を括った。

「超仕方ありません。ウニ頭に協力します。失敗しても恨みっこ無しだから安心して下さい！」

思いつ切りのよい絹旗につられたように滝壺も言った。

「何があっても諦めないかみじょうを応援するよ。私も微力だけど、頑張るから」

今でも悩んでいるフレンダは遠くを見た。

「……なーんか、本名不祥って引かかるんだよね。私はあの女をちよっと調べたいから、みんなとは別行動って訳よ」

「藪をつついて超蛇を出さないで下さいよ」

心配そうに絹旗がフレンダを半眼で見つめるとフレンダは憤慨した。

「へまはしない訳よ！私だって『アイテム』のメンバーなんだから！それに麦野の為なら例え火の中水の中って訳よ」

「そうだよきぬはた。フレンダはできる子なんだから」

「えー、そうですか？」

「仲が良いのか悪いのか、まあ良いんだろうけど。そうと決まれば、絹旗に滝壺よろしくな。フレンダ無茶すんなよ」

頷くとフレンダは部屋から出た。急いでいるのか、バタバタと音を鳴らしながら何処かに行った。そして上条は漸くここが麦野の家で

ないことに気づく。

「えっと、この家って誰の？」

「『アイテム』隠れ家です。超普通の家でしょう？」

「少し広めのな。もっとこう、陰気臭いの想像してたよ」

「そんな家、超住みたくないんですけど……」

絹旗はそんな家を想像したのか、頬が引きつっていた。

「できれば一日中、日向ぼっこできる家が良かった」

「滝壺さん。それは超不可能です。夜に日向ぼっこなんて出来ませんよ」

「日の沈まない国に行きたい」

「滝壺そんな国ないぞ。あったとしても大昔のイギリスだ。実際は植民地増やして国土が広がったことにより、国内の何処かでは日が昇ってるってだけの話だ。今じゃ小さな島国だけだな」

「それよりも遥かに小さい学園都市でも一人の人を見つけるのは超苦労しますかね」

絹旗の呟きで、改めてたった一人を探すことの難しさを自覚した上条はため息をついた。

このゲームは負を押し付けるために用意されたものかもしれない。

圧倒的に不利だ。どこが破格の条件なのか知りたいくらいに難解だ。

「場所は何箇所あったんだ？」

「知りたいですか？正直超目を疑いましたよ。ざっと300の施設や研究所を所有してるみたいです。でも、おかしいことに、所有者名は殆ど木原幻生の名前なんです。譲り受けたんでしょうか？」

絹旗の口にした数に上条は目の前が遠くなった。300もの場所をどうやって五日で回れと言うのだ。

しかし反対に滝壺は冷静に画面を見た。

「譲り受けたとしても所長じゃなかったら好き勝手に使えないんじゃないかな？」

「ええ、だからある程度使用頻度が少なく麦野の能力に関係するであろう研究所、施設を中心に探しています。そうすればかなり絞り込めますんで」

「なんで麦野の能力に関わるところだけなんだ？」

「そのことについてはですね」

画面を切り替え所注意、と書かれたところを押すとリンクにより別の画面に飛ばされ、そこに書いてあることを読み上げた。

「この五日間の間に行うことを簡潔に記す。一つ、我々は留まり動かない。しかし隠れることをする。二つ、麦野沈利の能力開発を進める。三つ、本名不詳に限っては諸事情により外出していることも

ある。見つけたら捕縛してよい。戦闘許可。……二つ目の項目のおかげですね。これで80までに絞り込みました。あとは、最近使って無い所や無人で人気の無い工場、研究所、施設を探せば案外、五日もいりません」

「むぎの能力は希少なの。だから関連する場所は限られててさらに条件に合うところを探せばもっとすくなくなる」

上条が質問する前に滝壺は答えると、一緒になって場所の特定に勤しんだ。所々見えた文字には、素粒子研究所や電子研究所などのものがあつた。

しかし上条の胸の内には不安が巣くつた。あの本名不詳がここまで特定できるヒントを残すだろうか。例えこのヒントが間違っていなかったとしてもあの女は一筋縄ではいかない。もっと別の見方が必要になる。

根拠のない考えだが、上条にはあの時突然出現した麦野が誰かの助けを借りて自分の目の前に来たようには思えない。

上条はゆっくりと自分の世界に浸った。

広い空間に不釣り合いなほど何もな。からっぽの世界を眺めながら木原数多は後ろの扉から出てきた人物に嫌悪の眼差しを向ける。

女は気にせず歩み寄ると手を伸ばす触れる手前で止まった。威嚇する獣との距離にしては極めて近い。

「はい、0次元の資料。ついでに結果。あの能力はやっぱり素晴らしいね。アレイスターは、そんな高見まで麦野さんが昇華しないだろうと思ってるみたいだけど、0次元に干渉して4次元まで操れるだけの方式は手に入れた。この方式をもうちょい調整したら、宇宙を本当の意味で掌握できそうだ。天体望遠鏡いらずだね。地球に似た星が見つかるかもよ?」

楽しくて愉しくて、たまらない。と顔に書いた本名不祥は上機嫌で資料を木原に渡す。彼は一度目を通すと白衣の下にしまった。

「で、第四位はどうしたんだよ?」

「おや、レディの心配とは知らない間に紳士になったねえ。心配ないよ。宇宙までお取り寄せ範囲に入れてもピンピンしてたし。ただ、ある程度の広さなら360度見渡せるらしくその調整に手こずってるみたいで、歩けないんだよ。見えすぎて。だから今それを直接見る、じゃなくて感じる程度にしてるみたい」

「今日は饒舌だな。テメエの事情は知った事じゃねえが、お偉方が化け物を恐れてんのさ。今更だがな」

木原はうんざりしたように話す。

「確かに、化け物怖くて研究なんて出来ないよね。私の分野は幅広

いから色んな人見て来たけど、今回ほど危険な事はないかな」

しみじみと呟く女に木原数多は驚いた。存在自体がトップシークレットの本名不祥は、さらに表沙汰に出来ない仕事、かつての木原幻生がしていた研究の後継ぎとして選ばれ、統括理事会、秀ではその理事長会長からの依頼が頻繁で木原数多から見ても危険で残忍な研究をニコニコ笑顔で実行出来る最悪のマッドサイエンティスト。

裏の世界からは木原幻生の再来とも言われている曰く付きだ。

その人物が危険と判断した今回の事態。もしかすれば、学園都市の全てが揺れる大事件の始まりになるだろう。それは小さな波紋であったとしても、世界を震撼させるものとなる。

木原数多の見た幻想は現実昇華する。そう遠くない未来。

しかしその事をまだ知らない本名不祥は恐怖の中にある甘い可能性の箱に身を震わせていた。それを開ける事しか今頭がない。

しかし思い出したように声を上げた。

「忘れてた。ゲームしてたんだ」

「この前は囲碁してたな。なんだ次は将棋か？」

「いや、まだ囲碁してるよ。因みに一番得意なのはリバーシブル。黒一色にする爽快感がたまらない。今回は宝探しさ」

「はぁ、頑張れよ」

適当に受け流し木原は帰っていく。本名不祥は笑顔で見送ると、小さくなった背中に囁いた。

「頑張るのは、私じゃないの。騙されたかな、今頃〈原子崩し〉の能力を使った素粒子研究所を下見してるのかねえ？」

喉に引っかかるように笑うと来た道を戻る。ここはそんな物を扱う場所ではない研究所。

上条達が〈原子崩し〉ばかり見ていると、期限を過ぎ本名不祥の勝ちになる。

しかし本名不祥は別に勝ち負けに拘っている訳ではない。人と言う者は期限をつけるとその間にどうにかしようと躍起になる。

短期間勝負でも長期間でもないこのゲームは相手の疲弊を誘うもの。長くすれば余裕を与え、短期間にすれば手段選ばず何かをしでかす。そういった危険を回避するだけのヒントと時間を巧みに譲渡した結果、早く勝負を終わらせようと相手は躍起になる。つまり思い込みが生まれ目先だけが問題視されがちだ。

何より相手の思考を読み先手を打つ人物、麦野沈利は今はいない。彼女なら二日も無しに本名不祥を見つけただろう。

有能な人に頼りすぎたツケがいよいよ回ってきた『アイテム』は本名不祥の敵ではない。そして、あのデータチップには残り時間が2時間を切ると彼女の潜伏先が表示されるようになる。

それは必要な物を揃えさせず相手を誘い込む罠。本来の『アイテム』

なら時間が過ぎても物資を充実させるが、本名不祥の読みは真っ直ぐ来る、だった。

「だってゲームにもう彼らは忠実に従ってる。その時点で負けさ」
鼻歌を歌いながら軽やかに歩く。

彼女は自分の勝利を微塵も疑ってはいなかった。経験がそう言わせるのか、計画の完成度がそう言わせるのは謎だが上条達が術中に嵌ったのは確かである。

無機質な扉を開けるとその先はまるで普通の家を思わせる部屋だった。研究所の中だと忘れるくらい違和感のない。

「さあて、原子崩し体は大丈夫かい？」

本名不祥は小難しそうな分厚い本を読んでいた彼女に話し掛けた。

それに応えるように顔を上げると、また視線を本に走らせ、そつと呟く。

「もう見えすぎる事はない。感じる程度で詳しく分からないけど、見ない事で3次元の動きはよく分かるようになったわね」

「何かが動いた、ってのを感じる事になったのか。興味深い」

「ねえ、あまり遠くに行かないで……」

「寂しがりやだね原子崩し？」

本名不祥の言葉に原子崩しと呼ばれた彼女は否定するように頭を振った。

「不安になるから。何だか分からない気持ちになる」

「そう、一人にさせてごめんね」

慈愛に満ちた声と眼差しで語り掛け、本名不祥は原子崩しを抱き締めた。

夢にでも誘うように自分の声を原子崩しに聞かせる。

「大丈夫、私の声だけに耳を傾けて。大丈夫だから………そう……」

さらに鳥籠へと追い立てる。

「君の味方は私だけ。私をただ信じなさい。………そして誰よりも私を信賴して」

焦点の合わない瞳を確かめて本名不祥は嗤った。

原子崩しの精神を支配した本名不祥はゆっくりと蝕んでいく。洗脳とも催眠術とも言える言葉に原子崩しは頷いた。

そして穏やかな寝息を立てる。

「まだ完全に掌握出来てないなあ。私を疑ったりしてるうちは洗脳を継続しないと危険だね」

ベッドまで運ぶと原子崩しを柔らかなシーツの海に沈めた。

険しい表情していた本名不祥が彼女の寝顔をみて何故か胸が痛くな
った。

突然、自分は何をしているんだろう、と思い慌ててその思考に蓋を
すると長く息を吐く。思い出したのは、彼女が最初に起きて錯乱し
たあの時。

時間があるについ感傷に浸ってしまうかのような感情に戸惑いなが
ら、本名不祥は部屋を出た。

情報戦略（後書き）

気が付けばお気に入り100人超えました。106人の皆様、本当に有り難う御座います！
これからも頑張ります。

気が付けば最近小説のネタを探してる毎日。

アナタは何かハマるとソレだけしか見えない人ですか？

因みに自分の答えはYES。ソレ以外見えない人間です。

二日目

データの波が押し寄せ、それを本名不詳コードエラーが処理をする。地上最高の頭脳は一気に演算を駆使して答えを導き出す。樹形図の設計者に遠く及ばない人間の脳。それでも彼女は極力アレには頼らない。便利に頼っていると、いざと言う時に自分の身動きが出来なくなるのを痛いほど知っているからだ。

しかし、そこらの科学者はずっと頼りきって導き出された結果だけで満足するものも多い。本名不詳にしてみれば少しは自分で考えろと怒鳴ってやりたいくらいだ。本当に科学者の端くれなのか、とも思ってしまう。

「ッああ……、目が痛い……。うう」

長時間、椅子に座っていたのが響いた。立ち上がっただけで骨が音を立てる。

悲鳴を上げる身体に本名不詳は、歳を取ったなあ、と一人ごちった。昔は二日くらい不眠不休で研究していても、例え同じ体制であつてもこうも早く体が限界に到達しなかったのだが。時の流れとは偉大で、とてつもなく残酷なのだを思い知った。

「出来れば永遠に知りたくも無かったけど……」

節々の痛みに思わず涙が出る。その中には老化の悲しみも混じっていた。

軽く体をほぐし、血流をよくすると彼女は徹夜で仕上げた研究成果

をファイリングする。

見やすいように順を考え、一つ一つを繋がるように綴じる。4次元の方程式から始まり、宇宙にまで広がった論文はファイル三つ分。紙の重さを感じながら本名不詳は棚にしまっていく。今ではパソコンの中に文章が保存できるが、未だに紙は健在だ。いつかは紙も無くなると誰かが言っていたが、当てにならない。

実際、紙は便利だ。

重たくなければ。

一通り作業を終えると本名不詳は時計を確認する。時間は午前4時半。ゲームが開始して二日目だ。

刻限はあと三日。昨日、上条に電話をしたあと麦野の携帯は電源を落とした。これで発進先は見つからないだろう。携帯会社のパソコンにはもう細工した事もあり、足が付くことはない。

控え目な薄紅色の端末を指でなぞる。薄型のそれは本当に真新しく飾りもない。

「いつ返そうか？」

そんな事を悩みながら本名不詳は原子崩しがいる部屋に向かった。

窓のない廊下を歩きながら天井を見上げる。規則正しい間隔を置きに蛍光灯が並べられ、適度な明るさが差す。あまりの何も無さに、本名不詳はため息をついた。

まるで自分の心だと、そう思った。何もない、何も存在しない世界。誰一人として自分を見てくれない。路傍の花もいいところだ。

「花って言うよりは雑草かな」

嘲笑する。改めて思うと花と言う程でもない。

廊下を右に曲がり、扉の上にあるプレートが剥がれた部屋に入る。中では原子崩しが静かに寝ていた。

本名不祥はキッチンに行きマグカップにインスタントコーヒーの粉末を入れる。ポットに入っていたお湯をマグカップに注ぎよく混ぜる。途端に芳醇な香りがキッチンに立ち込めた。

更にお湯をつぎたしそこのんびりとコーヒーを飲む。インスタントもだいぶ豆の味に近づいたと思う。苦く、馥郁たる香りは本名不祥の倦怠感と眠気を吹き飛ばした。

ゆっくりと嚥下させ、時間を掛けて飲み終わるとマグカップを直ぐに洗った。食器籠に置いておく。

匂いが残らないように換気して、漸く本名不祥は椅子に座った。

こうして何者にも追われる事のない時間に、原子崩しの姿が浮かぶ。ずっと彼女を見て来た。知らない所で、気付かれないように。

最初に彼女を知って観察した感想は、“プライドが一人歩きたよな奴”だった。ついでに我が儘でもある。ファーストインパクトはよろしくなかったのだ。

絵に描いたような綺麗な顔立ちをしていた割には、これまた絵に描いたように高飛車で、どこの女王様かと思ったほど。

しかし日を追う毎に見えてきたのは、とても不器用で弱さを認められない“心の弱い”姿。虚勢ではないが、いつも張り詰めて溜め込んで泣き出せない小さな背中が、本名不祥の目蓋の裏に焦げ付いて忘れさせてくれない。

誰かに似ている気がするが、一体誰だったか？泡沫のように淡く脆い思考に浸かる。どんなに考えても答えが出てくることはなかった。そして今回も。

費やした時間は無駄になる。しかし考えを止めようと言う考えは、いつまで経っても出ては来なかった。

蜘蛛の巣のように思考の幅が広がり、今の彼女について考え始めていた。能力開発に携わって順調に0次元を解析し、光明が見えているが、このままでは必ず彼女は行き詰まる。

だからこんな下らないゲームを催したのだ。潰そうと思うならもう『アイテム』なんて消えている。しかしそれでは駄目なのだ。本名不祥が原子崩しと麦野沈利に求めているもの、その成就には『アイテム』並びに上条当麻の存在が必要不可欠になるはず。それで駄目なら『アイテム』なんて文字通り使い捨ての道具にすぎない。アイテム

そしてなんの為に自分が直々に原子崩しを洗脳しているのか分かってもらえない。本当なら不安定な洗脳方法より安定した学習装置テストメントを使用したいのだ。

「まったく、これも全て上条当麻が原子崩しを壊すからだ。時間が

必要になる。一度スケジュールの変更を余儀なくされるな、アイツら次第になるだろうし、どうしようか？」

別に時間内見つけなくてもいい。そして見つけてもいい。

やることは変わらないのだから。見つけ出せないのなら、それまでだ。期待はずれな集団。その程度。

「裏を返せば、見つけてくれる事を期待しているだよねえ。手は抜かないけど」

小さく笑うと本名不祥はキッチンから出て行った。

原子崩しが寝ている部屋は広く、寝室としても機能しながら私室でもある。元は別の人物がここを使っていた。本名不祥にはとても懐かしい人物になる。

椅子に座り携帯のアルバムを開く。

本名不祥がまだ名前を持っていた時代。研究者として初めてできた後輩と二人で撮った写真を眺める。昔の記憶が蘇るが、だいぶ色褪せて所々虫食い状態だった。

でも出会いはよく覚えている。あの木原幻生が才能を評価し、自分が認めた人物。

「木山、君は今どこにいるの？」

何をしている？ 袂を分けてから一度も顔を見ていない。名前は度々

聞くけど……

不意に物悲しさがこみ上げた。唯一友と言えた彼女はとある事件以来、噂でしか近況を知らない。本名不祥はどこまで行っても学会には出れなのだ。

なにより合わせる顔がない。

乾いた笑いが零れた。椅子の背に体重を預けるとギシツと軋む。心が悲鳴を上げた気がした。

「ああ、唯一人間でいられる感情が、消えてくよ」

摺り潰されて、粉々になってしまった感情。いつの間にか人とは思えない実験をして、未知の発見だけに意義を費やした今まで。

これでは、人殺しに意義を見出した原子崩しと同じじゃないか。その答えに至った瞬間、電撃が走ったように疑問が吹き飛んだ。ふつふつと脳細胞が活性化して、目の前の景色が移ろい、過去の情景が蘇る。とても鮮明に見えた。

麦野は昔の自分に少し似ている。全てではないが、本来なら抜け出せた闇から抜け出せずもがいて、でも諦めた姿が。

そして天啓といえる人物に出会い変わった。そのことに麦野は迷った。罪悪感が彼女を掴んでは離さない。しかし本名不祥はさらなる闇に浸かると分かっていながら、人としての終わりの道へ突き進んだ。罪の概念を捨て去る為に。

この時点で麦野と本名不祥の間には天地の差ができた。

その差がどんな結果を招くのかを考えながら本名不祥は微睡んだ。

誰かの穏やかな寝息が聞こえ原子崩しは目を覚ました。

重たい体を起こし、テーブルの方を見ると本名不祥が頬杖をついて器用に寝ていた。

「……………」

ゆっくりと覚醒すると、立ち上がり原子崩しはその隣に座る。本名不祥の垂れ下がった冷たい手を包むと膝の上に置いた。その寝顔を見てとある事に気が付いた。

「眼鏡かけたまま寝てるんじゃないわよ」

彼女は眼鏡をしていた。初めて見た一面に興味深く見つめるが、人の寝顔を凝視すると、どうも複雑な心境になるので視線を自分の手

にもっていく。

無音の世界。全てが緩やかに過ぎていく。穏やかで心地いい。

昨日感じた言いようのない不安は静まったがどうにも本名不祥を見ていると胸騒ぎがする。信用するなど、囁かれている気がしてならない。

死体のように動かない本名不祥を険しい眼差しで睨んでいると、赤い口元が笑った。

「そう見つめられるのも困るな」

「ッ!？」

思わず肩が跳ねた原子崩しを見て本名不祥は目元と口元だけで微笑むと、時間を見た。

「8時か、おはよう。よく眠れた？」

「たぶんね」

「曖昧だな。なにかあったの？」

「夢、かしら？誰かに会った気がして、それから覚えてない」

「へえ。そうなんだ誰なんだろうねえ」

なぜか原子崩しは直感で本名不祥は自分が誰に会ったかを知っていると思った。

気になり尋ねようとしたら、いきなり立ち上がりキッチンに向かう。

「朝ご飯まだでしょう。待ってて」

「……ええ」

本当にそう思ったのか、それとも質問から逃げようとしたのか原子崩しには分からなかった。

キッチンに入って本名不祥は備えられた冷蔵庫を開く。中には少ないに食材が置いてあった。たった五日。もしかするとそれ以下だ。あまり多く詰め込む気にもなれないし、五日間も肉や魚の生物なまものを保存するのも躊躇われたからだ。

諸事情の外出とは日用雑貨や食品調達の為に掛ける事だったりする。基本、本名不祥は呼び出して来てもらう。外を歩く時は護衛が必要になる身分だが、気ままで気紛れな彼女はそんな堅苦しい者を連れる事をしない。

おかげで上から説教をくらった事も気にしない。木原一族最高責任者と理事長以外自分に手出し出来ないのをよく知っているからだ。

しかしその二人を敵に回したらどんな者でも本名不祥の敵になってしまう。非道な研究をしていた事が伏せられても、いわれのない罪状が突き付けられるだろう。もしくは、暗殺。

なので本名不祥は意外にこの地位を針の筵だと思った。幅は利いても、命令には絶対に逆らえないのだから。

「ネガティブだ……」

久しぶりに昔、友だった彼女を思い出し人並みの生活があった時代を想っていたら、今の自分がどれほど外道かよく分かる。それを進んで突き進んだと言うのに。

まったく、昔を想うのは嫌になる。

投げ捨てた感情とか人の心が蘇るからだ。

それはこうして自分で料理すると、同じ様に大学時代を思い出す。自炊していた時でもあったからだ。

味噌汁を完成させると、次にグリルの中の鮭をひっくり返した。

「さて、持って行くか」

ご飯を茶碗に盛り、二人分運ぶ。原子崩しが此方に向かってきて受け取ると、本名不祥は素早くキッチンに戻る。鮭を取り出し皿に乗せ、味噌汁を注ぎ、おひたしを盆に乗せていく。

すると、人の気配を感じ顔だけ振り向くと原子崩しが本名不祥の背後から盆を覗き込み一言呟いた。

「鮭」

思わず苦笑する。

「君、本当に好きだねえ。なんか私のあげようか？」

「いいの？返せと言われても絶対に返さないわよ？」

「鮭にこだわるほど好きでも飢えてもいないからねえ。あげるよ、ほら運んで」

無邪気に笑い、喜ぶ原子崩し。その背を見送り、本名不祥は曇天のように暗く重たい表情をした。

「あれだけ、普通の子なのにねえ。………はあ、まったく本当に」

——昔なんて思い出すもんじゃない。

棄てたものを未練がましく思っているのはまだまだ甘い証拠だ。本名不祥は自分に洗脳や催眠術をかけたくなった。

箸とコップ、それから冷蔵庫にあるペットボトルを取り出し、部屋に向う。

向かい合うように配膳されており、本名不祥はそこに座った。原子崩しに箸を渡し手を合わせる。

「食べようか」

「いただきます」

それから静かな食事風景だった。

本名不祥は夢中で鮭を頬張る原子崩しを見て、今度はどんな鮭料理を作るか悩んだ。主に和食くらいしか作れないのでバリエーションは広くない。

「……………どうしようか晩御飯」

この歳になって料理の本を買うことになるとは、彼女は知らない。

朝食を終えてのんびり過ごす原子崩しに本名不祥は紙袋を差し出した。

「はい、洋服。君の趣味に合うか分かんないけど」

「え？うん。それじゃ、着替えてみるわ」

「私は機械の調整してくるから」

それだけ告げると本名不祥は研究所を徘徊しに出掛けた。

原子崩しは早速、大きな紙袋を開き中に詰められた洋服を引っ張り出した。

レギンスにワンピース、カジュアルな服の一式。下に行くにつれて幅が細くなっていくジーパン、その他。女性が好みそうな物が取り揃えられていた。

そして最後に

「いや、まあ必要だけど……………なんか複雑……」

肩紐を掴み上下セットのランジェリーを見て原子崩しはなんとも言えない表情をする。

必要なのは必要なのだが、服もこれも本来なら自分で買いに行くにものだ。頭で理解しても心がついてこない。

しかし背に腹は代えられないのも事実。原子崩しはレギンスとワンピースのセットを掴み脱衣場に向かう。ついでにシャワーでも浴びようと原子崩しは思った。

原子崩しがなんとも言えない葛藤をしている頃、本名不祥は麦野沈利及び原子崩しのデータを統計していた。精神面から行動パターン。演算の癖など事細かに記されては、纏められ結論を出す。

結果、分かったのは原子崩しも今の急拵えの人格、原子崩しも麦野沈利とも言えない現在の彼女の根本にあるのは同じものだと言うこと。

根本にあたる麦野沈利、それはまだ彼女が生きている事を示していた。

「麦野さんと呼び出すには上条くん達を危険に巻き込むのが手っ取り早いけど、矢面に出れないから誘い込むしかないんだよねえ。来なかったら独自で引きずり出すしかないけど……したらこっちが危険だし。……本当に面倒なことしてくれたなあ」

原子崩しが使えなくなってから帳尻合わせが難しい。急拵えの人格を媒介に原子崩しの安定を図っているが、どうにも上手くいかないのだ。出来るなら、上条達と出会う前に原子崩しの人格を修復したいのだが本名不祥の本音である。

机に倒れ込むと疲労が蓄積していた事を体が思い出し、強烈な眠気に襲われた。目を瞬かせ、夢の世界に落ちるのを食い止める。懷から錠剤の入ったケースを取り出し、五つほど一気に噛み砕く。

突き抜けるような酸っぱい味に眠気が遠ざかる。顔をしかめ耐えると目尻から涙が一筋零れた。やはり五つは多く、強力な眠気覚ましの味に悶絶する。

時間をかけて味が消えていくのを待つ。次第に刺激的な酸味が抜け、本名不祥は立ち上がった。

「ちゃんと使用法を守らないとなあ。死ぬかと思った……。さて、実験も進めないとな」

やることは山積みだ。何せこうして麦野や原子崩しの精神状況に、0次元の開発。今の彼女に洗脳治療と、統計。

そうして本名不祥の一日は瞬く間に消えていく。

上条たちと同じように一分一秒が惜しいのだ。何気に、彼女のほうが忙しいのかもしれない。

二日目（後書き）

肩が痛い。なんか知らんが肩が痛い。

これが噂の五十肩？

まあ、まだそんなお年でもないが。

五日も掛かってすいません。次はもっと掛かるかも……。

ちょっとした出来事

息抜きに、と思い携帯に保存していたサイト整理をしていたらたまに見つけたうそこメーカー。

懐かしさ半分で開きジャンルが増えていてビックリ。

でも自分は殆どやってみたので、麦野沈利という名前で、I?（ラブ）Tシャツというヤツやってさらにびっくり。

結果

I? 幻想

……良かったな上条。愛されてるよ。てかこの結果何分の一の確率で出てきた？ 奇跡レベルだぞ。

……夜中にホラゲーの実況見て寝れない自分いるだろ！？
これは何かの間違いだ！！

と言いたい張りたい。

超怖い。零 刺青のヤツ。でも続きが気になる〜

三日目

上条が三日目の朝を迎えた。

初日で情報処理をして、二日目の昨日はめばしい全施設を回ったが麦野は見つからなかった。徹夜で頑張った絹旗の努力は儚く散る。

なので今日の午前は作戦会議になっていた。悠長な事だと思われるが、運試しの当てずっぽうよりは随分マシだ。

時間は7時。

朝にしては少し遅いが昨日必死に走り回った事を考えると勘弁してほしい。ついでに学校はサボリになる。小萌先生からなんとと言われるか不安だが、上条は今は考えないように努めた。麦野が心配だ。

最後に彼女を見た責任感が胸の内を重たくする。

リビングのソファから体を起こし、深く座り込み長く息を吐いた。立ち上がって部屋を見渡す。だいぶ見慣れたこの景色。本当ならそこに麦野も居なければいけない。

たぶんそれを一番に感じているのは『アイテム』だろう。フレンドなんて本名不祥の情報収集のためにこの隠れ家には帰ってきていない。

その事について、絹旗や滝壺は特に心配していなかった。どこか別の隠れ家にいるらしい。

眠気とだるさが抜けた上条はキッチンに向かい冷蔵庫を開ける。中
にあった食材を見て朝食は炒飯に決定した。

「ん、おはようかみじょう」

「おはよう滝壺。絹旗はどうした？」

次に起きてきた滝壺はまだ眠たそうにしていた。

「まだ寝てる。朝ご飯なに？」

「炒飯にするつもりなんだけど」

「うん、分かった。フライパンは適当に使っていいから」

それだけ告げると滝壺は絹旗を起にいった。

見送った上条は気合いを入れるように包丁を手を取った。

「よっし！頑張るか」

フレンダは『アイテム』メンバー、上条と別行動をして三日目の時を過ごしていた。

この二日間はずっと昔、本名不祥^{コードエラー}が勤めていた研究所の研究者リストを盗み出していた彼女は、漸くまともな資料を手に入れた。

本名不祥の本名『木原神無』（きはらかんな）

木原の分家として生まれたが、科学者としての才能に恵まれ木原幻生の養子となる。その後は数々の理論を生み出し、表彰された。能力開発を受け、LEVEL2。

しかし、二十四歳で死去。

「二十四で死去って有り得ない訳よ。何があったか知らないけど。むむむう、誰かに詳しい話しとか聞けないかな？」

本名不祥の情報をファイルに入れる。それをバックにしようと、コンビニの袋からパンを出し包装を取った。

それはちよつとした悲劇が起きる五秒前。

「カミやんのやつ学校に来ないにゃー」

「なにしとんのやろ？」

パンの包装をコンビニ袋にしまうフレンダの後ろから、青い髪をした青年と金髪にサングラスをした目立つ容姿をした青年が歩いてきていた。

「まさか朝までコース堪能中!とか」

「ツツチー、どういふことやッ!!」

「おっと、危ないッ!」

「いただきま、フギヤ!?!」

後ろからの衝撃でフレンドのパンは宙を舞い。一口も食べていないそれは地面に落ち、嘆く前に清掃ロボットがゴミとして回収した。

「ああああッ!! 私の朝ご飯がああ……」

「すまなかった、よく前を見るべきだったぜよ」

「女の子泣かしたらアカンよツツチー」

「そう思うなら買って返せ!」

フレンドは自分より遥かに高い土御門を睨みつける。だが土御門や青ピからしてみたら、必死なフレンドの姿は子猫が爪を立てている程度で逆に和んだ。

「そうか、なにが欲しいんだい? お兄さん買ってあげるぜい」

「……なんか馬鹿にされてる訳よ。なら、あの二千円のホットドック買って!」

土御門は驚愕の値段に目を疑った。しかし、二千円と看板に書かれ

ている。

「え？ ホットドック二千円。おい青ピ、金を！」

「またなあッ！ ツツチー！！」

「逃げんなああッ！！」

「アンタは待つ訳よ！」

凄い速さで遠ざかる青色を追い掛けようとした土御門をフレンドは掴むと、土御門は観念したようにため息をついた。

「でも流石に高いからそのオープンカフェじゃ駄目かにゃー？」

「まあいいか。朝ご飯が食べれるなら」

フレンドは土御門の手を引きながらオープンカフェに入っていく。そして白いチェアに座るとメニューを開いた。

「なんにしようかな？」

「出来るだけ高いものは勘弁してくれ。貧乏なんぞな」

彼は財布をフレンドに渡し同じようにメニューを見る。

フレンドは渡された財布の中身を確認した。三千円とちよつと入った財布は軽くフレンドは罪悪感にかられ、なるだけ安い朝の割引メニューに決めると、ボタンを押す。

「決まったか？」

「出なきゃ押さない訳よ。えっと短い間だけどフレンダって言うのよろしくね」

「自己紹介がまだだったな。俺は土御門、よろしく。――『アイテム』も大変だな？」

「なッ!？」

空気が一転し、フレンダの意識は外界とは別離され、すべて土御門に注がれた。飛び上がらなかった事を誉めてほしいが、打つ手がな
い事に歯噛みする。嫌な汗が滲む手で隠し持っていた煙幕弾に触れたが、

「ご注文はなんでしょうか？」

「ああ、モーニングコーヒーと朝のランチセットで」

「かしこまりました。では確認ですが、モーニングコーヒーがお一つ、朝のランチセットがお一つでよろしいでしょうか？」

「それをお願いします」

去り行く店員にフレンダは内心毒づくど土御門をさっきの比ではな
いくらい睨み、声を潜めた。

「アンタ何者？」

「さあな？無駄な行動は止めとけ。俺が知りたいのは本名不祥につ

いてだ。その資料を見たいだけなんだが」

「信じると思う？」

「いや、まったく」

口元に笑みを浮かべ土御門は辺りを見渡した。

「しかし人がたくさん居ると攻撃出来ないのは辛いよな？だから穏便に済ませようぜ」

「無理ね、こっちは攻撃出来ないけど逃げるくらいなら何とかなるし。結局、穏便に済ませるなら、お互いなにも無かった事にするのが一番な訳よ」

「確かに。だがこっちも仕事で本名不祥にもしかしたら死んでもらわないといけない。……っ」と朝飯来たぜい」

土御門の言うとおりでウェイトレスが注目したものをトレーに乗せてやってきた。テーブルの上に置くと足早に去っていく。

「こんな事ならもっと高いの頼めば良かった訳よ」

「すまんぜよ。まあしかし安いを選んでくれたんだ。コーヒー飲んだら俺は行くぜ」

その言葉にフレンダは目を見開いた。

「見逃すの？」

「そうなるな。出来れば本名不祥をどうにかしたかったが、呼び出しが掛かっちゃった」

携帯を取り出しメールを読み進める土御門はフレンダは疑惑の眼差しで見詰める。

「本当に？イマイチ信じられない訳よ」

刺さる威圧感を全く意に介さず土御門は一気にコーヒーを飲むとフレンダに手を突き出した。

「金は払っというてやるから財布返せ」

「払わなかったら絶対殺すから」

「はいはい。そんなやまたなフレンダ」

「もう二度と会つかッ！」

罵声を受け土御門はレジでお金を払うと、店を出て横断歩道を渡り自然な動作で裏路地に入って行く。そこから幾つも建ち並ぶ無人のビルの内、一番小さいビルの中へ入るとひんやりとした空気が土御門の頬を撫でる。

薄暗い部屋にいきなり光が灯り、全体を照らす。吹き抜け構造の大きな空間は二階が僅かに見えた。

そして黒く艶のある髪を高い位置で結った女が二階の手すりを背もたれにしているのが見え、土御門は奥歯を噛み締めた。目的の人物からメールが来て、罨だと思いながら来てみれば彼女は一人で何や

ら携帯を弄っている。

そして本名不祥は振り向く事なく土御門に話し掛けた。

「初めまして、土御門君。今『グループ』が『アイテム』に近づいて貰うと困るんで直々に来てやったよ」

高圧的で上から目線の物言いに土御門は鼻を鳴らした。

「何が来てやっただ。『0次元の極点』まさか会得した訳じゃないだろうな？」

「ああ、もうだいふ完成に近づいた。宇宙全域はまだだが、太陽系くらいは楽々の範囲かな」

「なるほど……麦野沈利含めて、貴様を殺さなくてはならなくなつた訳だ」

決して穏やかとは言えなかったが、ゆるやかな空気が殺気の影響で更に冷たく感じた。

“背を刺すような殺気”に本名不祥は赤い唇を毒々しく歪めて、初めて土御門を視界に入れた。携帯を白衣に仕舞い眼鏡を外す。

獲物を目の前にした蛇のような瞳で土御門を観察する本名不祥は腰のベルトから長さ10センチ程度の筒状の物を取り出すと、末端を掴み勢いよく振った。

シャツと音を鳴らし伸びたそれは棍棒のような武器に様変わりした。

銀色に鈍く底光りする棒を肩に担ぐようにした本名不祥は土御門を見下す。

「殺すのは、なんの為だい？『魔術側』の不利になるからなのお？」

「人が持つには大きすぎる力だ。科学者ならそれがよく分かるだろう！」

確かに、もし会得してしまえば宇宙さえも、掌中に収めてしまう能力は神としか言いようがない。そんなものを人が持つとどうなるか、危惧しない方がおかしいだろう。

だが本名不祥は土御門の危惧を盛大に笑い飛ばした。

「アッハハハハ！！こいつと来たらあ、面白いこと言うわねえッ！？んな事が恐くて“学園都市の科学者”やってられないわよお。禁忌だからこそ紐解く人種が“科学者”でしょうに。私が死んでもこの研究は止まらないけどお、どーする？」

「全く、木原の科学者はこんな奴らばかりだな。いつかとんでもない事になるぞ」

「上等お！邪魔するなら丸呑みにしてやるよ。土御門君は私の邪魔をするの？」

本名不祥の間に土御門は不敵に笑った。

「残念だが、敵だー！！」

「いいねえ、潰しがいがありそうだ。でも、無謀だって教えてあげ

る!!」

本名不祥が吠えた瞬間、風が彼女を包んで飛翔させる。

「ほお、『風力使い』だったのか」

「はあ? そんな訳ないでしょう。もっとチートな能力だよ!」

一直線に土御門に突進した本名不詳だが、持ち前の瞬発力により躲われ、床すれすれを疾風のように滑ったが風を操り停止する。

手の内が見えない者同士、相手を観察するように構えた。

「もっと凄い能力らしいが、なんなんだ」

「さあね? 知りたいなら自力で探さないよ。『オートリバース肉体再生』LEV ELOじゃ使えない能力だね。土御門君の本気見たかったが、仕方ない」

何気なく語る本名不祥に土御門は拳銃を向けた。彼女は土御門の立場や弱点になりえる者を知っている。能力程度、調べるなら倉庫にハッキングでも権限を使えばいい。

しかし能力者の魔術師が魔術を使うとどうなるかを知っているあたり、徹底的に調べ上げられている。

本名不祥がもし血も涙もない人格の持ち主なら、土御門はここで本名不祥を伐たねばならない。そうしなければ――――

「やはり、貴様は危険だ」

「知ってるよ。だから死んだ者とされ、惨めに生かされてるんだからさあ」

「ならここで死ね」

無慈悲に拳銃から弾が飛び出した。しかし本名不祥に当たる事なく見当違いな所にぶつかり火花を散らす。土御門は当たらなかった事には特に驚かず、また躊躇なく撃った。

結果は同じ。

だが土御門はタネが分かったように不貞不貞しく笑う。

「空中の光をねじ曲げ、物体の実際の位置と見える位置がズレているみたいだな」

「当たり前だよ。で、打開策は？」

「全部ぶっ飛ばせば当たるだろ？」

「それも一つの手段だが、不可能だよ。ぶっ飛ばすなら土御門君は魔術を使わないと。まさかとは思うけど……………」

怪訝そうに眉を寄せた本名不祥の疑問に土御門は答える。

「その、まさかと言ったら？」

「……見てみたいが、困った。今死ぬのは嫌だしねえ、それに一種のギャンブルに賭ける気なの？」

「アンタの手札が見えないんだ、賭けないどうする。俺が見た能力は二つもあった。多重能力デュアルスキルとか言わないよな？」

「ああ、言わない言わない。ちゃんと一個の能力だよ。……しかし何気ない会話から引き出したり、話術が上手かったりするね土御門君。何やら似た者同士だったりする？」

「ふん、それは勘弁。似たくもない。だが、きつと同じ穴の住人だ。つまりアンタは——」

「そうなると土御門君も——」

確かめるように言葉を紡ぐ。

「——嘘つきだ」

声が重なる。

互いに残忍に微笑む。

「ははは！！まだまだ若いのにコッチに来ていいの？」

「自分を偽る事が出来ないと多角スパイは出来ないんだぜい」

「そうだね。ふうん、でも大切な人がいて良かったねえ。守る為に戦うなら怖くないけど、置き去りにしてしまうから、死ぬのって怖いよね。そう思う人かな君は？」

「どうだろうな」

曖昧に返す土御門に満足したように頷いた本名不祥は、左に付けた腕時計を確認した。

「さて、帰るか。上から殺すなど来てるし傷つけられないし。それに、もっと手の内揃えてからおいで。拳銃一挺だと心許ないしだろう？ いや、そう仕向けたのは私だけどねえ」

「つくづく喰えない奴だな」

困ったように本名不祥は肩を竦めた。

「いやいや、美味しく頂かれても大変だ。この辺は年の功ってやつさ。土御門君も長生きすると喰えない円熟味のある人間になれるよ」

のほほんとして間延びした締まりのない声と態度の彼女に土御門は違和感を覚えた。

まるで人格をとっかえひっかえしているように感じるのだ。

「駄目もとで聞くんが、キャラが違うぞ。能力と関係するのかな？」

「そうだねえ、大ありかな。いやあ、なんと言うか困るんだよねこれはさ。色々難儀なのよお。ではさよなら、あまり私にちよっかいかけないでねえ、殺さないといけなくなる」

最後の一言に土御門は頭から冷水を浴びせられたように全身が身震いした。

その時には本名不祥は空間移動テレポートしたのか姿を消していたのが幸いだ

った。

そして長く息を吐いて天井を見上げる。

「全く本当に嘘つきな奴だ。殺す気満々じゃないか」

天井にはこの寒気の原因がぶら下がっていた。

巨大な氷柱が隙間を惜しむように敷き詰められ、大きさからして能力による物だと伺える。本名不祥の意のままにアレが落下していたならこの空間で仕込むのも無理に等しい。

つまり土御門は見逃されたのだ。指一つで消されたかも知れない事実。途中で気がついたが、気づかなければ死んだだろう。

光を歪めているのではなく、空中に漂う水の分子を凍らせ、鏡をつくり上手く光を屈折させあたかも“そこに居るように錯覚させる”事に気が付いて漸く氷柱の存在を知った。

そして土御門が逃げる計算をしている事にいち早く気付いた本名不祥は、自分から逃げるフリをして屈辱的敗北を土御門に与えた。

「確かに殺すなら準備しておいた方がよさそうだ」

悔っていた訳ではないが、負けた。その事実が戦略的にも戦術のセンスでも彼女が上である事を意味する。

悔しそうに舌打ちすると土御門は冷たい世界から外の世界へと戻った。

「……困ったな」

「うん、私も困った訳よ。とりあえず近くに何があったか思い出せない？」

「ああ、近くに大きな公園があった」

「公園、か。地図で調べるね。えっと、木山春生さんでいいんだよね？」

フрендаより長身の彼女、木山春生は頷いた。

「ああ、よろしくフレндаさん」

「年上から“さん”はこそばいからフレндаでお願いする訳よ」

「そうか、次からはそう呼ばせてもらおうよ」

所々跳ねた茶色い髪を靡かせ木山は当たりを見渡す。

「さて、駐車場はどこだ？」

「普通、停めた駐車場を忘れないっての」

「この間、そんな事言われたよ君より少し年上の子にね。次会う時は車を無くしてないない状態と約束したのだが、先行き不安だな」

「しょっちゅう無くしてさ迷ってんの？」

フレンダの呆れた表情に木山は本当に困ったように頬を掻いた。

「いや、今年初、車をなくして何故か立て続けだ」

「はあ、今日は厄日って訳だ。それじゃ一番近い所から行ってみま
すか！」

「元氣だな。若い証拠だ」

二人の奇妙な巡り合わせは一体なにを意味するのだろうか――――

三日目（後書き）

寒いなあ、布団から出たくないなあ。

朝なんて永遠にこなくていいのに。

質問です！

皆さんの好きな“とある”キャラは誰ですか？

自分はオルソラです。

頭の帽子？を取ったオルソラが大好きだったりします。

過去の残滓

「ここは、どこだ？」

木山春生は迷っていた。うっかり踏み入った裏道は、複雑でさっきから同じ所を行ったり来たりしているのではないだろうかと思ってしまうほどだ。

「……………しかし、見間違いか？」

辺りを見渡すが灰色の薄汚い世界が広がるばかり。

仕方なく移動を開始するもさらに迷宮に迷い込んだように出口から程遠くなった気がした。

本格的に危険を察知した木山はどうするか悩む。下手に動かない方がいいのだが、早く出たい。しかし動くと更に迷う。

腕を組み打開策を模索するが、出た結論は――――

「偶々通りかかった人に助けて貰おう」

実に他力本願なものだった。だが、一番いい対策といえるのが悲しい。

そんな事を実行して五分。

小柄な天然の金髪少女が目の前を通過して行くのに声をかけた。

「ちょっとすまない、その君！」

「はい？」

「道に迷ったんだ。出口を教えてくださいませんか？」

振り返った少女は呆れたように溜め息をついた。

「いや、道に迷ってこんな所まで来るって、どんだけ方向音痴な訳よ」

「昔の友人を見かけて追い掛けたら途中で見失ってな。ついでに道に……」

「結局、迷った訳ね。まあ、出口なんて沢山あるけど表に出られたらどこでもいい？」

その条件に木山は頷いた。

「よろしく頼む」

そして表通りに出て、最初に戻る訳だ。

「ついでに車の場所忘れるって本当に学者さんな訳よ？」

「そこは関係ないだろう？それでも立派な学者だよ」

「二個空振りしてるから愚痴も言いたい訳よ。大きいと言うけど、どのくらいの規模？」

暫く木山は考え込むと思い出したように声を漏らした。

「あ……。確か池があった」

「それ物凄く大切な特徴！えっと、ボートとかあった？」

「ああ、とても池は大きかったからね。あったよ」

早速フrendaは携帯で検索すると、それは案外近くだった。

「結構近くみたいな訳よ。さあ出発！」

「ふふっ……。若いなあ」

また木山の手を掴み走り出したフrendaの無邪気さに、昔を思い起こした。

教鞭を振るい友に悩みや子供の事を話したりした、あの一番輝いていた色鮮やかな記憶。それは木山の胸の内を酷く重たく、針で突い

たように鋭い痛みを伴わせた。

今の自分にそれを語る資格はない。あの忘れられない事件で大切な生徒達を無くし、唯一無二の親友を殺してしまった自分には、泥沼の道が相応しいのだ。

「眩しいな……」

――これでは麦野さんの事を笑えんな

同じように罪過に悩まされ光を拒んだ彼女は、罪を指摘されるのを何よりも畏れている。だから闇に手を伸ばしたのかも知れない。

総ての常軌が逸した世界は何者からも罪には問われないが、それを受け止めてくれる人もいないのだ。

しかし罪を見つめ、受け止めてくれる人に巡り会った麦野に木山は幸せになって貰いたいと切実に願っていた。

彼女がどんな罪を背負ったかは知らないが、光に触れ、その世界の息苦しさに戸惑い迷う姿は一瞬で分かった。

それは自身にも覚えがあるからだ。

「どうしたの？」

意識の全てが持って行かれていた木山はフレンドの心配したような声で我に返った。

「済まない。考え事をしていてね。フレンドはアイスは好きかい？」

「もちろん、女の子だし好きな訳よ」

「そうか、御礼に買ってあげるよ」

「やったー!」

子供のようにはしゃぐフrendダは見え始めた公園に駆け出し、木山はそれをのんびりとした歩調で追い掛ける。

木山が公園の入り口に入る頃にはフrendダは既に噴水近くのベンチに座っていた。そこで何やらコピー用紙と睨み合いをしているのを目尻に、近くの売店にあるアイスの一つ買った。

「なにを熱心に見ているんだい？」

「ひゃっ!？」

かなり熱心に見ていたのだろう。木山が近くに来るまで気付かなかったらしく、声を掛けると驚いて持っていた紙を何枚か落とした。

「驚かせたか？はい、アイス」

「ありがとう」

フrendダが落とした紙を全部拾い上げた木山は最後の一枚を見て、頭の中が真っ白になった。

忘れもしない過去の残滓がそこにはあった。

朝ご飯を終えた上条達は進展のなさに唸った。刻限は後二日。まだ時間はあるが残り少なく、それが面々を焦らせた。

作戦を指揮する絹旗には精神的に二人より重荷になっているのは確かである。

「麦野の能力に超関係ある施設は全部回りました。……でも」

「居なかったね。きぬはた、機材とか用意しようと思えば出来るから広さで考えたら？」

しかし上条はその考えを一蹴した。

「ごめんけど滝壺、どれもデカいんだよ。流石、学園都市全てを舞台にした宝探しと隠れん坊だ」

「どうしましょう。確かに能力研究だなんてやろうと思えば超何処でも出来ますし」

頭を抱えた絹旗に上条と滝壺は背中を優しく叩いた。

「大丈夫だって。まだ時間はあるんだ」

「そうだよきぬはた。頑張るきぬはたを私は応援してるし、助けになれるから」

「確かに超駆けずり回るウニ頭より滝壺さんはかなり助けになりますね」

「行動力も立派な戦力だろ！」

棘を隠さず上条を貶す絹旗との間に口喧嘩の嵐が巻き起こる。それを滝壺は急須にお湯を注ぎながら眺めた。

急須でちょっと蒸らし色づいたお茶を釜で焼いた湯飲みに注ぐ。湯茶の豊かな香りを感じながら一口啜ると、体の芯から温かくなる。

まだまだ続く歳の離れた兄弟喧嘩のような光景を見ながら滝壺は目を細めた。

「いい加減にしないと怒るよ？」

微笑ましいのだが、何時までもやってはいられない。怒る気はないが、咎めるとさっきまで元気に喧嘩していた二人は身を縮めた。

「ごめんな滝壺……」

「超すみませんでした」

「うん、気を取り直して頑張ろう。で、やっぱり条件としては広く

て人のいない所がいいよね？」

「それは必須ですが、超人気のない施設が大半ですよ」

「質問なんだけど、なんで人気がない方がいいんだ？」

緻密に議論を交わしていた滝壺と絹旗が互いを見やり、そして上条に視線を戻すと、長く呆れた溜め息ついた。

「ちよっ！なんだよその反応は！？」

「いや、だって超今更過ぎますよ」

「でも上条はこっちの人じゃないし、仕方ないのかな？」

素直に毒づく絹旗より、どこか妥協した滝壺の対応に上条は精神的ダメージを受けた。

「なんだか俺って不憫？」

「そんなことないよ。それより人気がない方がいいって説明なんだけど……」

「本名不祥のやる事は学園都市の能力開発に関わる事ですが、特にその分野に対して科学者達は超非公開にしたがるんですよ。確かに超合法的な研究とかしたりしますが、根本の理由は他の科学者達に研究成果をかすめ取られたくないんです。多分、本名不祥もそうなんですよね。LEVEL5と言うだけでDNAだけでも破格の価値で、それを求めて裏では血生臭い争いとか起こってます」

その後に滝壺が続ける。

「むぎのもLEVEL5。そうになると下手に非合法な事をすれば後ろ指を指されるし、学園都市の宝を独り占めしたことを悟られないようにするなら、必然的に人がいない場所になるの」

「それに部外者が超不用意に入ってこれない場所、つまり人が沢山居るような所を住処にして、もし私たちが居場所を超特定してしまったら、困るのはどう考えても本名不祥です。あの女狐はそんな下らないリスクを犯すこと無いんじゃないんですか？」

なるほど、と上条は頷く。どれも利に適った事だ。

「なら、半分は今人が使っていない施設や研究所なのか」

「そうなります」

絹旗の肯定に、不意に部屋は静まり返った。

沈黙に耐えられなくなった上条が頭を掻きながら唸る。

「だあああああっ！！結局、ヒントは麦野の能力についてかよ」

「〈原子崩し〉の能力だと粒子や電子、素粒子研究所。でもむぎのはいなかった」

「麦野の能力は超応用が利かないから絞り込めたんですけどね」

また意気消沈し始めた時、不意に絹旗の携帯が振動した。

「フрендаからですね。超下らない事でしようけど。………はいはい、何ですか？」

「聞いてよ絹旗！本名不祥の知り合いを見つけた訳よ！」

それは突然舞い降りた朗報。今の絹旗たちにとってフрендаのもたらしたそれは最後の希望だった。

「迎えに行くから待っててほしい訳よ！」

「分かりました。超早く来て下さいね！」

するとフрендаは電話口で誰かに声をかけた。

「木山さん早く来てほしいって……」

「仕方ない。舌を噛まないように気をつけなさい」

「え？ま、待って、うぎゃあああああッ！！！！！」

なぜかフрендаの断末魔を最後に電話が切れ、変な静寂が三人を包んだ。

「なにがあった最後？」

「さあ？」

本当になにが起きたか分からないが、本名不祥に繋がる確実な糸を手に入れた事実が、絹旗の気持ちを軽くした。

「なににせよフレンダも超偶には役に立つてことです」

「うぷっ……酔った訳よ……」

「大丈夫か？」

げっそりと顔色の悪いフレンダの背中をさすりながら木山は路地裏に膝をついた。

フレンダはフラフラと立ち上がり何とか歩く。

木山も立ち上がり肩を支えてやるとフレンダは長く息を吐いた。

「ああ、死ぬかと思った」

「あれぐらいで酔ったのか？」

「警備員とカーチェイスアンチスキルしといてよく言うわ。結局、逃げ切ったア
ンタはすごい訳よ」

フレンダはついさっきまでの地獄絵図を思いだし慌てて口塞ぐ。でないと言の中身が逆流しそうだからだ。

「君の家はどこだい？」

「あー、あそこ」

「分かっていると思うが、私が木原の事を教えるのは君たちが何故、死んだ彼女を調べているのか教えてからだ」

「その決断下すのは絹旗ってやつな訳よ。だから私に聞かないでぶつきらぼうに答えたフレンダは隠れ家の扉を開く。

「滝壺！準備出来てる？」

「お帰りフレンダ。二人共行くよ」

「ああ、絹旗忘れ物ないだろうな？」

「超大丈夫ですよ。お待たせしました」

姿を現した上条に木山は四日くらい前、麦野と一緒にいた人だと思いき出した。

「やあ、麦野さんは一緒じゃないのかい？」

「あ！あの時の」

上条にとっては思い出したくもない事件の人物に開いた口が塞がら

なかった。

しかし『アイテム』の皆は木山の口から麦野の名前が出てきた事に驚いた。

「あの時はすまなかった。あの後で麦野さんに説教されたよ。次からは多分ないと思う」

「是非なくして下さい。えっと上条当麻です」

「木山春生だ。よろしく上条君」

そうして、上条達は木山の車に乗り込む。

最初はその車に驚いたが、運転する木山の手慣れたハンドル捌きを見て、フレンダ以外の三人は感嘆した。昔本で読んだ“誰しも特技と美点はある”と言う一節を上条は思い出す。

しかし、時に長所は短所にも繋がることを上条は知る羽目になる。

出来事は唐突だった。いきなり対向車線を走っていた警備員の車が、こちらに向けて怒鳴ってきたのだ。

「見つけたじゃんよ！今度はさっきみたいな姑息な手はくらわないじゃん！！」

「見つかったか。捕まりたくないから、全力で逃げるけど大丈夫か？」

「逃げられるなら超なんでもいいです」

絹旗は後にこの台詞を言わなければ良かったと後悔する。

木山はギアチェンジするとアクセルを深く踏み、車のスピードが跳ね上がった。

重力により上条たちの体は無理やり背もたれに押し付けられ、ぐぐもった声しか出なかった。

そんな状態で木山は目まぐるしく車線変更し追ってくる警備員の車から逃げる。

第二次カーチェイスの幕開けに四人は引きつった。フレンダは泣き出しそうになって滝壺の服の裾を強く握った。

「木山さん、大丈夫なんですか?!」

「心配するな。今まで違反切符は切られたことない。百発百中逃げ切れた」

「それって全ての意味で超自慢出来ないです!!」

「うえっ！死んだ……」

「た、滝壺さんが返事をしません」

「いやあ、流石に二回目は慣れた訳よ」

上条がギリギリ生きているが滝壺はもう指先も動かなくなっていた。

「さて、ここが私の使う研究所だ」

「いやいや、無理に進むなよ！」

「あまり車に乗り慣れてないのか？」

至って普通の木山は車酔いした三人を不思議そうに見つめた。

「乗り慣れてますが、超ハイスピードでの乗車には超慣れてません」

「うう………」

「滝壺が起きたぞ！」

「超大丈夫ですか滝壺さん？」

うつすらと目を開けた滝壺な真っ青な顔で絹旗を見た。

「きぬはた、ごめんね。……わたし、もう……無理みたい。……だから………」

「なに弱気になってるんですか!？超これからだって時に」

必死に滝壺の意識を繋ぎ止める絹旗に、彼女は最後の力で微笑んだ。

「本当に、ごめんね。………出来ることなら、…みんなと一緒に良かったけど。………お休みなさい」

「起きてえええええ!超今から本名不祥^{コードエラー}について話を聞くんですよ
おおお!!?」

「ぐーすかぴー」

「あーあ、結局、こうなったら滝壺は梃子^{てし}でも動かない訳よ」

絹旗の説得も虚しく滝壺は深い眠りについた。

その光景を見ながら木山は頭を搔く。

「私の仮眠部屋を貸そう」

「俺が運ぶよ。ほら絹旗、もう滝壺のこと諦めろ」

「超仕方ないです。本当にもう」

上条はすっかり寝てしまった滝壺を背負うとそのまま木山に促されて研究所に入る。

そこまで広くない施設だが木山の部屋は特別大きく、隣接する仮眠室に滝壺を寝かせると、フレンダと絹旗は既にソファ―に座り木山

はコーヒーを四人分持ってきた。

上条に適当に座るのを促すと、木山は向かい合うように座りストッキングを穿いた脚を組む。

「さて、私からの質問なのだが。木原の、木原神無について君達は何を知りたい？」

「それは」

「待ってくれ絹旗。これは俺が説明する。これは俺と本名不祥のゲームだ。……木山さん、俺達は貴女の言う“木原神無”が“本名不祥”だと認識しています。俺が本名不祥を知りたいのは、ソイツが麦野に能力開発を強いてるからです。公式の能力開発でしたら、こんな事をしませんでしたか……」

「なるほど、木原いや本名不祥は麦野さんを……。彼女は……やはり生きていたのか、因果はまだ切れていなかったか」

「教えて下さい木山さん。俺は麦野を助けたいんです！」

だが、木山は険しい表情して組んだ指を唇に添えるように持ってきた。

「しかし非公開なら、君は死ぬことを覚悟したほうがいい。公式の実験も偽れば人を殺せるが、非公開ならさらに簡単だ」

「頼む！俺は死に行くんじゃない。麦野を助けに行くんだ」

なんとしても助けたい。その思いが上条からありありと伝わってく

る。しかし木山は思い悩んだ。

もし本名不祥が、木原神無がまた過ちを犯そうとしているならそれを止めるべきは自分ではないのだろうか？だが、会って彼女に何を伝えよう。

つまらない意地を張っていると思う。麦野が関わっている時点で、情報を提供しなければならぬ筈だ。

しかし重たい蓋が彼女心を塞ぐ。

「君が麦野の救いたいのは分かった。しかし、時間をくれ」

「無理は言わねえ、だけど俺達にも時間は無いんだ、今夜までに決めてくれ」

「ありがとう。好きに寛いでくれ」

そう言って木山は別の部屋に姿を消した。

彼女は個室に入ると一冊のアルバムを取り出す。懐かしそうに表紙をなぞり、悔しそうに唇を噛み締めた。

「生きていてくれたんだな」

そこに挟まれた手紙を取り出し、黙読する。内容は遺言書のような物だった。

過去の残滓（後書き）

とあるが12月で新刊を出すらしいですね！表紙は誰だろうか？

てか誰メインのお話になるだろう。

いつか皆さんに、アンケートと言うか質問をする時が来ると思います。正直、悩んでいる部分があるので。

あと1ヶ月とちょっとしたらクリスマスですね。皆さんがサンタさん信じなくなったのは、いつですか？

因みに自分は小2くらい。

過去の因果律

懐かしくて、物悲しく。暖かくて、酷く冷めた昔の出来事。その出来事の始まりの点が木原神無なら、その災厄に終止符を打ったのもまた彼女だった。空気を掴むことができないように、彼女を体現することは不可能とさへ思われる。

初めての出会いは、とても在り来たりなもので私は直ぐに木原神無のことなど忘れてしまおうと思っていた。研究者として走り出した自分は、個人での研究を許されていなかった。最初は新米研究者とそこそこの実績がある先輩とでも言える研究者とペアを組み共同で全てをやっていくというものだった。

研究と言っても大層な物ではなく、殆どは過去の結果を紐解き理解し、纏めるというのが主流だ。本当に研究よりも“昔の人物の足跡を踏む”という感じである。しかし、そんな事をするはずだったが、幸か不幸か私、木山春生はそんな在り来たりや主流をゴミ箱に捨ててきたような人物——木原神無とペアを組む事になっていた。

子が親を、親が子を選べないようにこの時の私はそのことに対して、拒否する権利もペアを好きに決められることも出来なかった。しかも木原神無自身が私を指名していたことに後から驚かされる。

最初の挨拶は、よろしく程度だった。あっさりとして、最低限喋らないような人かと思っただけ……

「色々と挨拶を準備してきたんだけど、緊張して忘れちゃった。普段、他人と話さないからねえ」

他人との交わりが極端に少ないらしい。私も交友関係や人との繋がりには希薄で定かではないが、挨拶程度で緊張するほど閉鎖的でもない筈だ。となると彼女は誰かと何かをすることも初めてなのだろう。何気なく聞いてみると木原神無は恥ずかしげも無く淀みなく肯定した。

小さい頃からその才能を揮い部屋に引きこもり新たな法則を見つけることに幼少時代と中高生時代を費やし、気が付けばもう二十代でありながら他人との接点が無かったらしい。ついでに言うと、事務的なもの以外で話すのは私が初めてとのことだ。

だからなのだろうか？彼女は私に滅法甘く、そして厳しかった。厳しかったのはその最初の研究だった。通常を無視して木原神無は文字通り私に研究と言うものを突きつけた。

「聞くけど、木山さんって何を研究しにこの役職になったの？」

だが、何を研究するかは私に決めさせてくれた。

「はあ、A I M拡散力場です。それが？」

「なら、最初のお仕事それね。私はオマケで木山さん、君がメインでA I M拡散力場の研究をするよ。解明されてない不可思議な分野だからやること多いだろうねえ」

悠々とした彼女は自分なりに調べた事があるのだろう、A I M拡散力場の資料や現在解明された部分を渡してくれた。

「でも私を極力頼らないでねえ。困った時の対処って言うのは教え

てもらおうんじゃないくて、自分で探すものさあ」

しかし、こんな所が厳しい。まだ木原神無、本人が手を引いてくれるうちから私を一人でやっていけるスキルを身につけさせるらしい。彼女には悪いが、私はずっと一人でやって来た。この程度、造作もない。と、思い込んでいた。これは私の過失だ。慢心があったのは大いに認めよう。

研究を初めて二週間、私は躓いた。

AIM拡散力場とは簡単に言ってしまうえば、能力者が出すとても微弱な力であって、それだけだ。

なにか法則があるわけではない。なにか意味があるわけでもない。つまり自然に発生した歪みとも言える。

能力者なら当たり前すぎて、論じる事も馬鹿馬鹿しく感じてしまう分野だろう。

不可思議であるが、調べて知るには無意味だと言われた分野でもあった。

完全に手詰まりな私に木原神無は懐かしいものを見るような瞳で、私を見ていた。

そして、安物の固い椅子に腰を掛けコーヒーのカップを差し出した。私が大人しく受け取ったのを嬉しそうにしていたのが印象的だった。彼女が差し出したら皆逃げたり拒んだりしたのだろうか？

そして二人でのんびりコーヒーを飲みながら語った。話し出したのは木原神無から。

「私はこの研究と平行して“自分だけの現実”について調べているんだ。AIMと同じくらい、不可思議でありながら当たり前な存在さあ。能力の源でありながら、未だ正確に解き明かした者はいない。もし、解き明かしたらLEVEL5以上が産み出せる。私はそんな夢物語を信じて研究してるの」

「研究や学者なんてそんなものでしょう。昔は地球が太陽の周りを回る事が絵空事だった時代があったんですから。私達は1を知るために10の可能性を殺す生き物です」

「あつは！面白いこと言うねえ。1を知るために、か。確かに知らなければその事象には無限大の可能性が宿る。夢でありロマンだねえ。千変万化をたったの1に引きずり降ろしているのは、間違いなく我々学者や研究者だよ。……だからこそ道のりは遠いんだ、急ぐのはよくないよ木山さん」

ハッとした。ここ最近、きちんと眠った記憶がない。相当、無理をしていたらしい。

そして見透かしているのか彼女、木原神無は私にヒントをくれた。

「AIMは共鳴と言うか、同じ能力者に触発される事例があるんだ。有名なのが、空間移動系が近くに二人いたら、その空間移動系の人には能力が使用不可になる。AIM拡散力場がお互いに干渉しあう説が一番だから、その辺りから調べたら？AIM拡散力場は私の知りたい“自分だけの現実”に繋がるヒントだし。君がその専攻になる

なら、心強い」

微笑みを浮かべ彼女は私に手を差し伸べた。私にはそれが天啓に思えた。

彼女とならやっていける。恐らく人生で出会う最高の人物だと、その当時の私は盲信したのかもしれない。

木原さんとなら大丈夫。

よく分からないが、彼女が素晴らしく見えた。今でもそう思える部分があるが、彼女は一途すぎた。

飽くなき新発見の欲求の為なら、彼女は人を道具として扱う面もあった。その時は特に何も思わなかったが、今思えば彼女は人を人と認めてはいなかった。一部を除いて。

「使えないなあ、やはり同じ能力の生産は無理か。私の能力では人数限定だし。もう下げていいよ」

「ですが、もう少し……」

「見て分からないのかい？私が望む成果ではない。こちらで調べている能力が、かなり貴重な能力でねえ。それに目をつけたお偉方がその能力を生産が目的でやった実験だ。仕事は生産の糸口を探すこと。でも不可能だと知れたんだ、いらないんだよソレ」

最初、木原さんが何を指しているか分からなかった。私と木原さんが使う研究室に入ってきた男は食い下がると、すごすごと部屋を退室した。

木原さんは何事も無かったように自分のメインの研究を進めていった。

気になった私は聞いてみることにした。

「何を研究しているんですか？」

「ん？ああ、聞いたと思うけど同じ能力の生産。人為的に能力を造ろうってねえ。つまり演算パターンと“自分だけの現実”を植え付ける実験から初めてみたんだが、機械では無理だったよ」

薄ら寒いものが背を這っていくのが分かった。AIM、脳波、極めつけに“自分だけの現実”それを研究するには頭を切り開いたりする場合がある。

今回はそれを行う大規模な実験ではないだろうか？

しかし、実らなかったからと一蹴した彼女は気にした風はない。

被験者はどうなったのだろうか？私の頭の中はその疑問で覆い尽くされた。

しかし彼女が気にしていない所を見ると大事ではないのだ。そう思った。

いや、思い込んだ。そうしなければ、潰されそうだから。

その時、部屋の電話が鳴った。近かった木原さんが電話を取る。

「ああ、じい様か。あん？……いるけど……。なにすんの？……いや、まあだけどさあ」

やけに渋る木原さんは一度私を見ると、足元に視線を移し、思い悩むように額に手を置いた。

「しかし彼女にだってやることはある。じい様には悪いが駄目だ。専攻科目を優先させるから」

何かを拒んだが、しかし電話の向こうの言葉に木原さんの表情は歪んだ。

「でも駄目。私は譲らないよ」

それから長く二人は話し合った末に、電話をかけて来た方が引いた。だが、木原さんの表情は険しいまま机を睨みつける。自然と訪れた静寂はこの日ずっと続くことになった。

それから歳月はいくらか過ぎ、私の才能と研究は認められるようになり始め、神無は私の成長を一番に喜んでくれた。もう酒が飲める私たちは部屋で飲みながら、今までのことを思い返す。

「君も立派になったねえ。もう教えることはないよ」

「そうか？ 私はまだ神無には及ばないと思うが」

「学者、研究者としての時間が君より長いからねえ。顔の広さならまだまだ私の勝ちさあ。でも春生も主任を任せられたりとかするんじゃない？」

神無の言葉に私は寂しくもあり、嬉しくもあった。彼女から巢立ち、一人前と認められたことが頬を緩ませる。前は木原神無主任の研究チームとして名を馳せたが、今では一個人として信頼が得られた。言っただけだが、自分はまだ若い。そんな私が世間や社会に認められたのは、支えてくれた神無のおかげだ。

「どうした、ニヤけてるぞ」

「いや、昔を思い出してね」

「まだ若いだろうに。そうそう、一人前になった記念に何か食べにでも行くかい？」

しかし私は申し出を断った。何故なら、そんな時は自宅でこんな風に祝ってもらいたいからだ。二人で思い出を語り合ったり、これらについて漠然とした希望でもいい。そんなゆっくりとした時間が欲しかった。

神無は苦笑しながら了承した。

「なら、その思い出について語るか。私が最初、春生を選んだのは才能があったからさあ」

「そんな冗談を」

「本当にそう思ったんだ。でも接して分かったのは才能だけじゃなくて君は優しいよ。そして我慢強い。私はねえ、隣に並ぶ人を選んでしまう人なんだ。だから、大変失礼な言い方だが春生は結構まともじゃないかもねえ。こんな私と年単位で付き合えるんだから」

語る声が妙に無機質で、私は歯がゆい思いをした。

返す言葉が出てこない。

「ねえ、これからは私の了承を取らなくていい。春生はどこの研究者の下につく？」

神無は私の気持ちを他所に話題を変えた。そのことについて、最近私も思うところがあった。

私の行くべき道と神無の歩んでいる違う。見習いから巣立ちしたのだから、私は新たな場所を見つけなければ為らない。いつまでも専攻と違う研究所には居てられないのだ。

「誰の所か分かんが、神無とはもう同じ場所に居られないだろうね。私にも行くべき道がある」

「ふふふ、だろうねえ。学者なんだから当たり前か。……学会で会うの楽しみにしてるよ」

「気が早いと思うが」

そして私と神無の最後の飲み会は静かに終わった。

それからは二人してめまぐるしく忙しく、のんびりとした時間が重なることはなかった。私は“木原幻生”という人物の側近的存在になっていた。今思うと、名前に同じ漢字が使われていることが非常に遺憾である。

神無は専攻の研究ではなく統括理事会からの要請で特殊な機器を造

るため第一八学区・霧ヶ丘女学院の近くにある素粒子工学研究所に派遣された。そして私にとっての悪夢の事件まで彼女は帰ってこなかった。

“置き去り（チャイルドエラー）”の教師に抜擢され、私の日常は大きく変化した。その時から私は神無にメールや電話が出来なくなるくらい忙しくなる。仕方がないと、彼女は笑ってくれた。

子供は嫌いだ。馴れ馴れしくて、デリカシーがなくて、論理的じゃないし、直ぐ懐く。

連絡が取ればそんな愚痴を話したり、お互いの近況を打ち明けたりした。しかし神無は一点について譲らなかった。

「君にデリカシーがないとか言われても困る。暑いだけで服脱ぎだす奴に言われたらマジギレするぞ」

「エコじゃないか」

「うん。モラルって大切だね。だから白昼堂々道の真ん中で服脱ぐな。春生にデリカシーがどうか言われたガキが逆に可哀想だよ」

結論、子供より私の方がデリカシーが無いとのこと。

何故だ、納得いかない。そう思うのは私だけだろうか？

離れても、こんな他愛無いやり取りをしたものだ。

あの日が来るまで

いつの間にか私の大切な生徒になっていたあの子たちが、目覚めなくなつたあの日。私の世界は色を失つた。いや、光が消えた。信じていると言つてくれたあの子を裏切り、私は生きている。そのことが私の心を引き裂く。そして神無が言つた言葉に、私は絶望した。

「君はあの子達が捨て駒だと知って成長過程を調べていたんじゃないのかい？」

なんだそれは

どう言うことだそれは！！！！まさか私たちはあの子達が死ぬと解っ

ていながら、使い捨てにしたのか!?

昔の見る影をなくしたくらい憔悴した私に神無はそう言った。彼女が私の前に姿を現したのは、あの出来事から大分経っていた。

そして私と神無は決別した。私から一方的に罵り、罵倒し怒りをぶちまけ、神無はただそれを聞いていた。黙って聞いて、私の口から言葉が出てこなくなると目を閉じゆるゆると首を振り平坦で冷たい声で囁く。

「やはり、君には学者は向かないね。特に学園都市の学者なんて駄目だ。だから言ったのに、じい様め。木山春生どうやら君と私は見ている風景が違うようだ。……じい様も君の才能を認めこの実験に精神的ダメージが少なければ、学者として道は無限に広がっただろうに。“無駄な感傷”をしたね」

その時、私の中の何かが崩壊し、後を覚えていない。ただ覚えているのは神無、アイツのどこか決意したような表情だったことだけ。

それか私と彼女は互いに会うたびに罵り、怒りと憎悪を増幅させていった。いつしか、私にとって木原神無は憎い敵のような存在として確立された。

そして生き残った生徒を回復させるため、私は樹形図の設計者の使用許可を求め何度も申し込みをすることとなる。

そのことに時間を費やしていると、とんでもない事件が私の耳に飛び込んできた。

それは――――

木原神無の死亡。彼女は自身の能力の実験を失敗させ、死んだ。

あれだけがみ合ったせいだろうか。私はなんの感情も出てこなかったのだ。ただ、死んだか、その程度。

しかし、思いもしない結果が転がり込んできた。それは全て、木原神無が仕組んだ最高の戦略だった。

「な、どうしてこの子達が！！」

「木原神無様の能力テストのモルモットでしたが、もう要らないので彼女の意味により貴女に相続権が移り、専用装置一式とそれに見合う広さの施設。ついでに申し上げますと遺言により財産の一部の相続が認められました」

私が無理やり連れてこられたのは、私の生徒が昏々と眠る施設。そして元は木原神無の所有していた物だったという。そして今この施設は私のもの。

おかしい。なぜこんなことが。罠か？

そう疑いもしたが、押しつけられるように渡された茶封筒の中には私に宛てた手紙が入っていた。

読み終え、全てを把握した私は、唐突に理解した。私は多くの大切なものを失ったのだと。私の不注意で生徒を失い、私の勝手な思い込みで親友を殺してしまった。

寝ていたらしい。つまらない夢を見てしまった。

懐かしくて、物悲しく。暖かくて、酷く冷めた昔の思い出。神無との出会い。そして別れ。

体を起こすと紙が擦れる音がした。夢の最後で読み上げた、手紙がそこにあつた。目の前のものは、ずいぶんと古びていた。

春生へ

月並みで申し訳ないが、君がこの手紙とも遺言書とも区別が付かないコレを読んでいるということは、私は死んだらしいね。

全てについて謝ろう。君の生徒を使った実験も、私が身勝手に行つた実験のことも許して欲しい。しかし私は君が死ぬんじゃないかと恐れていた。吃驚するくらい憔悴した君を見て思ったよ。彼女には

人生を賭してでも撃つくらいの敵が必要だと。そうすれば復讐心から憎しみからでも君は生きていく。いや、人なら誰しも生きようとしただろうね。

だから会うたびにあんなことを言った。もう友人を名乗らない覚悟で私は君を傷つけた。これに関しては許さなくていい。

ついでに私が死んでも悲しまないならそれに越したことはないと思っていたしね。

さて、次からは私が行う実験についてだ。春生も知らないだろうが、私の能力でもしかしたら君の生徒さんを目覚めさせることが出来るかもしれない。これは私の真の目的で、表向きには能力実験として伝わってるはずだ。能力については伏せるが、その可能性が浮上したから試してみることにした。

でも、失敗したらしいね。ごめん。木原の罪科は木原が背負い生きていかねば為らないのだろうが、生憎と我が一族は総出で狂ってるから、この子達を目覚めさせる木原の人間は居なかったよ。だから全てを君に託す。

最後まで情けなくてごめんなさい。貴女ならきつとこの子達を救えると信じています。

木原神無より

悔しくて涙が止まらなかった。悲しくて慟哭が衰えなかった。

でも、後戻りも立ち止まることも出来なくなった。親友の最期の願いであり自分の悲願でもある。

記憶の中の懐かしい声が胸の内側に染み込む。まだ果たせてないが、もう直ぐ悲願は叶う。そのためにやってきたのだ。

しかし、また彼女がとんでもない道に足を踏み入れている。寄り道をしている暇はない。だが上条当麻に託すには気が引ける。どうどう巡りだ。

木山が悩んでいると、不意に仮眠室の扉が開いた。まだ眠そうにしている滝壺が木山にお辞儀すると当たり前のように隣に座った。

「どうした？」

「うん。きやまさんは話すか決めた？」

「難しい問題だ。私の言葉で彼や君たちを死なせるわけにはいいかな」

部屋に入ってくる夕日が妙に赤かった。

「逃げないで。過去から逃げないできやまさん。またきはらさんを犯罪者にするのが怖いのは分かる。でも私たちには時間が無いの。約束する。ちゃんとむぎのを連れ帰るから」

しっかりとした眼差しに木山はどこか諭されているような気がした。

「私にとって神無が大切なように君たちにとって麦野さんは大事な

人なんだね」

「うん、特にかみじょうにとってはとても大事な人」

滝壺の言葉で大体を把握した木山は面白がるように笑った。

「そうか、なるほど。……分かった。私が知りうる限りの情報を話そう。それに恐らく、神無は止められても麦野さんを救えるのは彼や君達だろうからね」

「ありがとう」

上条達が待つ部屋に向かって木山は歩き出す。その後を滝壺は追いかけた。

運命のピリオドは撃つために木山は目の前の現実を受け入れる。

過去の因果律（後書き）

雨が降ると節々が痛い。地味に痛い。

気圧の違いでそうなる人がいるとか。しかしとある人に

「それって老人の人がなるやつよ」

と言われてちよっとショックを受けた。ま、まだ若い筈！ W i i の
体力年齢なら20代なんだから！

そんなちよっとしたショックを受けた経験ありますか？

清算

世界には決まりごとがある。法律であったり、法則であったり。物理的なことから心理的なことまでと様々な決まりが存在する。しかし、その決まりを崩壊させるようなことが出来るなら、それは神でもあるし、災厄とも言える。つまり私が抱く能力者というものは、世界に対して最高の薬でもあるし、最悪の毒とも捉えられる。世界の決まりを大いに歪ませ崩す超能力者は特に。

人に例えるにしては強大で、神に例えるにしてはあまりにも脆弱な存在。どっちつかずの曖昧な彼女らは例えるなら化け物が相応だろう。誰にも理解されない自分だけの現実が大きく外の世界を侵食しているのだ。ある意味能力者は精神疾患や異常者と言われることに納得できる。

自分だけの世界。それが他者と交わる為の世界に具現しているのだから。

あつてはならない事だと思う。だが興味が引かれるのは確かだ。まだ見つからない決まりごとが見つかるかもしれない。さらなる発展と発見が尽きないこの世界で私は無限の可能性をただの1に引き摺り下ろす。

そうすれば私の知りたい“自分だけの現実”が何なのか解る日が来るだろう。

すっかり日が沈み月が輝く夜。静かに語る女性の声が止まった。

「これが私から見た木原神無、君達から言えば本名不祥の過去だ」

しかし木山一部分は多少脚色したり言わなかった。

必要なのは木原神無についてだけ。自分が研究に失敗してそこから色々と破綻したと伝えた。置き去り（チャイルドエラー）については触れていない。

上条達は濁した事に訝しるが木山は最後まで無視を決め込んだ。

「本名不祥コードエラーについてよく分かりました。……次は、彼女が取りそうな行動を教えてください」

「彼女の行動にはそれ相応の意味がある。つまり根元が分かれば一発で分かるが分からなければ、恐らく永久に理解不能だ」

簡潔に纏めて伝えると絹旗は唸った。

「超極端な人ですね。相応の理由、難しいです。だって私達、理由に値する麦野の能力に関する研究、施設は全部回ったんですよ」

「……なるほど、神無のやつ相変わらず手癖の悪い事を」

「何か分かりましたか？」

理解したのだろうか木山は気怠げに昔を思い起こす。彼女は心理戦に滅法強く、よく人を負かしてきた。

そして木山は内心で囁く。

神無はゲーム盤を舞台とした遊技、若しくは戦略を練っているだろうな。

「君らは一つの執着したイメージに捕らわれるように仕向けられている、例えば麦野沈利の能力と言う項目だ」

賺さずフレンダは食いついた。

「つまり騙されてたの？」

「いや、騙してはない。裏をかいたやり方を選んだだけだろう。昔のデータや機材を使うような実験するのは珍しい事だ、木原神無にとってね。彼女の事だ大方A I M拡散力場か“自分だけの現実”の研究、もしくは能力の新たな有用性に気が付いたとか、その辺かな？」

「その自信は？」

「直感だよ。君らにわざわざゲームを仕掛けたんだ。見付けて貰いたいし、見つけなくてもいいと考えてると思う。進むべき道へ至る手段は多い方がいいと彼女は常々言っていたしな。君らは本命でありながら保険と言うわけだ」

「でも……その手の研究所も施設も超多いですよ。どうやって……」
的確な事を言われているのに漠然としていて絹旗は言い淀む。

それには木山も同じように、決定打が無いことに不安の色が滲む。

「こればかりはどうしようもないな。神無は麦野さんの何に可能性を見出したのか、それとも別の要因か」

最後の扉は固く閉ざされ、その壁の向こう側にある答えに辿り着けない。

歯がゆさと、悔しさが入り混じった焦燥感はあるという間に部屋を満たした。

その中で今まで黙っていた滝壺は口を開く。

「こーどえらーは置いといて、むぎのを中心に考えたらどうかな？」

「なぜだ？」

その場の意見を代弁した木山は腕を組む。

「今、こーどえらーの行動理由はむぎのにある。だから、むぎのを中心に考えたら分かるかも」

「なるほど、一理ある。では、彼女の些細な変化でもいい。なにか知っている事を教えてくれ」

『アイテム』メンバーの視線が上条に向けられる。

直接麦野の異変とぶつかり合ったのは彼しか居らず、自然と皆の意識が集中する。少し驚いた上条だが、あの時、自らを原子崩しと称した麦野を思い出す。

「何でそうなったか分からねえけど、麦野は自分の事を原子崩しだと名乗ってた。でも麦野と原子崩しは別々なんだよ。説明出来ないけど、全くの別人なんだ」

「ふむ。精神の異常か……。ならば前頭葉に関わるような施設などだろうな。しかし神無がそれを視野に入れてなければ空振りだが。……その可能性も少ないだろう」

「どうして？」

「精神、というよりは恐らく麦野さんの状態は“自分だけの現実”の暴走状態だと思う。神無の死因は能力暴走による脳への圧迫が原因と言っただろう？詳しく知らないが、彼女の能力は“自分だけの現実”に作用するらしくてな。他の人よりその分野は秀でている。生前と言っているのか微妙だが、彼女は能力の源であるその研究特に暴走状態について調べていた節があった。麦野さんにその兆候が見られた、だから」

「調べるために麦野を誘拐したと。でもよくそんなこと出来ましたね。今更ながら本名不詳が超恐いです」

学園都市第四位。その肩書きは伊達じゃない。その能力の威力然り、有用性と有り得ない法則を使いねじ曲げた電子。

持ち合わせた全ての特異点はまさしく暴力に特化していた。

それを惜しげもなく振るう麦野はどんな能力者より危険で、手を出せば火傷なんて怪我ですまないだろう。

その麦野を手玉に取った本名不祥は侮れない筈だ。

「結局、見つけたとして円満解決になるのか不安な訳よ？」

「見つかる前に神無なら姑息な手を打つだろう。時間になるまで隠し部屋から出てこなかったりとか」

「体晶が無いのが悔やまれる」

「あつたとしても超極力使わない方がいいですよ」

「体晶、君はあんな劇薬を使っているのか?!」

今まで見たことがないくらい驚いた木山に絹旗はあからさまに渋い表情をした。

内緒の話をたまたま聞かれて不機嫌になったそれに近い。

「……」

「言えないか。しかし、使用するのには勧めない」

滝壺の動かない表情に木山は渋々引き下がった。この街の闇には嫌と言うほど思い知らされた。

木山では滝壺達の立場をひっくり返せない。だから潔く手を引く。何も出来ないのに偉そうに嘯みつくのは筋違いだと思ったからだ。

「心配してくれてありがとう。でも、ごめんなさい……」

「いや、怒鳴って済まなかった。嫌な思い出しかなくてな。つくづく私はそれと縁があるらしい」

自身を嘲笑した木山は痛みを堪えるように歯噛みして手の中をただ、ぼんやりと見つめた。

「神無の奴の行動を特定するために君達が持ってるデータチップを貸して貰いたい」

「いいよな絹旗？」

「うーん。背に腹は超替えられません、…よろしくお願いします」

木山は絹旗からデータチップを受け取るとパソコンに入れインストール終了を待つ。

その間に木山は問いかけた。

「このゲームが終わったら神無をどうする？」

「今は決められません。でも、下らない理由なんかで麦野に酷い事をしたなら、許すわけにはいかない」

一切の迷いを切り捨てた上条の言葉に木山は瞳を閉じた。

「そうか。君なら彼女を止めてくれるだろう。もう、私ではどうにもできんからな」

どこか木原神無と和解する事を諦めている木山に上条は表情を曇らせた。

本名不祥いや、木原神無を本当の意味で救えるのは、木山春生だけなのではないかと上条は考えた。深く絡み合った因果を清算出来るのは当事者の二人だけなのだから――――

その部屋には窓もなく何となく閉塞感を与える。空調は効かせてあるが、なぜか不穏な空気が溜まっていた。

その中でやけに絡みつくような抑揚のある声を響かせた黒髪の女はだらしなく頬杖をついていた。

「ねえ、原子崩し。君は何時になったら起きてくれるのかな？」

「はあ？起きてるわよ。ついに頭がイっちゃった？」

向かい合うように座る明るい茶色の髪をした大人びて思わず目で追いかけたくなる美しい彼女、原子崩しは露骨に馬鹿にしたように鼻で笑う。

「ふふ、酷いなあ。私は真面目に君の心配をしてるのに。このまま逃げられると私が困るんだよ『原子崩し』あまり使いたくない手段だけど、まあいいか」

原子崩しは着実に回復しつつある。本来の彼女の人格が滲み出てきているのが証拠だ。

しかし遅い。回復が遅すぎる。どうやら、上条当麻という光は“原子崩し”、麦野沈利の闇の代名詞を深く切り裂いたらしい。本名不祥が予想した以上に深く、麦野沈利と原子崩しを引き離した。

その事は本名不祥にはかなりの痛手で、全く面白くない。

「君自身が言わば“自分だけの現実”ならば、私の独壇場だ。原子崩しに麦野さん、鬼ごっこは終わりにしよう」

「ちょっと本格的に……ッ!？」

次の言葉を発する前に原子崩しの意識は泥沼に引き込まれた。

果てのない闇に堕ちていく感覚。それに身を任せ、辿り着いた先は、自分だけの世界だった。意識だけが存在する曖昧で不確かな世界。

「なんで、いきなり」

見渡す限り一面漆黒の世界は彼女産まれた場所。そして原子崩しだけが知っている場所だ。

一人分の世界に、二人目の足音が響く。

階段から降りてくるような足音。初めて自分以外が刻む音の方に振り返ると、本名不祥が“居た”。いや、“入ってきた”という方が適切か。

微笑みを浮かべ世界を見渡す。そして原子崩しに視線を合わせると、納得したように頷いた。

「前から君を例えるなら『虎』だと思った。手負いの獣。尊大な
プライド
自尊心に臆病で失敗を認めきれない羞恥心。それは元々、麦野さんの心だった。なのにそれが“自分だけの現実”に憑依する事に違和感を覚えていたが、今解消したよ」

「何が言いたい」

低く唸る声は怒気を含んでおり、刺激すれば彼女はなんの躊躇いもなく本名不祥を殺すだろう。

しかしそれは意識の外側の世界、つまり他人と関わる為の世界だったらの話だ。

この世界ではまず無理である。

「原子崩し、君は麦野さんの世界からつまみ出され、何事もなく消える運命だった。失敗を認めないが故に殺戮し、自身が強者であるがために虐殺する君を、初めて麦野さんは疎んじた。上条当麻に出会って初めて麦野さんは原子崩しを呪った」

朗々と語る本名不祥を原子崩しは止めたかった。でも足が動かない。ならば耳を塞ぎたかった、しかし腕からは一切の力が抜けていた。

聞きたくない現実を突きつける声を黙って聞くしかなかった。

「その事に君は傷付いた。心の傷なんて生易しい。世界を大きく崩壊させたんだから。覚えてる？君達の世界が“融解”したこと。その時、君の生存本能は“自分だけの現実”を取り込んだ。取り込まれたんじゃない。頭の中にだけ存在する世界の一角になるまで上り詰めた君の誤算は、この忌々しい“壁”かな？ねえ、名前をどうして“原子崩し”にしたの？」

「やめろよ……」

「麦野さんは原子崩しを疎んだ。原子崩しは“自分だけの現実”になった。ねえ、君は別に“自分だけの現実”になんて成らずともよかったよね？なのはどうして“自分だけの現実”を選んだの？」

「やめろよッ！」

「……哀れだね。君を消せば“自分だけの現実”も消える。そこまですて、麦野さんをこの闇の底から救いたかったのかい？無能力者にしてまで」

「黙れッ！！！」

激昂した原子崩しは本名不祥に掴みかかるが、スルリと避けた。

「確かに用済みにはなる。でも黙って生かしておく価値があると思うの？そうなれば麦野さんは殺されるだけだ。君の目的は麦野さんに自分が居たんだと、覚えていてほしい。でも自分はいらない。そして能力者であることを初めて疎んだ彼女の願いを叶える。確かに一石二鳥だけど、果たして好転するかね？」

「ならどうすればいいの！私では上条当麻を殺せない。麦野を狂わせたあの男を消せば、確かに一時的に壊れたとしても」

「麦野さんなら現実から目を逸らして立ち上がっただろうね。それじゃ、無理だったから次の作戦は私が死にます？あっは、巫山戯るなよクソガキが」

「そんなに、死にてえかッ！！！」

凍るような眼差しと燃えるような眼差しが交差する。

「君に死なれちゃ困るんだよ。立ち上がって貰うよ原子崩し。ちょっと荒い治療だけど、まあ大丈夫でしょう」

首を鳴らして本名不祥は口元を歪ませた。

「いい加減に向き合えよ、テメエら!!!」

清算（後書き）

累計100000を突破！
嬉しい限りです

前々回、アンケートがどうか書いてましたが、今回の突破記念になにか、とある魔術の小説を書こうかと思いますが、どうでしょう。クリスマス近いのでそのネタを使おうかと

A 個人のサイトでもないから書かなくて大丈夫だと思います

B それより本編更新をよろしく

C 書くならリクエストがあります（リクエスト内容も書いて下さい）

D 書いてもいいと思う

こうした方が統計が簡単なので、記号でお願いします。

蜜柑が美味い

四日目

「んで、この壁は無理か」

実際壁と言えるのかも怪しい。何故かというと、それは見えないからだ。実態把握が出来ない。人が物を認識するのに必要なのは光の反射と触った感覚と言ったところか。この世界に光の概念はない。

だが、こうして原子崩しや周りがどんな物なのかというのは認識できる。そして触れた感覚もある。なのに壁が把握できない。ある一定のラインから強い力で押し返される。弾かれたような感じた。

コードエラー
本名不詳は一旦壁を諦め横たわる原子崩しを覗き込む。

「今のところ平気そうだね」

苦しそうに喘ぐ彼女は必死に本名不祥を睨みつける。しかし、焼け石に水。もうどうにもならない。

「君自体が“自分だけの現実”なら分かるだろ？ 原子崩しでは私には適わない。だって私の能力は“自分だけの現実”に作用するんだからねえ。つまり私は滝壺理后ちゃんと親戚みたいな能力だ。私の方がスペックいいんだけどね、能力弄る時とか」

「…ッはあ……。ぐ、だか…ら……。なんだ!!」

「いやあ、だから今治療してんだけど。たぶん気持ち悪いでしょう？ なんせ弄くり回されてるだから。それに耐えて悪態つけるって凄いいことなんだからさあ。君たちって本当に脆いのか強いのか分かん

ないよ」

感心したように頷く本名不祥は原子崩しに触れようとして、力強く弾かれた。

さっきからこの行動を二人は繰り返している。痛くないが本名不祥は、弾かれた右手の甲をさすりながら口角を吊り上げた。

「まあ、なんにしても君には立ち直ってもらわないと。こうして破損した“自分だけの現実”を修復してあげてるんだから」

「頼んでねーよ。……あッ！」

「はいはい。好意の押し売りだとも思っというて。でも、治すついでに君に負担かけてるのは、ご愛嬌」

仕方がないと言わんばかりの本名不詳は隣に座り込んだ。

「しかし、アレだ。なんでこうも似るかねえ」

本名不祥は呟きを零す。

「……後は君が微調整しなさい。“自分だけの現実”と君の曖昧な繋がりを強固なものにした。だから君の感性が〈原子崩し〉に大きく響いてしまうから、気を付けてね」

「お前を殺した後でな」

「無理だと思うけど。この能力は相手の弱点だって一瞬で分かるし、何より抑制出来るからさ。それじゃ、またね」

煙が空気中に溶けて無くなるように、本名不祥は原子崩しの世界から出て行った。

しかし、原子崩しは外の世界に帰れない。もしくは帰りたくないのかもしれない。

ゲーム開始から四日目の朝8時。

『アイテム』の皆と上条は眠たそうに目を擦りながら仮眠室から出てきた。

「ふわぁ、超おはよう御座います」

「ああ」

「木山さんは結局、徹夜でやってた訳？」

「寝ていないな。気が付けば朝だった」

思わず皆は苦い表情をした。その集中力もさることながら、寝る間

を惜しんでデータ解析させた罪悪感もある。

「別に、その徹夜しなくても良かったんじゃない」

「ん？早い方がいいだろ。それに睡眠時間は後で調節するさ。このくらい慣れている」

なんの疲れも感じさせない木山は立ち上がると、コーヒーを注ぐ。ゆっくりと飲むと、少し長く息を吐いた。

「はあ、そうである程度は絞り込んだ。今から丁度ハッキングをしようか悩んでいたんだが、暗部の君達ならそれ専用の機材は手に入るかい？」

「出来るけど、ハッキングしてどうする訳よ？」

フレンダの質問に答える前に木山は、コーヒーを飲む。

「……それは、今使われてない研究所である筈の電気使用量を見る為さ。神無の事だから、幾つか電気を回した研究所はあるだろうし、またその中から絞り込めればと」

「それって犯罪じゃないのでしょうか？」

裏社会とは程遠い上条はハッキングの言葉に冷や汗をかいた。しかし木山も『アイテム』の皆もそのくらいなんだ、と言わんばかりに目を細める。

「あー、コイツ一般人だった訳よ」

「そのくらい超誰でもやってますよ。麦野だって頻繁に不正アクセスして情報を収集してましたから」

「それに〈電気使い〉になれば電子ロックなんて玩具だ。学園都市も行き過ぎた事が無ければ黙認黙殺している。電気使用量を見る程度ならお咎めはないだろう」

「大丈夫、むぎのだってやんちゃしたけど捕まらなかったから」

「俺の知ってる世界じゃない……」

また一步、上条は学園都市の暗い部分をして肩を落とした。

そんな真っ白な彼を見て、なんとなく悪いことをしたと五人は思った。

「その機材、何時くらいに取り寄せられる？」

「12時くらいです。因みに超新規の奴にする理由は？」

「私がやったと言う証拠を限りなく消すためだ」

木山の答えに絹旗は頷いた。

「分かりました。それじゃちょっと行ってきますね！」

「行ってらっしゃい」

手を振り見送る滝壺と上条に絹旗も振り返した。

これから絹旗は12時まで帰ってこないだろう。残ったメンバーは朝食をなんにしようかと悩んでいた。

しかし木山は立ち上がると仮眠室に向かう。

「キッチンが好きに使ってくれ。私は寝るから」

「お昼は食べますか？」

「そうだな、もうとしよう」

「おやすみなさい」

部屋に引っ込む前にフレンダが声を掛け、木山は恥ずかしそうに笑った。

「うん、…おやすみ」

小さな音を立てて閉まる扉を見詰めながら三人はしみじみと思った。

やっぱり、誰かと居るのはいいと。

学園都市は学生の街。共有の寮以外、学生も大人も一人暮らしだ。だからだろうか、どうにもこう言った挨拶が疎かになりがちだ。

この当たり前のやり取りに、こそばゆい何かを感じてしまう事に上条は一種の寂しさを拭えなかった。

「朝ご飯とお昼の材料買いに行こう」

「ハイ！私は鯖缶がいい訳よ」

「駄目。上条は何が食べたい？」

「そーだな、生姜焼きとか」

でも、こうした会話が出来ることに嬉しさもあった。

「三人で買い出し行くぞ」

「それじゃ昼は鯖缶で！」

「焼きそばに決定したよ、ふれんだ」

「滝壺が私に鯖缶食べさせてくれない訳よ」

落ち込むフレンドの肩を叩きながら上条は苦笑した。

「みんなで同じの食べようぜ。だって最近フレンドと一緒に居なかったから滝壺も寂しかったんだよ」

「うん、それに個食は駄目」

「了解。それじゃスーパーに行く訳よ」

人一倍元気に走り出したフレンドを追いかける滝壺と上条は、ここにいない麦野を思った。

幸せを噛みしめる事に、欠けた部分が際立つ。

幸福を素直に喜べない状況が早く終わればいいと願った。

「二人とも早く！タクシー捕まえた訳よ」

「早いなフрендаやつ」

大通りに出るとフрендаはタクシーに乗っていた。乗り込むと直ぐに走り出す。

「どこに行くんだ？」

「最寄りのスーパーって頼んだから大丈夫」

「そうか、生姜焼きだから豚肉とキャベツと生姜だな」

「調味料は揃ってたから買わなくていいよ。でも紙コップと紙皿と割り箸は買うから」

フрендаは滝壺の言ったことをメモすると提案をした。

「なら私が紙皿とか買ってくるから材料よろしく。飲み物もついでに調達しようか？」

「お願いね、ふれんだ。かみじょうには荷物持ちをお願いするけどいいかな？」

「任せとけ」

役割を割り振り三人は静かに過ごした。

そして登校時間を過ぎて人通りの少ない窓の外を眺める。こうして平穩に過ごしているのに、平凡な日常でない事が思い知らされる。

上条も普通なら学校に登校して今頃、あの小学生と見間違うくらい小さい先生の話の聞いている筈だ。

「平凡っていいなあ」

「でも上条は平凡通り越して馬鹿な訳よ」

「なんだとフレンダ！」

「大丈夫、そんな馬鹿なかみじょうを私は応援してる。でも内緒の話し、ふれんだはかみじょうよりおっちょこちょいな」

賑やかな車内には三人分の笑い声でいっぱいになっていた。

「まったくこいつと来たらー！いきなりハッキング機材渡せって何事よ」

「だから超今、必要なんです。裏ルートで取って下さい」

電話口の妙に甘ったるく媚びた声に絹旗は露骨に顔をしかめた。

なんど電話してもこの人物に好感はもてない。いや、それどころか嫌悪感が増幅しているくらいだ。

「はぁ、珍しい。『アイテム』で使うの？」

「超黙秘です」

「こいつと来たら！可愛くないガキンチョね。いいわよ上げないから」

どこか見下したように嘲る声に絹旗は至って冷静に切り返した。

「超大人気ないです。やだやだ、こんなに成りたくない。いいですよ超無能な上司に頼る気ないです」

「ぬがぁぁぁぁぁ！こいつと来たらぁぁぁ！本当に可愛げないんだから。そこまで言うなら最高の機材揃えてやる！」

ブツツ、と一方的に切られた携帯を見ながら絹旗はニヤリと唇を歪めた。

「ふん、チョロいですね。さて朝ご飯！」

ファミレスの中は人気が少なく絹旗は周りを気にせずオムライスを頬張った。

荷物を持ちながら上条は帰路を辿る。

「ごめんな。金払わせて」

「その代わり、ちゃんと荷物持ちよろしくね」

「結局、give and take して訳よ。だから気にしない」

陽気に笑うフレンダは上条の杞憂を掻き消す。

そのままのんびり歩いていると上条は視界の隅に白く揺らめく物を見つけ、思わず目で追った。その先に居たものは――

コードエラー
「本名不祥！」

揺れていたのは彼女の真っ白な白衣だった。

動きが止まった上条の視線を二人が追う。

「……かみじょう誰あの人？」

「あ…あ」

有り得ない人物の登場に喉が張り付いた上条は一度生唾を飲み込むと、絞り出すように言った。

「アイツが、本名不祥だ」

二人が息を潜め、フレンダがポケットに手を入れる仕草をした。

その間にも本名不祥は裏道に入っていた。

「追うぞ！」

「うん」

車道を渡り本名不祥が入っていた道を突き進むと、彼女が誰かと会談していた。

気配に気づいた彼女は振り向くと

「やあ！ 久し振りだね。あれからどう進展した？」

長年久しく会っていない友人に挨拶をするよう片手を上げる。

「本名不祥！ 覚悟出来てんだろうな？！」

「おやおや、出会い頭それかよ。つまんないねえ。ああ、街であつたら鬼ごっこだっけ？……君はもう行って良いよ」

会談していた男に軽く手を振ると素早く去っていった。

何をしていたか気になるが本命が目の前に居るのだ、他の事に気を取られている暇はない。

上条が拳を強く握ったとき、隣から破裂音が響いた。決して小さくない音。

それは、フレンドが手にした物から発せられ、煙が硝煙が鼻孔を満たす。

「フレンドちゃん愛情表現にしては過激だね。つか通してくれる？」

本名不祥は弾丸を手で弄ぶ。

「無理、て言うか麦野を返せ」

「はぁー、ゲームのルールに従ってくれよ。捕まえたら返すさ。私が能力者だって知ってるよね？」

手の内をひけらかすように本名不祥が手の平から炎を生み出す。

「炎系の能力者か……」

「いや違うよ」

上条の答えを否定した彼女は炎の壁を上条に向けて放った。

炎は上条を焼く前に打ち消され、本名不祥は口元に笑みを浮かべる。

「いいね。一筋縄じゃないゲームは好きだよ」

「そうかよ、ならお前のプライドごとへし折ってやるさ。ゲームマスター」

走り出そうとした上条をフレンドが咄嗟に牽制した。

腕を掴み下がらせると、連続で本名不祥に向けて弾を撃つ。

「おー、こわ。合計七発。そんなに憎いか。サイレンサーつきだからって乱射してると野次馬来るぞ」

「さっきから気になってたけど、アンタどうやって弾丸を取ってんの？」

「あー、それは私の能力に関係するんでね。そうだ、不公平だよ。私は君らの弱点と能力を知り尽くしてるなのに私の事を一切知らないのは不公平だね。教えて上げる」

上条たちは耳を疑った。能力をバラすと言うことは対処や弱点を教えるような物だ。

なのに彼女は狭い路地裏で両手を広げ語る。

「ああ、大丈夫正気だよ。私はその程度の情報じゃ負けないからね。私の能力は〈リンクサポート接続援助〉文字だけだと分かんだろうから説明してやる。能力として言うならば、滝壺理后、君と近い存在だ。誰かを追い回す事に長けたのが滝壺ちゃんなら、私は誰かの能力を底上げする事に長けた能力だと言える。その他の追加効果もだいたい一緒

だ。でも決定打は私には『体晶』がいらないことだろう。その代わりペナルティというか制約というか、使いすぎるとマズいけど」

全ての手札をバラまいた本名不祥は唇を陰惨に歪ませて上条を睥睨する。

「だから、フレンダと上条君には作用はしないさ。でも、ねえ馬鹿とハサミは使いようってな。私自身は能力持たないが、誰から借りることは出来るのさ。例えば――〈原子崩し（メルトダウナー）――とかねえ」

皆が呼吸を止めた瞬間。不健康な光閃が無慈悲に無差別に爆発した。裏道に隣接していた建物の一部は無残に融解し、灼熱のマグマのような物が辺り一面に散らばる。

上条たちは間一髪で車道に飛び出し逃げた。この時ほど車が道を走っていない事を感謝した初めてだろう。

「し、死ぬかと思った……」

「材料は大丈夫だよ。ふれんだ割り箸大丈夫？」

「結局、自分の命を心配してほしい訳よ滝壺！」

「あはははは！ヒヤハハハハハ！こんなもんかよ。愉快に逃げてんじゃねえ。鬼役と逃げ役が逆転してんじゃん」

「！！？」

心臓を鷲掴みされたような絶望と恐怖がやってきた。

灼熱の地から悠々と歩いてくる姿はこの世の絶望を体現したようで、狂気に歪んだ顔は見ただけで逃げ出したくなるほど恐ろしい。

同時に悪鬼のようなその迫力に押され上条たちは後退する。

「おいおい、逃げようってか？ まあいいよ。逃がさないからさあ、じっくり追い詰めて鳴かせて上げる。せいぜい可愛く鳴けよ。こんな体験滅多に出来るもんじゃねえしなあ！！！」

「ひっ！……うわあああ、麦野みたい。麦野みたいに恐い訳よ！」

怒った麦野に一番トラウマがあるフレンドはへたり込みガクガクと震えながら滝壺に縋って、滝壺も顔面蒼白になりながら目の前の現状に耐えていた。

しかし顔色が悪い。貧血を起こしたかのようにフラフラと揺れる滝壺を見かねた上条が、一步前にでた。

「鬼役と逃げる役は変わっちゃいないだろ。それにゲームの参加者は俺だ！」

「おお、じゃ先ず君からね。……いっちょ派手にやりますか」

「滝壺！フレンドを連れて逃げろ。少しの間、時間を稼ぐから」

無言で滝壺は頷いてフレンドを抱えて走り出した。決して早くないが、道を曲がり見えなくなった事を確認すると、上条は腰を落として「原子崩し」の光閃に備えた。

だが本名不祥は原子崩しの光閃をわざと右手で消しやすい位置に向けて撃つ。荷電電子のビームは壮絶な熱量と反動で上条を僅かに後退させた。

熱された風が上条に叩きつけられ、思わず顔をしかめると二撃目が上条の足元近くを通り過ぎ、ビルの一角を灼き落とす。コンクリートがまるで溶かされたバターのようだ。

「へえ、確かに使いにくいね。でも、これなら………いけるかねえ」
「なにブツブツ言ってるんだよ。大人しく麦野を返してくれる気になったか？」

冗談を交えた挑発に本名不祥はおどけて返した。

「はは、冗談はそのフラグ体質だけにしときなよ。エロゲの主人公じゃあるまいし」

「フラグ、何のことだ？それに俺は別にモテてる訳じゃないぞ」

「えー、マジかよ。そこで自覚無しの発言がくる？うわあ惚れた子が可哀想だ。彼氏持ちの彼女を落としたとかで君、有名だよ」

「嘘お！？」

飛び出した発言に上条は頭を抱え数少ない女子と話した記憶を掘り起こす。

因みに、決して少くないだろう。上条当麻という人間が関わって

きた女子の数は。

しかし悲しい事ながら本人に自覚が無いために、彼は必死に手を振り乱し抗論した。

「他意はない！ そうだ、べつにそんな事思っ、ただ！」

「ああ、そうだよ。むしろ他意がないから質が悪いんだテメエはよ。そのせいでコッチがどれだけ苦労したか……。君さあ、一遍死んでこい。うん死ぬクソガキがああああアアアアアア！！！！！」

本名不祥を中心として光が爆発した。天を突くように閃光が迸り、辺り一帯を根刮ぎ焼き尽くす。

上条は迷うことなく右手で打ち消すことを選択した。だが質量の多さに逆に押し返され、瓦礫と一緒に壁に叩きつけられた。

「ごあああああ！！！」

光の柱が消え、中心にいた本名不祥の姿は平然と言えなかった。白衣がボロボロに崩れ、覗いた素肌には火傷の傷が刻まれていた。しかし本人は特に意に介す事なく白衣を脱ぎ捨てる。

「やりすぎたか……。さてと、上条君。聞こえてるなら教えて上げるよ。麦野沈利を助けるなら、君は覚悟を決めないといけない。生温い答えて私の前に来てみる？ 殺すぞ、次は無いからな」

はっきりしない意識のなかで本名不祥がそう言ったのを上条は確かに聞いた。そして彼女がそれだけを告げて去っていたのを見た。

そして上条当麻は痛む体を引きずりながら木山の研究所に足に向けた。

四日目（後書き）

テスト消えろ

今一番の心の叫び

願い

コードエラー
本名不祥からの一方的な攻撃を受けた場所から一刻も早く遠ざかるために、上条は頭から流れ出る鮮血を拭くことなく歩き続けた。

最後の〈原子崩し〉は上条を消し去る目的と言うより、圧倒的破壊力の余波で吹き飛ばしたものだ。目論見どおり上条はビルの壁に叩きつけられる事になったが、こうして軽傷なのは、それでも本名不祥が手加減したからに他ならない。

しかし、手加減された事より己の無力を噛み締めた。

あの時、本名不祥を捕まえていたなら、彼女の言うゲームはそれこそ終わったはずなのだ。

なのに結果は惨敗。

何もかもが足りなかった。単純な腕っ節の強さも、心構えも、そして相手の能力を知ったという事実が上条に慢心をもたらしした。

「畜生、なんで、俺は……。足りねえ、麦野を助けるには、アイツの言った覚悟だって…」

つくづく思い知らされる。

だが、本名不祥の言った言葉が上条の心の中に違和感を植え付けた。彼女はなんども、麦野がこんな状態になったのは上条のせいだ、と罵った。

糾弾するのは自分で、されるのは本名不祥ではないだろうかと上条は思ったが、本名不詳の気迫がこの思いを揺るがす。

「かみじょう！」

「滝壺！もう大丈夫なのか？」

「うん、あの時はこーどえらーと私のAIM拡散力場が干渉し合ってちょっと気持ち悪くなったただけだから」

その一言に安心した上条は膝から崩れた。寸殿ところで滝壺は彼を支えると、既に上条当麻は気絶していた。

滝壺は傷だらけの体を抱き締める。皮膚が切り裂かれ右腕は軽度の火傷。よく見れば脚には瓦礫の破片だって刺さっていた。

「……かみじょう」

命に別状はなくとも早く病院に連れて行かなくてはいけない。滝壺は携帯を手に取り病院に電話をかけた。

第七学区のとある病院の一室にツンツンとしたウニ頭の少年は寝ていた。あの戦闘からだいぶ時間は経ったが、未だに彼は目覚めない。心配そうに表情を曇らせる少女三人。

「すみませんフレンダ、滝壺さん。私、みんなが戦っているなんて超知らないで」

夕暮れの部屋に光が差し込み絹旗の頬を赤々と照らす。

「結局それは仕方ない訳よ。それなら私、本名不祥に知らない内に精神をいじられてた訳だし…」

フレンダは悔しそうに唇を噛む。

あの時、フレンダが異常なまでにパニックになったのは彼女の恐怖心を本名不祥が何らかの能力を使い増幅させた結果なのだ。

なんと返したらいいか分からない滝壺は視線を泳がせていると、病室に控え目なノック音が響く。

滝壺が返事をする、スライド式のドアから木山春生が小型の端末機を操作しながらやって来た。

「本名不祥の居る場所を特定出来たが、今から行くのは止しなさい」

電源を切って白衣のポケットにしまおう。

「……でも」

「一度は彼女に負けたんだ。策を練るくらい時間はあるだろう？それに、恐らく君達が時間内に本名不祥を見つけたとしても、彼女ならゲームの参加者は上条君だけだと言って麦野さんを大人しく返さない筈だ」

尤もな意見に『アイテム』の皆は閉口する。

滝壺は時計を見ながらそっと呟いた。

「明日の8時が来たら、もう時間が一日も無いんだね」

「そうだ。だから今はしっかり休みなさい」

木山はそう告げるとポケットの端末機をサイドテーブルに置いて病室から出て行った。

なぜ置いていったのか気になったフレンドは、端末を手にとると起動させる。

小さな起動音が鳴り終わり、表示されたのは学区と研究所の名前だった。さらに操作していくと地図まで表示された。

「これって」

「超どうかしまりましたかフレンド？」

「これって本名不祥の居る研究所なのかなって思った訳よ」

絹旗はフレンダの手元を覗く。

「ここに行けば本名不祥が……」

「かみじょうを置いていくの？」

不安そうに囁かれた滝壺の声に二人は一瞬だけ迷うと、肯定するよう頷いて見せた。

「怪我した上条は結局邪魔になるだけ。時間以内なら本名不詳は動かないから、叩くなら戦闘後の今って訳よ」

「今回はフレンダに超同意です。明日までに上条が回復するとも限りません。それに」

一度区切る。短い静寂の中、絹旗はこの四日間のことを駆け巡るように思い出した。

上条当麻には不思議な力がある。異能を打ち消す右腕ではない。彼自身の本質と言うべき力だ。本当にこの四日間は長かったと絹旗は思う。廃屋に侵入したり、時には警備員アンチスキルに見つかって捕まりかけたり、研究所の警報を作動させて豪い目えらにあつた。

だが、そんなことより絹旗の心に残っているのは、上条の一生懸命な後ろ姿。自分はお世辞にも頭がいいとは言えないからと、行動力で欠点をカバーしたり。一日中パソコンと向かい合った滝壺や絹旗を労わった気の利いたところに救われたと思う。いつの間にか上条に肩を預け寝ていたことなんて少くない。

信頼している。その事実の唐突に気がついて絹旗は改心した。

「彼ならきっと」

最初、絹旗は上条が麦野に対して自分の思いを告白した時は心の中では猛反対だった。闇に生きる自分たちが光の住人と一緒に居ては息が出来なくなってしまう。いや、それ以上に恐かったのかもしれない。

血に汚れた自分たちを見られるのが。軽蔑されるのが。なぜ彼が光の住人なのだろうと、誰も居ないところで独白した事だってあった。いっそ闇の住人なら気が楽でもっと素直に甘えられたんじゃないかと。こっちの人間なら化け物呼ばわりしないんじゃないかと。しかし上条当麻は、最初からそんな垣根を無視して自分たちと付き合っていてくれた。

初めから人間として接し、個人として見てくれた。

「来てくれます。上条は超そんな人ですよ」

きつと麦野も最初の頃の自分のように恐がっているだけだ。だから麦野にはちゃんと向き合ってもらわないといけない。

上条当麻に出来て、自分たちが出来なかったこと。それは――――

麦野沈利をたった一人の女の子として見てあげられなかったことだ。

「そうだね。かみじょうを信じよう。必ず来てくれるって」

「ついでに先に麦野を救出して上条をぎゃふんと言わせる訳よ!」

「それじゃ、一人足りませんが『アイテム』出陣です!」

端末機を置いて三人は病室から出る。廊下にはもう人工の光が煌々と灯っており明るかった。

面会を終えて帰る集団に紛れて三人も病院から抜け出す。一番近い隠れ家への道を思い浮かべながら足早に歩く。

木山には悪いと思いつつ振り返る。病院はもう遠く後戻りは出来ない。

「やはり行ったか」

むしろそれを見越していたがな……、と呟く木山は上条だけしかない病室で溜め息をついた。

忠告を聞いてしっかり準備していてくれたらと思う。

「失礼するよ？」

温厚な声音でカエル顔の医者が入って来た。

木山は医者が通りやすいように端に寄る。医者は上条の脈を計り腕を布団の中に戻すと、ゆっくりと腰を掛けた。

「まさか君達があの子と関わっていたとは思わなかったよ。僕は本名不祥の時代しか知らないが、木山君は昔の彼女を知ってるね？」

「ええ、研究者として先輩と後輩関係にありました。今回の事が起きるまで、私は彼女が死んでいたものだ」と

「そうか。本名不祥には厄介な事情があると踏んでいたが、まだまだ隠している事がありそうだね？ 因みに僕と彼女の関係は医者としての師弟関係だったんだよ」

何気なく木山に椅子を勧めると彼女は軽く頭を下げて座った。

そして遠くを見るようにして尋ねた。

「本名不祥としての彼女はどんな人でした？」

「難しいね。一言で言うなら、自分を探している子かな。記憶が飛び飛びで継ぎ接ぎだらけだったそうさ。だから僕が一度見てあげようか？と言ったら断られたよ」

「記憶……。神無にそんな事が」

「うん、それから彼女は医学を学び、かなりの腕を身に付けたが、その技術は木原に流れ人体実験に利用されてね。破門したんだ」

悲しげに語るカエル医者はほろ苦く笑った。

「だが木山君の話を聞いてある仮説が出来てね。出来れば話したかったんだが、あの女の子達行っちゃったみたいだね？」

「はい、彼女たちも友人が心配なようです」

「それは仕方ないね？では君に託すよ。僕の仮説では木原神無の人格は制御されていると想うんだ。そう、例えば脳に機械を埋め込んでね？」

予想していた事より残酷な言葉に木山は息を止めた。

しかしその可能性を否定出来ない事が悔しくて爪が手のひらに食い込むほど力を込める。

「……言いくいが学園都市はそんな世界がある。全て黒い訳じゃないけど、非道な時とはことん非道だね？木原の闇が特別濃かったのは確かだよ。そして幻生なら本名不祥にそんな事をするだろうね」

「……もしそうなら、取り除く方法はありますか？」

「僕を誰だと思っているんだい？医者は患者さんの幅広いニーズに応えるのが仕事だからね？だから、彼女が助けてと言うなら僕は何かあっても助けるよ」

そして医者としての彼は木山にチョーカーに似た機械を渡した。しかし一部分にスイッチのようなものが付いたそれは単なる飾りでは

ない。

「特定の機械の働きを止めるものだね？ 昔の彼女と話しがしてみたいなら試してみるといいよ」

「あ、ありがとうございます。ですがどうしてここまで親切に？」

「ああ、それは僕が医者だからさ。……さて、他の患者さんを見に行こうかな」

カエル医者は病室から出て行くと窓の外の闇を凝視した。深く暗い学園都市の闇は今日も変わらずそのあった。

もう直ぐだと、コードエラー本名不詳は直感した。

このゲームの終わりは案外早いらしい。それは単に時間が来るからではなのだろう。もっと明確な終わりが来る。恐らくそれは本名不詳が待ち望んだ終わりだ。

ゲームは勝ち負けがある。引き分けもあるが、それは一種の幻想と

呼べるだろう。じゃんけんでさえ勝者と敗者が決まるまで繰り返されるのだ。他の物になればさらに入り組んだ勝ち負けになる。このゲーム最初から見つけるのが勝ちではない。

「このゲームは、自分の望みを叶えた方が勝ちだ。望みが無いならある意味その時点で勝ちであるし、負でもある。ねえ数多、君は不肖不出来のこの私が勝つと思うかい？」

絡みつくような抑揚のある声に木原数多はあからさまに渋面になった。

「話しかけんじゃねえよ。はっきり言ってお前の思考回路がわかんねえ。勝ちを奪い取るもんだろう？」

「ああ、それもあるね。奪い取るか……どうしたら彼女は私の望みを叶えてくれるかな？これは奪えないし、やっぱり別の視点が必要かねえ」

「それより0次元の極点はどうなった？進んでんだろうな」

木原にしてみればそっちの方が遥かに大切なことである。本名不詳の望みなんぞ知った話ではない。

「せっかちな。進んでるよ。今なら地球くらい移動させられるね」

「へえいいじゃねえか。他の次元についてはどうなんだ？」

「うん、空間を切り裂くと同時に物体を切り裂くこともやったよ。切り口はどんな刃物より優れてるんじゃないのかな？」

そう言って本名不詳は金属製の鉄の棒を白い机の上に転がした。それはまるで竹を立てに割ったかのようにまっすぐ切り裂かれ、断面には押しつぶされたような跡は無い。

「まあ、空間移動なら彼女、LEVEL6に認定されてもおかしくないよねえ」

三次元の掌握。0次元への介入。未開の次元を解明することのできる能力。

「0が始まりだと言った奴を褒めてやりたいよ。全くその通りだ」

「この実験でLEVEL6が作れるならそれでいい。しかし傑作だよなあ、本来ならオマケ程度の副産物の方がLEVEL6になれるんだからよ！」

それは空間移動系能力者への言葉かそれとも、本来の曖昧な電子を活かすことの出来ない麦野沈利に向けた皮肉か。

「化け物、ねえ。そうなって欲しくはないんだけどなあ」

本名不詳の声は誰の耳にも入らなかった。

願い（後書き）

これからリクエスト小説を書くのもっと更新が遅くなります

ゲームマスター

木原を帰してから本名不詳は手元の資料を食い入るように見ていた。木原数多に渡した奴とは違う書類。0次元の極点の解析資料なのだが、枚数はたった三枚。そんな数で全てが説明できる代物では無いはずだが、説明できてしまったのだ。

調べに調べ上げた結果分かったことは、

結局、あれは説明と理解不可能な力であると言うことだ。

しかしその事実^{コードエラー}に本名不祥は驚かなかった。むしろ調べる前からそんなものだろうと思っていた。

人間が干渉も感知も出来ない世界の方式など、無いのと同義なのだから。だから彼女は最初から0次元に方式は無いものと仮定していた。仮定は現実のものとなったが。

だからと言って彼女の意味が揺らぐ訳ではない。自身の知識を駆使し、時には能力を最大限に生かしてこの次元の方式を掴むつもりだ。

「でも、やっぱり面倒なんだよね。曖昧な電子も造れないし」

しかし投げ出す寸前だったりする。

今の機材では曖昧な電子は造れないのは明白。そして機械には何をどこに飛ばすか決めることは出来ない。

長く考えてばかりで鈍くなった思考に蓋をして本名不祥は無意識に持っていたペンを指だけで器用に回す。

何もしない時間を過ごしていたが、監視カメラの映像を見て嬉しうに立ち上がった。

「あ、お茶の準備しないと」

漸く来た友人の来訪を喜ぶ声だったが、その表情は冷たい微笑を湛えていた。

白衣を手にとると素早く腕に通し、ポケットの中身を確認する。幾つかの物を確認。

その中には、シャーペンの芯を入れるケースのような物も含まれていた。

「さて、みんなは何が好きかな？ ダージリン、ベルガモット、いやコーヒーかもねえ」

濃い赤色をした縁の眼鏡を掛けて彼女は部屋を出る。広い研究所を知り尽くしたその人は迷うことなく、道を進んでいく。一階のとある廊下の真ん中に三人の少女が立っていた。

「やあ、遅かったねえ。『アイテム』の人たちにゲームを申し込んだわけじゃないから、このゲームは続行するけど構わないでしょ？」

「……だから私たちにの前に姿見せるって？ 結局、ふざけてる訳よ」

「まあねえ。本気でゲームしたら君たちの負だからさ。ゲームマス

ターの中には自身に枷をしてわざとスリルを楽しむ者と、優位な位置に君臨してゲーム盤の情景を見下し手のひらで遊ぶ者の二種類ある。君たちは私がどちらか分かる？」

にこやかに問いかける本名不詳に絹旗は罵るように答えた。

「そんなの超簡単です。貴女はどっちでもなくどちらとも、超両方の遊び方をする人。貴女の問いに答えなんて超ありませんでした」

「そうさ無いよ。だけど君は答えを見つけた。この問いは簡単すぎて違和感さえ無かっただろうけど、本来なら君たちはこのゲーム自体に違和感を抱くべきだ。する必要があると思うかい？ うん、もちろん無いさ。本来ならねえ。はいこれプレゼント」

話を続けるより本名不詳は、行動を起こした。ポケットから物を取り出し絹旗に向かって投げる。絹旗は片手で受け取ると、その正体を確認して息を飲んだ。

強張る仲間にフレンダは視線を本名不祥から外さず、押し付けられた物が何なのか尋ねた。

「結局、なに貰った訳よ？」

「超有り得ない。……一介の研究者やその辺の奴じゃ、絶対に手に入りません。麦野がこれを貰うときだって、きちんと全部消費したか、どこでどれだけ超使ったか事細かに報告して信用性が確立されて超初めて貰うのに」

「ああ、簡単だよ。頂戴って言えば私の場合貰えるんだからねえ。だって『体晶』を造った一族でもあるし、その一族の中でも私に逆

らえるのは数少ないもの」

絹旗達からしてみれば、こんな劇薬を言葉一つで手に入れるのは深遠の底の様に思えたが、本名不祥には闇の始まりでしかないようだ。一族という規模で歪んだ闇を形成した世界で育まれた彼女には所詮、ちっぽけな事なのかもしれない。

純粹に、漠然と規模が違うとフレンダは齒噛みした。

「真っ暗過ぎて恐ろしい訳よ。この街の真の闇ってそんなに桁違いなの……」

「んー、単純に私の知っている闇と君が知っている闇は大きさや規模ではなく、対象違いさ。君の世界はただ単純に狭いからそう認識するのであって、本当の闇を形成してる奴から見たら私だって序の口なのよ。『闇』って見えない分からない理解出来ないから『闇』であって、故に」

口紅をしてない割には赤く色付いた唇を蠱惑的に動かし、三人の鼓膜を震わせた。

「それを全て知ることは不可能。私もなんであの人がこんな事してるのか知らないのさ」

『アイテム』メンバーよりも深遠の底に位置する者でさえこの街の全貌は見抜けない。まさしく底無しの闇に、滝壺は恐怖を覚えた。

自分達は一体どこまで堕ちたのだろうか？きつとこの間は意味をなさない。際限のないものに“どこ”という基準点は存在しないのだから

ら。

だが、確実に表現出来ないほどの濃密な闇に染まった人物の側に大事な仲間を置いておけない。

その思いが滝壺を突き動かした。

「むぎのを返して、でないと戦う事になる」

「……そう、なら戦うしかないねえ。君らに彼女は救えない」

「それって、超どういう…」

続くはずの絹旗の問いは、本名不祥が取り出した長い棒のような武器を突きつけられた事により止まった。

蛇腹のように節のあるデザインが施され、銀色の表面が蛍光灯の光を鈍く反射する。どこにも刃が突いていない純粋な棒は人を殺す用途ではなく、殴りつける程度が限界だが絹旗やフレンダは身構えた。

「結局、何が飛んできても可笑しくない訳よ」

「でも狭い廊下だとあの武器は超不便です。フレンダは援護射撃を超よろしくお願いしますッ！」

言い終わらぬ内に絹旗は爆発的な勢いで疾走する。

小さな身体からは想像も出来ないほどの速さは、二秒で10メートルの距離を無意味にした。

しかし本名不祥の視線は未だに絹旗に向けられてはいない。余裕なのか反応が追いつかなかったか分らないが、好機とばかりに絹旗は大きく右足で踏み込むと渾身の左ストレートを本名不祥の腹目掛けて叩き込む。

ドンッ！と廊下に破裂音が響く。

それは絹旗の拳が見事に決まった訳ではなく、フレンダが懐から取り出した拳銃の発砲音。

「うわっ！！」

当の絹旗は本名不祥の棒で足元を払われ、そのままの勢いで床を殴りつけ、白いコンクリートとできた床は無惨に砕け散った。

そして本名不祥は澄ました顔で頭を右に傾けるだけで、人の目には目視できない程速い打ち出された弾丸を避ける。

もとより弾丸の軌道など予測しやすい。本名不祥は弾丸を見たのではなく、フレンダが狙う位置とタイミングを測っていたにすぎない。

それでも弾丸に意識を殆ど持っていたために距離があるが絹旗に後ろを取られるのを許してしまった。

「……絹旗、大丈夫？」

「ええ、でも超侮れないですよ」

「あら、研究室に閉じ籠もって運動不足な人だと思った？ 絶頂期には遠いが、それでも現役なんですねえ。殺し合いの回数は君らより遥

に多いかもよ」

まさしく底の見えない彼女の本領に絹旗とフレンダは背筋に薄ら寒いものを感じた。隙が無い。どこを見ても本名不詳はすぐに動けるように、反撃できるように構えられてある。

一手が打てない二人に、息苦しそうにしている滝壺が叫んだ。

「気を付けて、こーどえらーは次に能力を使ってくる！」

咄嗟に反応したのは、絹旗だった。

何よりも先に絹旗は直感だけで右に飛んだ。それは正解と言える判断。もし彼女が動かなかったら――

今頃は縦に真っ二つ、引き裂かれていただろう。

不健康な青白い光線が絹旗の頬を掠め、耳元に空気を焼き切る音を置き土産として向こうの壁を無慈悲に溶かした。自分が動かなかつたら、そんな可能性を考えてしまい絹旗の胃には重苦しい何かが押し掛かる。それは純粹な恐怖であり、一切の甘い考えを捨てた殺し合いの世界に自身を投じる事への微かな疑問だった。

恐らく、考えてはいけなかっただろう。しかしもう遅い。絹旗は思ってしまった。

――麦野を救う事に、超命がけになる必要はあるんでしょうか？
すぐにかき消せるものではない。片や自分の命。片や助けずとも奪われることの無い命。天秤にかける必要性も感じないほどに、自分

たちにメリットはない。確かに麦野沈利と言う人材は魅力的だ。

彼女が居るか居ないかでこうも戦局が違い。彼女の能力をそのまま借りた本名不祥は強大な力を行使している。

戦力や知力ならまさしくトップクラスの逸材だと認識しているが、そこまでする義理はあるのか？

「なら私に頂戴よ」

少し焼けた左の頬に慈しむ様に指先が添えられていた。

「え?!」

「だって必要ないんでしょ？」

瞬きを絹旗はしてはいない。なのに一瞬で距離を縮められた事に気づかなかった。突然、本名不祥が目の前に現れた。こんな感覚、可能性を挙げるなら。

「空間移動……!」

「そう、ねえ質問に答えてよ」

「……」

答えることはないと絹旗は無言で提示した。

そんな絹旗に少しばかり不満足そうに眉宇を吊り上げたが、興味が失せたのか絹旗の頬から指を離し、フレンダに向き直った。

「絹旗、時間稼ぎありがとう！」

重たい何かがゴトン！と音を鳴らして床に転がる。楕円形に近い丸みを帯びたそれは、手榴弾。

複数の爆弾が足元にある状況に本名不祥が取った行動は、

「これ、返すね」

空間移動の能力を使い全ての手榴弾を音もなく飛ばした。慌ててフレンドは周りを見渡したが手榴弾は一個も見当たらない。

手榴弾が見えない事に不安を隠せないフレンドを本名不祥は可笑しそうに笑いを押し殺しながら、フレンドのその後ろを指差した。

「そうだ、後ろ危ないから」

「まさかつー！」

振り向いてしまった。本名不祥に誘導されフレンドはコンクリートの壁を見た瞬間、突然壁の一部分が爆発し大小様々な破片が少女の白い肌を引き裂き、突き刺さり、高熱の爆風が突き飛ばす。

「フレンドー！」

「ああ……ぐ、はあ……ッ！」

至る所から血を流すフレンドは必死に立ち上がろうとするが体に力が入らないのか指先を動かすのが限界だった。

そこに本名不祥が覗き込むようにやって来た。

「あらら、大丈夫？手榴弾から色々繋げて自慢のトラップ地獄に誘い込むつもりだったみたいだけど、無駄だったねえ」

痛みで呻くのが限界のフレンダは最後の抵抗として澄まし顔の本名不祥を睨む。

その非難する眼差しを一蹴すると本名不祥は顔を真っ青にして小刻みに震えている滝壺を見た。

しかしよく観察すると不自然に汗をかいている。まるで風邪の症状だ。

「さて、滝壺ちゃん。交渉しようか。多分君が一番私の欲しい回答をくれそうだからね」

辛そうにしているが本名不祥にとっては関心のない事だ。明らかに具合の悪い滝壺を気遣う事もない。

「今回の事から手を引いてくれるかい？それともまだやる？」

「……まだ、負けてない！」

「負けだよ。絹旗最愛だってもう動けない。ねえ絹旗ちゃん」

廊下の奥から虚ろな声が木霊した。

「はい、『動くな』と言う命令は続行中です」

「きぬ、はた？」

様子がおかしい。絹旗は立っているだけで動こうとしない。そしてどこか生氣のないのっぺりとした無表情な顔は、本当に生きているのか不思議なくらいだ。

心ここに有らず。

意識だけを忘れてきたかの様な絹旗は虚空をただ映していた。

「常盤台の女王って知ってる？その子の能力を使って絹旗ちゃんお借りしてるって訳だ」

「なにが望みなのか？」

「回りくどいのは嫌い？……そうだね、それじゃ私の質問に答えてくれたら、仲間も麦野さんもかえしてあげる。フレنداの方は先に治療するねえ。でないと逝っちゃうかもしれないし」

それだけ言うと本名不詳は口元に笑みを浮かべてフレنداの前にしゃがみ、背中辺りに触れる。

どんな能力かは分からないが、触れただけでフレنداに刺さったコンクリートの破片が体から綺麗に取り除かれた。空間移動の一種なのだろうと滝壺は仮定する。

そしてピクリとも動かないフレنداの顔色を見て本名不詳は景気よく頷いた。

「傷跡は残らないだろう。でも血液の量はちよつと多くする程度で、全快にはしないから」

「ならきぬはたも開放して」

「いやだよ。正気に戻って突進されるじゃないか。それに私は滝壺ちゃんの答えが聞きたいの」

未だ見えない本名不詳の思惑に滝壺はため息をつく。その拍子でツキン、と頭痛が走る。口から零れて痛みを押し殺す声に、背を向けてフレンダを治療する本名不詳が感情の読み取れない低い声で囁いた。

「ごめんね。私たちのAIM拡散力場が反発しあって体調不良を起こしているんだ。能力的に言えばお互い干渉する力だし、剥き出しのAIM拡散力場同士が拒否して脳にダメージを与えてしまう。勿論、私も例外じゃない」

「でも、平気そうだね」

「痩せ我慢だよ。と言いたいけど、鎮痛剤を使ってんのさ。あといろいろ」

治療に専念するために本名不詳は言葉を濁す。

意識を頭の中に持っていく。数え切れないほどの選択肢のうち、たった一つを引き当てそれを自分に結びつける。そして流れてくる力を増幅させるとそれをまた別の者に流し込む。

＞接続援助<の能力は際限なく能力者と繋がること。繋がりその効

リンクサポート

果を誰かに分け与えることが出来る。彼女は今まさにそれを実行している。

〈オートリバース肉体再生〉の効果をフレンダに移すと、彼女の裂傷や火傷はビデオを早送りしたように尋常では有り得ないスピードで恢復した。

「すごい……」

似た能力として、いや似ているからこそ、その能力の技術に驚嘆の意を隠せない。

素直に尊敬する。

「君も自分と向き合えば、これくらい可能さ。向き合えば、気づけば、立ち向かったらねえ」

「あなたも、立ち向かったの？」

「いや」

短く本名不祥は否定した。

「そんな事をしたのは木原神無さ。私みたいな欠陥品じゃない。完成された完璧な人が、そうだった」

独白の声には無情の悔しさが滲む。

「コードエラー本名不祥なんて馬鹿みたいな名前は私が使えないから付けられたんだ。完成品じゃないから。私じゃ『天使』に、なれないから。名前なんて、存在なんて必要とされないから本名不祥できそこないなんだ」

フレンドの治療を一通り終わると、うつ伏せの状態から呼吸がしやすい様に仰向けにして、顎の位置を調整する。

その後に脈拍を計ると、異常はないとみてフレンドから視線を外して滝壺に向き直った。

「だから私は“自分だけの現実”が知りたい。私は無意味なんかじゃないんだ。そのためか君にも興味がある。能力が似てると“自分だけの現実”も似てるって言うしねえ」

眉唾なものだけど、と本名不祥は小さく続けた。

「だから、私を攻撃しなかったの？」

「しても良かった。でも予想より君は疲弊してる。……限界が近いんだろうねえ。そこに追い討ちをするのもって思ったから」

「攻撃をしても最初から、殺す気はなかったんだね」

「能力者は皆等しく私の宝だからねえ。出来る限り殺しはしない。まあ、例外はあるけどさ」

殺す時は、きちんと殺す。

そう語る本名不祥の顔は真剣なものだった。どこかふざけた様子も無い。

「だから質問なんだ。君はどんな思いでここに来た？理由はなに？私と戦うことを見越していたなら、それ相応の決意だってあった筈

だ。なにが君を突き動かした」

「私にとって『アイテム』は居場所だった。こんな能力だから、暗部に流されて後が辛いけど『体晶』まで使って必死に生きてきた。……私は使い捨てられて消える運命だった筈なの。誰の記憶にも残らずに」

でもね、と彼女は笑った。

「いつからか『アイテム』が、むぎのやふれんだ、きぬはたが居る場所が私の居場所であると同時に、帰る場所になったの」

短いようで長かった『アイテム』の皆と過ごした記憶が蘇る。

「だから、私の帰る場所を、居場所を返してもらう。私のために、私の勝手な願いのためにむぎのを返して」

『体晶』を使用していないにもかかわらず、滝壺の瞳には力強い光が灯っていた。そして、見た目に反した強引な意思と覚悟を聞いた本名不祥は心地のいい歌を聴いたような穏やかな微笑みを浮かべる。

「合格だ。行くといい、麦野さんの所に。その意思を麦野さんに伝えてくれる？今の彼女には必要なんだよ」

「大丈夫。私だけの思いじゃないから」

『アイテム』の心はもう揺るがないだろう。

予想よりもいい答えに本名不祥にも、この“ゲーム”がどうなるのか分からなくなった。

全てを仕組んだ本人の意志をどんどん無視して進んで、展開していく。

「やれやれ、これじゃゲームマスターの椅子は返上しないとねえ」

一人分の世界

誰もいない長い、長い廊下。そこで本名不詳はフレンドの仕掛けた罠を撤去していた。発火テープに人形型の爆弾。センサー式で起爆する罠。ワイヤーを切断すると、どこから高速で飛来してくる弾丸に似た丸い弾の数々。

数えればキリがない。

そしてどれも当たれば死に繋がるものばかりだ。

もしくは全てが死に繋げる罠と言った方が正しいのかもしれない。よく見ればどれも一撃で殺す事を考えてはいない様だ。

詰めが甘い、と言うわけではなく逃げた先に罠があるタイプの仕掛け。連続で作動する造りになっていた。

「並みの能力者なら死んだな。いや、殺す気でやってるからこれでもいいのか」

大量の人形を山積みにして本名不詳は甲高く指を鳴らす。変化は直ぐに起こった。

真新しい人形の首が、崩れ落ちた。それだけじゃない、腕が、脚が、目に例えたボタンが、無残にボロボロと落ちる。それは人形全部に見られた異様な変化。物質が長い年月を経て分解される様を早送りで見ている気分になる。

崩れた人形はさらに細かく分解され、原型を保っているものは一つ

もない。目に見えて塵に変えられていく。その中から、黒く四角い物体が出てきた。恐らくこれが爆弾だろう。しかも爆発することはない。

「物質経過時間の速度を通常に戻してっと。さて、ごみ掃除は風に任せますか」

見えない風の刃が四角い箱を粉々に碎くと、風は塵とともにそれを舞い上げる。辺りに拡散させるのではなく、本名不詳は逆に塵を一箇所に集めて、原子崩しへの閃光で文字通り、塵も残さず吹き飛ばした。

綺麗になった廊下には危険な物は一切ない。仕掛けに使われた弾をポケットに仕舞うと本名不詳は来た道に戻る。

進むにつれて頭痛が増す。葉が切れてきたらしい。滝壺には鎮痛剤と言ったが実際は全く違う。矢面にできない代物で干渉による不具合を緩和させているに過ぎない。もともと、この嘘は既に見破られているのだろうか。

カツカツとコンクリートの床を踏み鳴らし、歩いていると耳鳴りまでしてきた。脳の中身を直接揺さぶられる感覚に本名不詳の体から嫌な汗が吹き出る。それでも歩き続ける。近づく先に居る人物の事を思うと別に重症でもない。

能力者なら誰とでも接続できる。という自分の中にあるキャッチフレーズを訂正しなければ、と思う今日この頃。

だが、能力者に対して最終兵器という事実は恐らく変わらないだろう。実際今まで負けた記憶はない。

「でもLEVEL5と殺し合いしたことないしねえ」

一人勝手に呟いてみる。

確かにLEVEL5だろうがなんだろうが、能力は借りられる。能力を使えなくすることだって出来る。複数同時に能力の行使も可能だ。

可能性、卓上理論の範囲なら本名不祥はLEVEL5と互角にやり合えるだろう。

しかし実際に殺し合いしてまで知りたい事でもない。

なので今度、ツリーダイアグラム樹形図の設計者で検証してみる、という答えにたどり着いた。

そして考えに耽っていた為に、いつの間にか『アイテム』と交戦した場所にたどり着いていた。

「……あ」

本名不詳の姿を見て、ブロンドの髪がビクッと跳ねた。思わず声を出してしまった事を悟られないように睨んでくる。しかし恐怖で体が強張ったと言う事までは隠せなかった。小動物の威嚇行動に目を細めつつ、本名不詳は気軽に接した。

「よっ！血液量とか大丈夫かい？少なかったりとか、逆に多かったりする？」

「：別に」

無愛想に返ってきた返事に本名不詳は満足したように笑い。フレンドはその笑いが気に入らなかった。

「なに？勝ったから余裕な訳？」

「違う違う」

何を言い出すんだ、と言わんばかりに手を振り乱す。

「私は落胆しなくて良かったから笑ったの。『暗部』だよ。闇の人間が、簡単に他人を信じちゃいけない。それを無意識に理解できてるみたいで安心したんだ」

「例え『暗部』の世界じゃなくても、アンタみたいな胡散臭い奴を信用する訳ないっての」

「ひどい嫌われようだなあ。治療してあげたのに、信用しないでいから愛想はよくしてよ」

「普通なら問答無用で殺し合い開始よ！口を利いてやるだけマシだと思え！！」

「あつは！殺し合いをしないのは君が私に勝てないからだろ？なに履き違えてんの？君の選択肢はもう『取り合えず本名不詳と会話する』しか残されてないでしょう」

ゾワツと冷たい殺気がフレンドの背筋を駆け抜ける。呼吸を忘れ、石のように固まっていると本名不詳は嘘のように殺気を掻き消した。

口元にはどうだ、と不敵な笑みを浮かべる。挑発されているのだろうが、圧倒的な存在の前にフレンドは虚勢を張ることも出来なかった。死が目の前にあると思うと、脚が震える。

「でも、私は……私は！」

虚勢なんて、張れない。言い返す事だって、出来ない。それでも譲れないことはある。今だって逃げ出したい。でも、完全に意識が途切れる前に聞いた滝壺の思い。

自分が麦野を助ける理由は、そんなに崇高でもない。胸なんてはれない。それでも勝てない相手に一矢報いるには、十分だ。

「アンタに負けない!!」

「ッ!!」

重たい音が無機質な廊下に響く。硝煙の煙が鼻にツンと沁みる。

急須ねずみが猫を噛む。追い詰められた者は時に何をするか分からない。猫もまさかねずみが自分に噛み付くとは夢にも思わなかっただろう。

「なんでアイツ等は勝手に行っただんだ!!」

上条は制服のシャツに袖を通して怒鳴った。怒りも大いにあるが目に見えている感情は、不安と焦りか。

「すまなかった。私には止めることが出来んのだよ。……自分が信じる道を彼女たちは行っただんだ」

「そう、だよな。すみません、なんだか一人で焦っちゃって」

いや、と木山は抑揚の無い声で答え、続ける。

「焦ってるのは、恐らく皆だ。神無も例外じゃないさ。麦野さんは一つの考えに囚われていると思う。救ってくれないか？あの素直になれない子を」

「当たり前だ!」

カーテンがシャツと音を立てて押しつけられた。その奥に居た上条の瞳には、なぜか見る者に根拠の無い安心感を与えた。彼になら任せられる。そう思ったのは木山もだ。

「ああ、信じているよ。それじゃ行こうか。それにしても、真夜中の二時に目を覚ますだなんて、非常識だな」

「うっ、それは……」

「麦野さんを連れて帰ってきたら、許してあげよう」

似合わないと分かりながら不貞不貞しく笑う。その意地の悪い笑みを見て、上条も同じように笑った。

「なら、絶対許されますよ」

「ほお、連れて帰ってこなかったら高速道路でドライブしよう」

ふと、上条の頭の中で地獄のカーチェイスが蘇り慌てて記憶に蓋をした。出来ることなら、二度と経験したくないし、思い出したくない。

だが本名不祥に負ける気のない上条は強く出た。
コードエラー

「上等、なんならカーレースにだって付き合ってくださいですよ」

「よし、約束だぞ」

上機嫌に笑うと、木山は白衣のポケットから銀色の鍵を取り出した。

あのイギリス製高級車の鍵だけあって、何だか品のある作りになっていた。

「君はまだ本調子じゃないしね。脱走がバレたら大目玉だ。すまないが、急ぐぞ」

「了解です」

電気を消して、二人は人の気配を確認する。自分の呼吸音が五月蠅いくらい静かだ。どうやら近くに誰も居ないらしい。

スライド式のドアをゆっくり開け、隙間から這い出ると音を立てないように早歩きで廊下を進み階段を降りる。

目指すは一階だ。正面は閉まっているだろうし、二人はどこか適当な窓から逃走しようと考えている。二階から飛び降りてもいいのだが、上条の体調を考慮して一番見付かる危険はあるが、一番安全なルートにした。

順調に三階から二階に繋がる階段まで来た。そこで自分達のものでない足音が下の階から、聞こえ木山と上条はとっさ身を低くして、下から見えない壁際まで後退した。

足音がどんどん大きくなる。真っ暗闇の中、音だけが位置を推測する情報だ。

カッン、……カッンと音が鮮明に聞こえたとき、懐中電灯の光が見えた。

無意識の内に呼吸を止め、緊張の汗が滲む。

一度辺りを見渡したのか光が揺れ、それからまた進み始めた。

足音も光もだんだんと遠退いていく。それと比例するかのように安堵感が胸の内を占める。完全に聞こえなくなると、緩やかに息を吐いた。

「行ったか？」

「みたいですね」

立ち上がり階段の手すりから下を覗く。真っ暗で、明かりは見えない。音も聞こえないが、念のために慎重に階段を降りる。

息を殺して、気配を探る。どこかのスパイみたいだと上条は思った。そう考えて、少しだけ気が抜けた。

「さて、どこから出るか」

一階についてすぐ、木山はそんな事を考えていた。出来るだけ駐車場の近くから出たい。

しかしそれだと反対側になる。

「……でも確か、あっちの方向にはナースステーションがありましたけど」

「それは厄介だな。仕方ない、ここから出よう」

鍵を開けると木山は窓を全開にしてそこから脱出した。それに続いて上条も外に出ると、ゆっくりと窓を閉めた。鍵を閉められないので、ちょっと罪悪感が湧く。

「誰か閉めてくれますように」

「そうだな。よし、駐車場に向かうでしょう」

病院から離れ、二人は走った。上条にとっては長くない距離だったが、木山は違ったらしい。

「はぁ…はぁ、君はッ、元気だな…」

「先生！大丈夫ですか？まだトラック一周分の距離ですよ」

「はぁ、そんなに…走ったのか」

汗はあまり出てないが、体が熱い。夏場の暑さは外からのものだが、今は体の中から熱い。どうしようもなく熱い。

「脱ぐか」

「車のエアコンで我慢して下さい！」

「その手があったか」

盲点だった。と手のひらを打ち鳴らす木山はさっそくロックを解除すると、左側にある運転席に座りエンジンをかける。そこで、上条が助手席に乗ってきた。

シートベルトをしたのを確認すると木山は車のアクセルを踏む。滑らかに滑り出し車道に出ると、スピードを上げる。

エアコンの効いた車内は程よく涼しく、木山は目を細めた。

「さて、飛ばすか」

「まさかっ!？」

上条の視界の端で木山がアクセルを全力で踏むのを覚えているが、それからは記憶が曖昧だった。

景色が目まぐるしく変わり、減速、加速、カーブ、左折に右折する度に重力がかかり息苦しかったのを覚えている。

それ以上にシートベルトが食い込んで痛かったとも記憶していた。今回も色々と凄かった。それは絶叫も出来ないくらい。

「ふう、流石にやりすぎたか。今から安全で、……………あら？」

「がア、うえ」

返事はするが、屍一步手前。さらに言うなら棺桶に片足を突っ込んだ状態。

「……………適当に休ませるか」

元凶は何より自分だ。悪いとは思っているので、木山はコンビニに向けてハンドルを切る。コンビニが見付かるまで、15分。

その間、上条は助手席でピクピクと痙攣していた。

「あー、上条くん。なにか飲みたいものあるか？」

「水か、スポドリを……………」

「分かった」

ボタンと扉が閉まると車内には自分だけになった。

腕を持ち上げるのも億劫なくらい気持ち悪い。内臓がフワフワと浮いているように感じる。自身が感じる速さの限界を超えた気分だ。いや、実際超えたんだろう。

「うっ、麦野の所につく前に死にそう……」

せり上がってくる酸っぱい物を押し返す。それが限界だ。

「ただいま」

「お帰りなさい」

座席に座るとレジ袋の中から水とおにぎり、サンドウィッチを渡してきた。

「あの、コレは？」

「君はたぶん今日何も食べてないだろう？ お腹空いてるんじゃないかと思ってね」

本山は車を発進させず、買ってきた缶コーヒーを飲む。

「どうした、食べないのか？」

「いくらしました？ 奢ってもらうのは……」

「子供が遠慮するものじゃない。君、もう少し甘えていいんじゃないかな？」

缶コーヒーを飲み干すとレジ袋に放り込む。

上条は少し悩んだ後、素直に受け取りおにぎりの包装を剥がす。

「ありがとうございます。御座います。先生も食べますか？」

「病院食を堪能してきたからいいよ。君が食べなさい。そう言えば、病院に白衣で行ったせいかわ医者と間違われて大変だったなあ」

上条は何となく想像できて苦笑した。

「誰だって間違えますよ。あれ、コソコソする必要あったのか？」

「君はあったね」

「あ、そうか」

そこまで雑談しておにぎりを齧る。シーチキンの味が今まで何も食べてなかった胃袋を刺激して、急に空腹感が沸いてきた。浮いたような内臓の感覚も吹き飛びサンドウィッチとおにぎりであつという間に平らげる。その食いつぷりに木山は微笑む。

「食事を抜いて軽度の貧血に近い症状になっていたみたいだね。体が変に冷たかったり、浮いているような気分になってなかったかい？」

「あー、冷たかったどうか分かりませんが浮いてるような気分でした。てっきり車酔いのせいだと」

「ならもう少し、休んでから行くか。その間、暇だろうし何か質問があるなら答えるが」

そう言われても急には質問なんてなかなか出てこない。どうしようか、と悩んでいると木山がゆっくり口を開いた。

「実は、私が始めて麦野さんと出会ったとき、その名前に聞き覚えがあったんだ」

「学園都市第四位だから、名前くらいは聞いたことあるんじゃない」

「そうだ、私も麦野さんにそう言われて納得した。少し引っかけたがな。でも思い出したんだ。彼女の名前は彼女が第四位になる前に聞いたことがある。その名前を教えてくださいました人物は、とても彼女の行く末を案じていたよ。他人にも係わらず、ずっとね」

木山の瞳が哀愁の情に揺れる。

「もしかして、麦野の名前を教えたのは……」

「そう、木原神無さ。当時は能力開発に勤めていたらしい、歳も言うほどなく、功績はそこそこ有ったそうだ。そこで、神無と麦野さんは出会った。麦野さんはいきなりLEVEL3相当の能力をたたき出した能力者として、能力開発の倍率は高かったそうだ。優秀な人から彼女の開発チームが組まれた時、神無はトップだった。しかし、チームとは集団だ。統制が出来る人物がいいという真っ当な理由で神無は主任の地位を取れなかったらしくてね。悔しがってたよ」

自分の知らない麦野の過去。そして木原神無として生きた時代。その時、木原神無は何を思ったのだろう。過去に出来なかった能力開

発を今、やり始めているのだろうか？そんな疑問が上条の心を振るわせる。そんな理由ならくだらない、と怒りの炎がくすぶる。

「それからどうしたんですか？」

「開発チームの一人として、尽力したそうだ。それくらいしか神無は言わなかった。たった一度酷く酔っ払ったあの時以外、二度と麦野さんについて語らなかったよ。彼女が麦野さんについて語ったのは、そうだな一人で大丈夫か、とか。もう少し素直になればいいのに、とか人間性について心配していたな。研究対象より目の離せない妹を持った姉、という感じだった」

しかし、木原神無がそんな思いで麦野沈利を見ていたなら――

「ならなんで麦野を研究対象に」

「さあな。それを確かめに行くんだろう。この研究所はよく知っているから道案内はできる」

「戦うかもしれないから危険だ！気持ち嬉しいけど」

「心配するな。いざという時は自身の身は守れる」

有無を聞かない木山はエンジンをかけるとコンビニの駐車場から出た。

「ガハア!!」

「あ、当たった!」

フレンドの持っている銃から白い煙が漂う。

硝煙の臭いに混じり、血の臭いが鼻につく。

「麦野の居場所を、と言いたいけどこれじゃ聞けない訳よ」

大量の血でコンクリートの床に血溜まりを作った本名不祥は倒れ、浅い呼吸を繰り返すばかりだ。

痛みに喘ぐことも、動くことも出来ずにいる本名不祥の頭をフレンドは踏み付けた。

すると靴裏から微弱ながら押し返そうとする力を感じ、さらに踏む力を強める。

ミシッと軋む音が聞こえたが、フレンドは気にしない。

「アガッ! アアア……!」

「抵抗しない方がいいよ。もっと踏む訳になるから。アンタは質問に答えて」

装填されている弾を確認すると、リロードして突きつけた。

「質問にちゃんと答えてよ。たぶんそんなじゃ死なないんでしょ？それとも、腹にもつとぶち込まれたい訳？」

「…んの、うっ！……クソ、ガキ」

「話せるみたいね。なら麦野はどこ？」

血でヌラヌラと真っ赤濡れた唇が悪辣に歪む。

「はぁ、自分でゴホ！……ッ探せ」

「うん。アンタもういない」

フレンダの指が迷いなくトリガーを引く。銃口が火を噴き、反動が手元から伝わって銃が弾き飛ばされた。

気が付けば、フレンダは本名不祥から離れていた。これは、裏社会で身につけた直感というものだろう。

「アギヤハ！ヒヤハハハハハハ！！」

それに、反動だけで銃は飛んだりしない。反動で弾き飛ばされた、この誤認の正体を確かめたいが、屍が起き上がるように禍々しく血を垂れ流しながら狂った笑い声を上げて、その目の瞳孔は開き見た者を恐怖のどん底に突き落とす気迫があった本名不祥からフレンダは目が離せない。

殺される。根拠なんて無い。心臓を鷲掴みにされたような威圧感に

呼吸が浅くなる。

「クカカカカ、ギャハ！……いいぜエ上等オだ。愉快的オブジェに変えてやンぞオ！！」

「ひっ！」

悲鳴が喉に張り付き出ない。

どうなっている。立場が一瞬で逆になっているではないか。圧倒的な殺気と、死臭を漂わせるその姿は死神。

なにが何だか分からなくなってパニックになったと同時に、フレンドの頭はどこかはつきりとしていた。ああ死ぬんだ。と思えるくらいに。

涙も出ないくらいに恐ろしい圧倒的な死が手を伸ばす。自分の生命を摘み取る存在が血の臭いを運んできた。

「どオした？逃げねエなら挽き肉になっちまうぞ」

死神は嗤う。

フレンドの首に手を掛けようとして、その腕を下ろした。

「……なんてね。君を恢復させたように弾丸一つじゃ掠り傷程度さ。さっきは大人気なくしちゃったけど」

「ふえ？」

撃たれた所に手を添えるとグチュ、ビチィ！と新鮮な肉を弄り回したような湿っぽい音がした。なにをどうしたのか分からないが、取り敢えず回復はしたらしい。

腹から手を離す。そのとき持っていたのは、血がついた弾丸だった。

「内臓と肉と神経と血管その他諸々を再生するとき邪魔だったからねえ。肉の再生能力使って押し出したんだ。痛かったよお、でも君があんな行動に出るとは思わなかった。なんで？ どうして、行動理由はなに？」

「命拾い、したの？」

「それより私の質問に答えて欲しいねえ。元から殺す気なんてないよ」

その言葉を完全に信じた訳ではないが、フレンダの肩から力が抜けた。

しかしへたり込まないのは最後の意地だ。

「別に、友達の大切な居場所を守りたいと思うのは駄目な訳？ 確かに、胸なんて張れない理由だけど」

「胸張っていいんじゃない？ だって『アイテム』のメンバーで唯一抛り所と居場所がある奴なんで、フレンダくらいなもの。居場所って言うのがどんなもんか、一番知ってるのは君だけだ。その答えを出せるのは、きっと君だけさ。妹さんに顔出しくらいしなよ」

「…………どこから聞いたの？」

もう驚かない。妹がいるのを知られていても、『暗部』という明日も無事であるか分からない場所に居るからこそ、妹から離れ仕送りしている事も。全部お見通しでも不思議じゃない。

「聞いてないよ調べたのさ。プライバシーの侵害だけど、多目に見てねえ」

「なんでそんな事を調べるの？」

「それは、一人分の世界を創るため。そして君たち『アイテム』を集めたのさ。思ったより効果は無かったけど」

彼女の発言は爪先で転がすくらい、人の一生を重んじていなかった。

一人分の世界（後書き）

新年　　明けましておめでとう御座います。

むしろ、明けました。

今年は良い一年になるといいですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2125x/>

とある奇跡の平行世界

2012年1月4日14時16分発行